

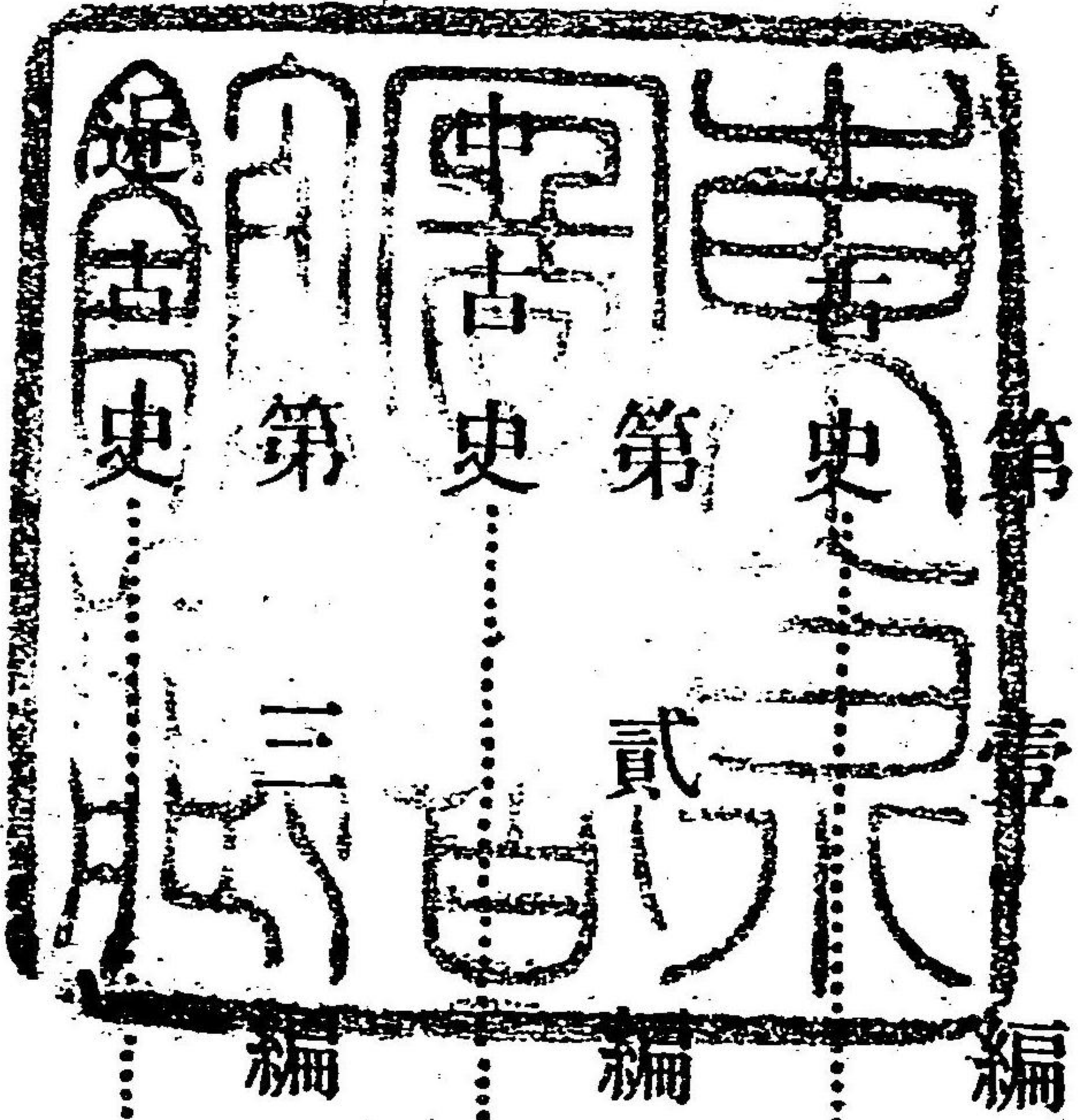
内山正如編述

受驗
問答
日本歷史千題

東京 博文館藏版



問答——本歷史——二——題目次



從一頁
至十九頁

問答四十三題

從十九頁
至六十七頁

問答一百題

從六十七頁
至百十二頁

問答九十七題

從百十二頁
至百四十三頁

問答五十三題

從百四十三頁
至百七十二頁

問答四十四題

近世史
第四編

第五編

今世史

第六編

實地試驗問題答案……………從百七十二頁至百七十八頁

問答七題

雜題答案……………從百七十八頁至百九十四頁

問答三十三題

諸學校入學試驗問題……………從百九十四頁至百九十七頁

問五十七題

附錄

重要國事年代史……………從百九十九頁至二百十六頁

問答百二十八題

已上

受驗問答 日本歷史一千題



上古史

內山正如編述

日本帝國創始ノ有様ヲ問フ

謂ク此古ノ初メ天御中生及高皇產靈神皇靈ノ三神齊シク天地ヲ鎔成シ、萬物ヲ造化セルヲ以テ之レヲ造化ノ三神ト稱ス、其後伊弉諾尊、伊弉冊尊ノ二神ニ詔シ、天瓊矛ヲ賜ヒ、以テ本邦國ヲ經營セム

是ヲ本邦創始ノ祖神トス、大八洲國トハ淡路州、伊豫二名

洲今ノ筑紫洲九州壹岐洲、對馬洲、隱岐洲、佐渡洲、大日本トヨホキツ豊秋津洲今ノ本土ノ八大島ナリ、

諸冊ノ二神此等ノ諸國ヲ平定セシ後、其子天照太神ニ高天原ヲ治メシメ即大和地方素盞鳴尊

ニハ根國出雲石見見地方月讀尊ニハ海原ソナハラ球琉球ヲ治メシム、三神全國ヲ三分シテ之ヲ治メ、天照太神

其總括ノ權ヲ有ス

(二) 天照太神天磐戶ニ入り玉フ事ヲ問フ

謂ク太神ノ弟素盞鳴尊勇悍ニシテ暴行多シ、太神之ヲ怒リ、天磐戶ニ入りテ幽居ス、是

ニ於テ群臣相謀リ寮ヲ設ケ樂ヲ奏シ、天鈿女命窟前ニ歌舞ス、太神愠漸ク解ケテ微ニ
 磐戸ヲ開ク、手力雄命太神ヲ迎出ス、是ニ於テ諸神相議シテ素盞鳴尊ヲ逐フ、尊出雲ノ
 倭之川上ニ到リ、八岐大蛇（賊徒ノ名）ヲ斬リ、須賀ニ抵リ稻田媛ヲ娶リ、宮殿ヲ造リテ此ニ居
 ル、尊ノ子ヲ大己貴命ト云フ、少彥名命ト與ニカヲ戮セテ大ニ國土ヲ經營シ、且ツ醫藥
 禁厭ノ法ヲ始ム

(三) 群神ノ此國ヲ統治セシ有様ヲ問フ

謂ク太神ノ子ヲ天忍穗耳尊ト云フ、尊ノ子ヲ瓊々杵尊ト云フ、太神瓊々杵尊ヲシテ豐葦
 原中國ヲ治メシメント欲シ、武甕雷命等ヲシテ出雲ニ降り、勅ヲ大己貴命ニ傳ヘテ國ヲ
 去ラシム、然レ下國未タ騷擾シテ平定セス、故ニ武甕雷命ト與ニ悉ク國土ヲ平定シテ之
 ヲ奉還ス、瓊々杵尊乃チ群臣ヲ率井テ日向ノ高千穗峯ニ降り、政ヲ布ク、皇子彥火々
 出見尊、皇孫鷓鴣草葺不合尊三代相繼キ、多ク年所ヲ經タルヲ以テ、中國漸ク王化ニ遠
 カリ、人民各所ニ部落ヲナシ各酋長アリテ侵略爭鬪ヲ事トスルニ至レリ、其酋長ノ重
 ナル者ハ大和ニ長髓彥、兄磯城、弟磯城等アリ、紀伊ニ名草戸畔、丹敷戸畔等アリ

(四) 三種神器ノ御由來ヲ略示セヨ

謂ク三種ノ神器トハ八咫鏡、草薙劍、八坂瓊曲玉是ナリ、此三種ハ天祖天照太神皇孫
 瓊々杵尊ニ授ケ、乃チ勅シテ曰ク、豐葦原瑞穗國ハ我子孫王タルヘキノ地ナリ、汝就テ治
 ムヘシ、又此鏡ヲ見ルコ余ヲ見ルカ如クセヨ、實祚ノ隆ナルコ天壤ト窮リナカルヘシ、ト
 勅ヒシヨリ、相傳ヘテ天位繼承ノ寶璽トス、而シテ八咫鏡ハ神代ニ太神天磐戸ニ入り玉
 ヒシ時、石凝姥命造リシ所ニシテ、曲玉ハ同時ニ玉祖命ノ造ル所ナリ、劍ハ素盞鳴尊出
 雲ノ八岐大蛇ヲ斬リテ獲タル所ナリ、之ヲ草薙ト云フハ後日本武尊東征ノ時ニ至リテ附
 名セシナリ、初ハ叢雲ノ劍ト云フ

(五) 神武天皇ノ創業ヲ問フ

謂ク第一代神武天皇ハ天照太神五世ノ孫ニシテ、鷓鴣草葺不合尊ノ第四子ナリ、聰明勇
 武夙ニ大志アリ、天皇日向高千穗ノ宮ニ群臣ヲ集メ議シテ曰ク、此國ハ往昔天神ノ我祖
 ニ賜ヘル所ナリ、今ヤ群會割據シテ相統一スル所ナシ、朕獨リ西偏ニ偏在スヘカラス、
 我聞ク東方ニ美地アリ、山岳四周シ以テ大業ヲ弘メ、天下ニ臨ムニ足ル、宜ク就テ都ヲ
 東方ニ定ムベシト、乃チ甲寅ノ歲親ラ皇族ヲ帥テ日向ヲ發ス、筑紫、安藝等ヲ經テ吉備
 ノ國ニ至リ、行宮ヲ造テ此ニ留マルコ三年、兵船兵食ヲ蓄ヘ、海ニ航シテ浪速河内ヲ歷
 テ大和ニ入り、膽駒山ニ抵ル、巨酋長髓彥、饒速日命ヲ推シテ主トシ、皇軍ノ來ルヲ聞キ
 孔舍衛坂ニ拒ク、皇軍利アラヌ、皇庶兄五瀨命流矢ニ中リテ薨ス、天皇乃チ退キテ弱ヲ示

シ、轉シテ紀伊ニ入り、名草戸畔ヲ誅シ、荒阪津ニ至リ、丹敷戸畔ヲ誅シ、又進ンテ菟田ニ至リ、兄猾ヲ誅ス、弟猾欸ヲ納ル、時ニ國見岳ニ八十梟帥アリ、磐余ニ兄磯城弟磯城アリ、皆要害ニ據ル、天皇乃チ八十梟帥及ヒ兄磯城ト戰テ之ヲ斬ル、弟磯城來降ス、遂ニ進ンテ長髓彦ヲ擊ツ、連戰利アラズ、轉シテ大和ニ入り屢ハ賊ヲ破ル、饒速日命皇軍ノ竟ニ抗スベカラサルヲ知リ、長髓彦ヲ殺シ、衆ヲ率井テ歸順ス、是ニ於テ諸賊悉ク誅ニ伏シ、中州全ク平ク、乃チ都ヲ大和橿原ニ定メ即位ノ禮ヲ行ヒ玉フ

(六) 神武天皇即位ノ狀如何

謂ク元年辛酉正月朔天皇大和畝傍山ノ地ヲ相シテ都トシ、橿原ノ宮ヲ造リテ即位ノ大禮ヲ行ヒ、神籬ヲ建テ八神ヲ祭り、國家ヲ鎮護ス、天富命、諸齋部ヲ率ヒテ神器ヲ正殿ニ奉シ天種子命祭祀及ヒ朝政ヲ主トリ、天神ノ壽詞ヲ奏ス、可美眞手命、内物部ヲ率ヒ、銚楯ヲ執リ儀衛ヲ嚴ニシ、道臣命來目部ヲ率ヒテ宮門ヲ護リ、群臣朝賀セリ

(七) 左右輔政及ヒ國造縣主ノ職ハ如何

謂ク神武天皇壬戌二年ニ、諸臣ノ功ヲ論シ賞ヲ行ヒ、宇麻志麻治命、道臣命武功最モ多キヲ以テ二人ヲシテ兵事ヲ掌ラシメ、天種子命及ヒ天富命ニ左右ニ侍シテ祀政ヲ輔佐セシメ、尙ホ諸功臣ヲ封シテ國造縣主ト爲シ、地方ノ政務ニ任シ、治國ノ秩序ヲ定ム、是

レ我カ建國ノ源始ナリ

(八) 神武天皇御即位ヨリ現代ニ至ル政權ノ變遷如何

謂ク神武天皇御即位ヨリ宣化天皇ニ至ル、一千百九十九年間ハ御親政ニシテ、欽明天皇ヨリ皇極天皇ニ至ル百十年間ハ政權蘇我氏ニ歸シ、孝德天皇ヨリ文德天皇ニ至ル二百三十年間ハ政權皇室ニアリ、清和天皇ヨリ後冷泉天皇ニ至ル二百十年間ハ政權藤原氏ヨリ出ツ、後三條天皇及ヒ白河天皇ノ二代十八年間ハ御親政ニシテ、堀河天皇ヨリ安徳天皇ニ至ル九十九年間ハ政權院中ニ在リ、後鳥羽天皇ヨリ花園天皇ニ至ル百三十三年間ハ政權鎌倉ヨリ出テ、後醍醐天皇ヨリ後村上天皇朝ニ至ル、光明天皇ヨリ後奈良天皇朝ニ至ル二百二十二年間ハ政權足利氏ヨリ出ツ、正親町天皇及後陽成天皇二代五十四年間ハ政權織田豊臣ノ兩氏ヨリ出ツ、後水尾天皇ヨリ孝明天皇ニ至ル二百五十六年間ハ政權徳川氏ニ出ツ、今上天皇ノ御宇ニ至テ王政復古シ、明治二十二年二月十一日ヲ以テ帝國憲法ヲ發布シ、茲ニ立憲政體ノ基礎ヲ開カセ玉フ、

(九) 綏靖天皇及七朝ノ垂拱如何

謂ク第二代綏靖帝ハ神武帝ノ第五子ナリ、元年庚辰天位ニ即キ、都ヲ葛城ニ遷ス、帝狀貌魁傑資性純孝又武技ヲ善クス、尋テ安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化ノ七

帝皆ナ叡明ニ在マシテ其間凡ソ四百八十餘年、人民泰平ノ治澤ニ潤ヒ、無爲ノ德ヲ頌ス、我國垂拱ノ時代ト云フヘシ

(一〇) 手研耳命ノ亂ヲ記セ

謂ク綏靖帝初メ庶務ヲ庶兄手研耳命ニ委任ス、手研耳命久ク萬機ヲ宰リ、遂ニ不軌ヲ謀ル、帝之ヲ知り母兄神八井耳命ト謀リ、其困臥スルヲ窺ヒ、八井耳命ヲシテ之ヲ射サシメントス、八井耳命戰慄シテ矢ヲ發ツ能ハズ、帝英毅果斷アリ、其弓矢ヲ奪フテ之ヲ射殺シ、以テ皇基ヲ正シ、事平ク

(一一) 將軍ヲ置クハ何朝ニ始マリシヤ

謂ク第十代崇神天皇ノ朝ニシテ、同帝十年ニ大彥命孝元天子ヲ北陸ニ、武渟川別カハワケノ子東海ニ、吉備津彥ヒコ皇ヒコ靈ミコ天子ミコヲ西海ニ、道主命ミチヌシ皇ミコ化カ天子ミコヲ丹波ニ遣シ、並ニ將軍ノ印綬ヲ授ケ、兵ヲ率ヒテ各道ヲ巡察セシメ、從ハサル者アラハ之ヲ征討スルヲ聽ス、之ヲ四道將軍ト云フ

(一二) 崇神天皇ノ御聖德ヲ問フ

謂ク天皇聰明ニ在マシテ、大ニ心ヲ治民ニ用ヘ、神祇ヲ崇奉シ仁恤ノ政ヲ施シ玉フ、或ハ船舶ヲ作りテ漕運ヲ便ニシ、或ハ池溝ヲ開キテ水利ヲ通ス、故ニ百姓殷富皆ナ尊稱シ

テ御肇國天皇ト云フ

(一三) 神器ヲ遷セシハ何朝ノ時ナリヤ

謂ク崇神帝ノ時三種ノ神器ヲ大和ノ笠縫邑ニ遷シ、天祖ヲ祭り、皇女豐鍬入姫トヨスキイリヒメニ命シテ祀事ヲ掌ラシメ玉フ

(一四) 外國人ノ始メテ來貢セシハ何朝ノ時ナリヤ

謂ク崇神帝ノ御宇六十五年ニ任那國朝鮮ノ西南部始メテ入貢ス、其使者蘇那葛叱智越前國筭飯浦ニ至ル、既ニシテ朝廷ニ出テ、奏スラク、「外臣カ國ノ東北ニ一地アリ巴汝ト名ク、地方三百里人口亦多シ、新羅屢々來攻メ爭亂絶ユルヲナシ、願クハ良將軍ヲ得テ之ヲ鎮セン」ト、天皇直ニ鹽乘津彥シホノリツヒコヲ遣ハシテ之ヲ鎮セシメ玉フ、是ヨリ外邦又帝德ニ服ス、

(一五) 狹穗彥ノ反ヲ記セ

謂ク垂仁天皇ノ御宇ニ皇后ノ兄狹穗彥異志ヲ抱キ、皇后ヲ脅カシテ弑逆ヲ謀ラントス、天皇一日皇后ノ御膝ヲ枕トシテ眠ラセ玉フ、皇后坐ロニ兄ノ言ヲ思フテ悲ミニ堪ヘス、御涙潜然トシテ滴リ龍顔ニ灑ク、天皇驚キ覺メテ宣ハク「朕今錦色ノ小蛇來リテ頸ヲ捲キ、大雨狹穗ヨリ來リテ朕カ面ヲ濕フスヲ夢ム」ト皇后畏ミテ具ニ兄ノ異圖ヲ自首ス、天皇乃チ八綱田ヤツナダニ命シテ狹穗彥ヲ攻メシム、皇后兄ノ滅亡ヲ座視スルニ忍ヒズ、皇子ヲ

抱キテ兄ノ寨ニ投ス、八綱田火ヲ縱チテ寨ヲ攻ム、皇后乃チ皇子ヲ寨外ニ出シ、兄ト共ニ焚死ス

(二六) 土偶ノ起因ヲ問フ

謂ク垂仁帝二十八年皇后崩ス、是ヨリ先キ皇族及ヒ貴人ノ崩御アレバ其侍者從僕自ラ死シテ之ニ隨ヒ、或ハ之ヲ生理スル陋習アリ、之ヲ殉死ト云フ、天皇深ク之ヲ憐レミ、勅シテ之ヲ禁止ス、野見宿禰^{ノミスツチ}土偶ヲ作りテ殉死ニ代ヘンコヲ請フ、天皇之ヲ嘉シ、定テ永制ト爲ス、宿禰ニ姓ヲ賜フテ土部^{トベ}ノ臣ト曰ヒ、世々大喪ヲ司ラシム

(二七) 野見宿禰ノ事ヲ問フ

謂ク宿禰ハ出雲ノ人ニシテ頗ル勇力アリ、嘗テ當麻蹶^{タヘマケ}起ナル者アリ、己ノ膂力天下ニ敵ナシト誇レリ、帝之ヲ聞テ宿禰ト力ヲ角ハシム、宿禰其肋骨ヲ折リ之ヲ斃ス、乃チ帝蹶速ノ田宅ヲ奪フテ宿禰ニ賜フ、是レ本邦相撲ノ嚆矢ナリ

(二八) 神祠ヲ伊勢ニ遷スハ何ノ朝ノ時ナリヤ

謂ク垂仁天皇二十五年、皇女倭姫ヲシテ豐饗入姫ニ代テ神器ヲ祀ラシム、倭姫奏シテ祠ヲ笠縫邑ヨリ伊勢^{ワタテヒ}ノ度會ニ還シ、齋宮ヲ五十鈴川^{イソガハ}ノ上ニ建ツ、是レ今日稱スル所ノ内宮ナリ

(二九) 熊襲ノ反ヲ問フ

謂ク景行天皇十二年筑紫ノ熊襲反ス^{熊襲トハ今ノ薩摩大隅及日向ノ南方地名}帝親征シテ周防國ニ至リ賊ヲ降シ、又進ンテ豊前豊後ノ諸賊ヲ討伐ス、竟ニ日向國ニ至リ行宮ヲ作りテ之ニ居リ熊襲ヲ征セントス、而シテ賊衆頗ル多シ、帝因テ謂ラク兵ヲ假ラズ謀ヲ以テ平定スルニ如カスト乃チ群臣ニ諮ル、一臣曰ク、賊魁ニ女アリ姉ヲ市乾鹿文^{イチノカキヤ}ト云ヒ妹ヲ市鹿文^{イチノカキヤ}ト云フ、併テ之ヲ納レ以テ情体ヲ探リ、其不意ヲ侵サハ賊必ス敗レント、帝之ニ從フ、市乾鹿文奏シテ曰ク、陛下敵情ノ服セザルヲ憂フルコト勿レ、妾良計アリト乃チ從兵數人ヲ請ヒ、家ニ歸リテ父ニ醇酒ヲ飲マシメ、其醉ヘルヲ伺ヒ密カニ父ノ弓絃ヲ截チ、從兵ヲシテ之ヲ殺サシム、帝市乾鹿文ノ不孝ヲ惡ミテ之ヲ誅シ、其妹市鹿文ヲ火國^{ヒノクニノミヤコ}造ヲ賜フ天皇日向ニ留ルコト六年ニシテ熊襲悉ク平ク

(三〇) 日本武尊ノ熊襲ヲ討チシ始末ヲ問フ

謂ク景行天皇二十七年熊襲又反ス、皇子日本武尊ニ命シテ征討セシム、尊時ニ年十六、乃チ美濃尾張ノ射手ヲ從ヒテ筑紫ニ至リ、賊情ヲ探リ伺フ、賊魁川上梟帥會々族類ヲ集メテ宴ヲ張ル、尊女装シテ婢妾ノ中ニ混シ宴室ニ至ル、梟帥尊ノ容色ヲ愛シ座側ニ置ク、梟帥醉臥ス、尊乃チ之ヲ刺ス、梟帥呼テ曰ク、汝何者ゾ、尊對ヘテ曰ク吾ハ今上天皇ノ皇

子ナリ、梟帥驚テ曰ク吾勇武ヲ以テ稱セラル、然レモ未タ皇子ノ如キ者ヲ見ズ、願クハ日本武尊ノ尊號ヲ奉ラント言訖テ死ス、是ヨリ日本武尊ト稱ス、既ニシテ餘黨悉ク平ク

(三) 日本武尊ノ東夷ヲ征スル始末ヲ問フ

謂ク景行天皇四十年東夷^{蝦夷}反ス、帝乃チ日本武尊ヲ遣シテ之ヲ征ス、尊先ツ伊勢ニ至リ神廟ヲ拜ス、倭姫命神劍及燧囊ヲ授ク、遂ニ進ンデ駿河ニ至ル、賊僞リ降り尊ヲシテ游獵セシム、賊俄ニ火ヲ縱テ野ヲ燒ク、尊乃チ劍ヲ拔キ草ヲ薙キ燧ヲ鑽テ火ヲ放ツ、火反テ賊ニ向ヒ、賊皆焚死ス、因テ神劍ヲ草薙ノ劍ト名ク、又進ンテ上總ニ航シ轉シテ陸奥ニ入り蝦夷ニ抵ル、賊酋風ヲ望ンテ降付シ蝦夷盡ク平ク、還テ俘ヲ大廟ニ獻シ、吉備彦ヲ遣テ捷ヲ京師ニ奏シ尋テ、能褒野ニ薨ス、時ニ年三十二

(三) 大臣大連ヲ置キシハ何朝ナリヤ

謂ク成務天皇三年ニ武内宿禰ヲ以テ大臣ト爲シ、又仲哀天皇元年ニ大伴武^{タケモチ}以テ大連ト爲ス、是レ大臣大連ヲ置クノ始メナリ

(三) 國縣ヲ分チ職制ヲ置キシハ何朝ナリヤ

謂ク成務帝ノ朝ニシテ國造、稻置ノ職制ヲ置ク、國造ハ一國ニ一人稻置ハ一邑ニ一人而シテ國造一人稻置十人ヲ統ヘ、稻置一人民家八十戸ヲ司ル

(二四) 神功皇后三韓ヲ征セシ目的如何

謂ク景行帝ノ朝ヨリ熊襲屢々反ス、是レ新羅ノ應援ヲナスニ因ル、故ニ新羅ハ根據ニシテ熊襲ハ枝葉ナリ、先ツ其根據ヲ斃サハ熊襲ハ戰ハスシテ自ラ服スヘキヲ以テ、神託ニ托シ以テ將士ヲ鼓舞セシナリ

(二五) 三韓征伐ノ結局如何

謂ク仲哀天皇熊襲ヲ征セントス、皇后之ヲ諫メテ曰ク熊襲ノ屢々反スルハ新羅ノ應援ヲ爲スニ因ル、故ニ先ツ新羅ヲ征スルニ如カスト、帝之ニ從ハス熊襲ヲ征シテ利アラズ、翌年帝暴ニ崩ス、皇后大臣ト謀リ秘シテ喪ヲ發セス、自カラ丈夫ノ裝ヲ爲シ、三軍ニ將トシテ一撃ノ下ニ熊襲ヲ討チ、遂ニ進ンテ新羅ニ至ル、船海潮ニ激シテ浪國中ニ及ブ、新羅王波沙寐錦大^{ハサムキ}ニ驚テ曰ク、神兵敵スヘカラスト、乃チ面縛シテ降ル、皇后新羅王ニ命シ、質ヲ納レ盟ヲ立テ金銀絹帛八十艘ヲ徵シ、以テ其罪ヲ償ハシム、爾後之ヲ以テ定額トス、高麗^{コヤクダラ}百濟風ヲ望ンテ降ル

(二六) 文教ノ起源ヲ問フ

謂ク應神天皇十五年ニ百濟王其子阿直岐^{アチキ}ナル者ヲシテ良馬ヲ貢セシム、阿直岐能ク經典ニ通ス、帝皇子稚郎子^{ワカイヤツコ}ノ師トナシテ經典ヲ學ハシム、阿直岐更ニ其國ノ博士王仁^{ワニ}ヲ薦ム、

乃チ王仁ヲ徵ス、明年王仁、治工織工釀工ヲ率ヒテ來タリ、論語十卷千字文一卷ヲ獻ス、
稚郎子亦從テ學フ、是本邦文教ノ起源ナリ

(二七) 工藝ノ傳來ヲ問フ

謂ク應神帝三十七年ニ至リ、阿知使主^{オミ}漢^{オミ}ヲ吳ニ遣ハシ、織縫ノ工女ヲ求ム、是ヨリ前キ、
阿知使主漢人ヲ率井テ歸化ス、是ニ至テ我使ヲ尋テ吳ニ入ル、吳主女工四人ヲ遣シ來ラ
シム、是工藝傳來ノ始メナリ

(二六) 稚郎子大鷦鷯二皇子讓位ノ次第如何

謂ク應仁天皇^{ワカイヤツコ}稚郎子ヲ愛シ立テ、太子ト爲ス、帝崩ス、稚郎子素ヨリ其兄大鷦鷯^{オホヤサキ}ノ賢ヲ
知テ、位ヲ讓ラント欲シテ敢テ位ニ即カス、避ケテ菟道^{ウジ}ニ往ク大鷦鷯聽カス、互ニ相讓
ル^一三年、太子之ヲ歎キ遂ニ自殺ス、大鷦鷯大ニ慟哭ス、群臣勸進シテ遂ニ位ニ即ク、
之ヲ仁德天皇ト云フ

(二五) 仁德天皇ノ仁政ヲ問フ

謂ク帝位ニ即キ難波ニ都ス、是ヲ高津宮ト云フ、帝至仁ニシテ百姓ヲ見ル^一慈母ノ赤子ニ
於ケルカ如シ、一日帝高臺ニ登リ、人烟ノ稀疎ナルヲ望見シ、民ノ貧苦ヲ知り、詔シテ
三年間ノ租稅ヲ免シ、痛ク節儉ヲ行ヒ、海内殷富教化大ニ行ハレ、刑罰措テ用ヒサル^一

二十餘年、崩スルニ及ンテ天下ノ兆民父母ヲ喪スルカ如シ

(三〇) 武内宿禰ノ事蹟ヲ畧示スヘシ

謂ク武内宿禰ハ屋主^{ヤスシホシ}忍男^{ニゲヲノ}武雄^{タケヲノ}心命ノ子ニシテ中古第一ノ偉人ナリ、景行天皇二十五年武
内命ヲ奉ンテ單身東北ヲ跋涉シ其風土ヲ巡察ス、二十七年歸テ東夷征討ノ事ヲ奏ス、天皇
遂ニ皇子日本武尊ヲシテ之ヲ征平セシメ玉フ、成務天皇御位ニ即クニ及ビ、武内ヲ以テ大
臣トス、仲哀天皇熊襲ヲ征シテ筑紫ニ崩シ玉フニ及ビ皇后ノ命ヲ奉シテ御屍ヲ豊浦ノ宮
ニ斂殯ス、次テ皇后三軍ヲ率ヒテ三韓ヲ征伐シ玉フニ及テ、武内ノ雄圖立功最モ多キニ居
ル、應神天皇九年ニ勅ヲ奉シテ筑紫ヲ監察ス、弟甘美宿禰シテ曰ク武内筑紫ニ據リテ叛ス
ト、天皇怒テ使ヲ遣ハシ武内ヲ殺サシム、武内單身闕ニ詣リテ自カラ明カニス、天皇武内
及ヒ甘美ヲ鞠訊シ二人ヲシテ湯ヲ探リテ眞僞ヲ神ニ質サシム、甘美罪ニ服ス、是ニ於テ
武内忠誠益彰ナリ、仁德天皇ノ五十五年ニ武内薨ス、武内、景行、成務、仲哀、神功、
應神、仁德ノ六朝ニ歷仕シテ隱然國家ノ重キヲ加フ、宿望一世ニ冠タリ

(三一) 佛教傳來ノ始末如何

謂ク佛教ノ我國ニ傳來シテ始メテ天朝ニ達セシバ欽明天皇ノ朝ナリ、同帝ノ十三年百濟
ヨリ佛像經論及佛具ヲ獻シ、上表シテ其功德ヲ讚美ス、帝群臣ヲシテ其禮否ヲ議セシメ

玉フ、蘇我稻目之ヲ禮セント請フ、物部尾與、中臣勝海、俱ニ奏シテ曰ク、國家ハ天地社稷百八十神ヲ以テ祭ル、蕃神宜ク禮スベカラズト、帝乃チ佛像ヲ稻目ニ賜フ、稻日向原ノ家ヲ捨テ、寺ト爲シ之ヲ奉ス、時ニ諸國疫癘大ニ流行ス、尾與等以テ佛ノ致ス所ナリト奏請シ、其寺ヲ燒キ佛像ヲ難波ノ堀江ニ投ス、是レ佛像渡來ノ始ナリ

(三) 佛教傳播ノ狀況如何

謂ク敏達天皇ノ朝ニ至リ、百濟王又經論及律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造佛工、造寺工各一人ヲ獻ス、又新羅ヨリモ佛像ヲ獻ス、稻目ノ子馬子百濟ノ佛像二軀ヲ獲テ佛宇ヲ第中ニ造テ之ヲ安ンス、後又夕疫癘大ニ流行シ、民多ク死ス、物部守屋等奏シテ寺塔ヲ焚キ、僧尼ヲシテ還俗セシメント請フ、既ニシテ佛像及寺塔ヲ毀チ、僧尼ヲ撻ツ、既ニシテ馬子亦請テ之ヲ禮セントス、帝詔シテ曰、汝獨リコレヲ行ヘ、他人ヲシテ爲サシムルヲ勿レト、馬子大ニ悅ヒ僧尼ヲ禮シ、新ニ精舍ヲ營ム、用明天皇ノ時ニ至リ、厩戸皇子佛法ヲ歸敬ス、天皇時ニ疾ス、詔シテ佛ニ歸セント欲ス、物部守屋等固ク其不可ヲ陳ス、而馬子之ヲ慫慂シ、僧ヲ延テ禁中ニ入ル、守屋之ヲ見テ大ニ怒リ、既ニシテ馬子等已ヲ害セント欲スルヲ聞キ、阿都ニ適キテ之ヲ避ク、厩戸馬子兵ヲ以テ一人ヲ攻メテ之ヲ殺ス、此ヨリ厩戸馬子共謀シテ佛法ノ弘通ヲ圖ル、於是欽明天皇ノ十三年ヨリ推古天皇ノ時マテ

七十二年間ニ四十六ヶ寺八百十六人ノ僧ト、五百九十六人ノ尼アルニ至レリ

(三) 馬子ノ暴逆如何

謂ク第三十二代崇峻帝、馬子ノ專肆驕縱ナルヲ惡ミ、將ニ刑戮ヲ加ヘントス、會々山猪ヲ獻スル者アリ、帝之ヲ指シテ曰ク、何時カ此猪ノ如ク、朕カ嫌フ所ノ人ヲ斷ント、又厩戸皇子ニ謂テ曰ク、馬子ハ内ニ私慾ヲ恣ニシ、外ハ佛教ヲ崇ヒ、毫モ忠愛ノ心ナシ、朕堪フル能ハスト、皇子對テ曰ク、陛下唯タ之ヲ忍ベト、馬子之ヲ聞キ大ニ懼レ、東漢駒ヲシテ帝ヲ内寢ニ刺サシム、時ニ皇子哭シテ曰ク、過去ノ報ナリト、已ニシテ群臣相議シテ推古帝ヲ立ツ、

(三) 本邦女帝ノ始メハ如何

謂ク推古天皇ヲ以テ始トス、帝ハ用明天皇同母ノ妹ナリ、而シテ蘇我氏ノ出ナリ

(三) 雄略帝ノ后妃ハ如何

謂ク帝曾テ皇后ト車ニ御シ葛城山ニ獵ス、俄ニ野猪馳セ至ル、帝舍人ニ命シテ之ヲ射ラシム、舍人怖レ匿ル、猪怒リ帝ニ觸ル、帝弓ヲ取リテ之ヲ支ヘ、足ヲ揚テ之ヲ殺シ、因テ舍人ヲ罪セントス、皇后諫テ曰ク、獸ノ故ヲ以テ人ヲ殺サハ、天下ノ民之ヲ何トカ云ハント、帝大ニ感シ玉ヒ、左右ニ謂テ曰ク、獵者ハ獸ヲ得朕ハ善言ヲ得タリト、遂ニ舍

人ヲ釋サル

(三六) 億計王弘計王ノ事ヲ問フ

謂ク二王ハ履中天皇ノ孫、市邊押磐皇子ノ子ナリ、曩ニ雄略天皇押磐皇子ヲ殺セシ時
 二王播摩ニ遁レ、忍海細見ノ家僮トナル、是時國司來目部小楯新嘗ノ供物ヲ徵セン爲メ
 一日細目カ家ニ宴ス、弘計王母兄ニ謂テ曰ク、亂ヲ避ケ身ヲ潜ムト已ニ數年、名ヲ顯ハ
 シ時ヲ得ルハ今夕ニアリト、億計王悚然トシテ曰ク、自カラ露ハシテ害セラレンヨリ隱
 忍身ヲ全フスルニ孰レソヤ、弘計王曰ク、久シク厠役ニ苦シム、寧ロ大名ヲ揚ケテ死セ
 ント、小楯二王ノ常人ニアラサルヲ知り、頻ニ請フ、億計王乃チ起テ舞ヘリ、既ニシテ弘計
 王衣帶ヲ整ヘ徐ニ歌舞ヲナセリ、歌中寓スルニ諷詞ヲ以テス、小楯之ヲ奇トシ更ニ復タ
 唱ヘシム、弘計王即チ自ラ露ハシテ曰ク、我ハ是レ去來穗別天皇ノ子押磐皇子ノ胤ナリ
 ト、小楯大ニ驚キ席ヲ離レテ再拜シ、謹テ供奉ヲ厚クシ、京ニ還テ具ニ其狀ヲ奏セリ、
 清寧天皇聞テ大ニ喜ヒ、億計王乃皇太子ト爲シ、弘計王ヲ皇子ト爲ス、弘計王ハ即チ顯
 宗天皇ニシテ、億計王ハ仁賢天皇ナリ

(三七) 厩戸皇子ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク厩戸皇子ハ用明天皇ノ御子ナリ、幼ニシテ聰明十人ノ訴事ヲ兼テ聽テ錯マラス、天

皇之ヲ愛シテ宮南ノ殿上ニ居ラシメ玉フ、因テ號シテ上宮厩戸豐聰耳皇子ト云フ、深ク
 學問ヲ好ミ、文藝ニ長シ、又釋典ニ通曉ス、曾テ憲法十七條ヲ定ム、皇子佛法ヲ信奉シ
 テ蘇我馬子ト結托シ、之ヲ弘布ス、又勝鬘維摩法華等ノ經疏ヲ著ハシ、又四天王、法隆、
 中宮、橘樹、峯岡、池後、葛城、元興、日向、定林、法興等ノ諸寺ヲ建築ス、皇子御年
 四十九ニシテ薨ス、後チ聖德太子ト諡ス、

(三八) 氏族ニ三別アリ其要ヲ問フ

謂ク三別トハ皇別、神別、蕃別ナリ、皇別トハ神武帝以下代々ノ天皇ノ御胤ヨリ出タル
 モノヲ云フ、神別トハ神代ノ諸神ノ裔ニシテ即大國主神等ノ子孫モ此中ナリ、蕃別トハ
 外國ヨリ歸化セシ人ノ子孫ヲ云フ

(三九) 古代ノ家屋ハ如何

謂ク神代ノ世ニハ庶民多ク土窟石窟ニ住居ス、其後始メテ家屋アリ、其制ニ三種アリ、
 天皇、皇族、庶人ナリ天皇及ヒ皇族ノ宮殿ヲ「ミヤカ」又ハ「ミヤ」ト云フ、其造作ハ屋上ニ
 千本檜木ヲ置ク、庶民ノ家屋ハ低矮ニシテ檜木ヲ置カス、其後三韓ト交通スルニ及ンテ、
 瓦、木皮等ヲ以テ之ヲ葺クニ至レリ

(四〇) 古代ノ衣服ハ如何

謂ク衣服ハ筒袖ニシテ其丈膝ニ達ス、其下ニハ褌ヲ穿ツ、而シテ皆ナ左衽ナリ、婦人ハ褌ノ上ニ裳ヲ纏ヒ、金銀寶石ノ環ヲ手足ニ穿チテ裝飾トス、男女ノ頭髮ハ幼稚ノ時ハ垂髻シ、男十二歳已上十五歳未滿ノ者ハ額ノ上ニ結ヒテ總角トス、女十三歳已上ハ頂後ニ結ヒ、其餘髮ヲ皆後ニ垂下ス、當時ハ頭髮ヲ截ツ又鬚髯ヲ剃ルヲナシ、

(四二) 古代ノ食物ハ如何

謂ク一般ノ食物ハ穀物、蔬菜、魚鳥獸ノ肉ニシテ、飲料ハ酒及醴酒ノ如キモノナリ、飲食ノ器具ニハ土器又ハ木葉ヲ以テ製シタルモノヲ用ヘ食事ハ朝夕二回ニシテ晝食ヲ爲サス、佛教傳來以後肉食大ニ減少セリ

(四三) 古代ノ冠婚葬祭ハ如何

謂ク結婚ハ今日ノ如ク媒約ニ由テ行フニアラス、男女先ツ相識テ自ラ種々ノ調査ヲ爲シ、而シ後父母ノ許ヲ乞フテ始メテ婚儀ヲ舉グルヲ例トシ、男子先ツ聘物ヲ贈リ女子ノ家ヨリ机代物ト稱スル采納ノ禮ヲ贈ル、貴人ナレハ新夫妻ノ爲メニ必ス新家ヲ作りテ婚儀ヲ行フナリ、又一夫數婦ヲ娶ルヲ得ルナリ

葬祭ハ五七日間酒食花草ヲ靈前ニ供シ、音樂ヲ奏シテ其靈ヲ祀ル、後石棺ニ屍ヲ斂メ、刀劍服裝ノ諸具ト共ニ山間ニ埋葬ス、貴人ノ墓ニハ必ス墓標ヲ建ツ、又家ニ喪アレハ必

ス室ヲ造ル之ヲ喪屋ト云フ

(四四) 調伊企儺節ニ死スルコトヲ問フ

謂ク欽明天皇ノ朝ニ新羅高麗叛シ又任那ヲ攻メテ我官府ヲ滅ホス、帝其亡狀ヲ怒リ、之ヲ討タシム、我軍士調伊企儺誤テ敵ノ爲メニ擒セラル、虜刀ヲ拔キ之ニ逼リ、其褌ヲ脱シ日本ニ向ヒ日本ノ將我カ腎ヲ啖ヘト呼ハシム、伊企儺却テ新羅王我腎ヲ啖ヘト呼ヒ、遂ニ殺サル

第一編 中古史

(一) 中古史トハ何レノ時代ヨリ區分スルヤ

中古史ハ孝德天皇大化ノ新政ニ始リテ、安德天皇ノ御代平家ノ滅亡ニ終ル、即チ紀元千三百五年ヨリ起リテ、一千八百四十五年ニ至ル其間五百八十年ナリ

(二) 中古時代政權ノ概況如何

此時代ニハ政權始メハ皇室ニアリテ紀綱大ニ振張セリト雖モ、藤原氏權ヲ專ラニスルニ及ヒテ政令地方ニ及バス、在朝ノ官人區々トシテ尸位素餐ニ往スルノミ、後武人崛起シテ忽チ政權ヲ奪ヒ、藤原氏皇室ト共ニ全ク其實權ヲ失フニ至ル

(三) 大化新政ノ變革ヲ示セ

謂ク紀元一千四百年代ノ初ニ當リ、孝德天皇大臣專横ノ後ヲ受ケ、大ニ皇基ヲ擴張シ、中大兄ヲ立テ、皇太子トナシ、以テ政事ヲ補佐セシメ漢土隋唐ノ制度ヲ參酌シテ新ニ郡縣ノ制ヲ布キ、一大改革ヲ行フ是レヲ大化ノ新政ト云フ、大化トハ其時ノ年號ニシテ、蓋シ本邦初メテ年號ヲ建ツルナリ

(四) 大化新政ノ主義性質如何

謂ク主トシテ唐朝ノ制度ヲ採レリ、而シテ其旨トスル所ハ中央集權ノ制ヲ立テ、全國畫一ノ法ヲ布キ、紀綱ヲ振作シ地方族長ノ權勢ヲ打破スルニアリ

(五) 大化新政ノ重ナル事實ヲ舉ケヨ

謂ク大化二年ニ四綱ノ新詔ヲ布ク

第一ニ曰ク祖宗立ル所ノ子代ノ民、處々ノ屯倉及ビ別、臣、連、伴造、國造村首ノ有スル所ノ部曲田莊ヲ罷ム、仍テ食封ヲ大夫以上ニ賜フ、各差アリ布帛ヲ官人百姓ニ賜フ、亦差アリ第二ニ曰ク始メテ京師ヲ修メ、畿内國司郡司ヲ置ク、關塞斥候、防人驛傳ハ、鈴契ヲ造リ、山河ヲ定ム、凡ソ京ハ坊毎ニ長ヲ置キ、四坊ニ令ヲ置キ、戶口ヲ案檢シ、奸非ヲ督察ス、凡ソ畿内ハ東ハ名墾橫河ヨリ、南ハ紀伊兄山ヨリ、西ハ赤石櫛淵ヨリ、北ハ近江合坂山

ヨリ以內ヲ畿内ト爲ス、並ニ大領小領主政主帳ヲ置ク、凡ソ驛傳ハ皆ナ鈴傳符刻ノ數ニ依ル、諸國及ヒ關ハ鈴契ヲ給ス、並ニ長官之ヲ報ル、

第三ニ曰ク始メテ戶籍計帳班田收授法ヲ造ル、凡ソ五十戶ヲ里ト爲シ、里毎ニ長ヲ置キ、戶口ヲ案檢シ、農桑ヲ課殖シ、非違ヲ禁察シ、賦役ヲ備督ス、凡ソ田ハ長サ三十步、廣サ十二步ヲ段ト爲シ、十段ヲ町ト爲シ、段毎ニ租稻二束二把、町毎ニ租稻二十二束、山谷僻遠ハ便ニ隨テ量置ス

四ニ曰ク、舊賦役ヲ罷メ、田調ヲ行フ、凡ソ絹繩絲綿並ニ郷土ノ出ス所ニ隨フ、田一町ニ絹一丈、四町ヲ以テ區ト成ス、長サ四丈廣サ二尺半、繩三丈、二町ヲ以テ區ヲ成ス、長廣絹ニ同シ、布四尺、長廣絹ニ同シ、繩一町ヲ以テ端ヲ成ス、別ニ戶別ノ調ヲ收ム、一戶毎ニ布一丈二尺、凡ソ調ハ副物鹽贄モ亦タ郷土ノ出ス所ニ隨フ、凡ソ官馬ハ中馬百戶毎ニ一匹ヲ輸ス、細馬ハ二百戶毎ニ一區ヲ輸ス、其價ハ一戶ニ布一丈二尺、凡ソ兵ハ人身刀甲弓矢幡鼓ヲ輸ス、凡ソ仕丁ハ五十戶毎ニ一人諸司ニ充テ、五十戶ヲ以テ仕丁一人ノ糧ニ充ツ、一戶ノ庸布ハ一丈二尺、庸米ハ五斗ト爲ス、

此外又鐘匱ヲ朝ニ設ク、詔シテ曰ク、凡ソ訴ル所アリテ、伴造尊長達セサル者ハ、牒ヲ匱ニ投ジ有司執テ之ヲ上レ、朕親ヲ錄セシ、若シ官司ノ裁斷直カラズシテ、冤枉ヲ蒙ル

者ハ鐘ヲ撞シテ以テ訴ヘヨ、又男女奴婢ノ法ヲ定メ、或ハ私ニ地ヲ賣ルコトヲ禁シ、雜役ヲ罷メ、禮法ヲ定メ、七邑十三階ノ冠ヲ制ス、曰ク織繡紫錦青黑、各大小アリ、其後冠位ヲ改増シ、十九階ヲ制定シ定テ中務、式部、治部、民部、刑部、兵部、大藏、宮内ノ八省及ヒ百官ヲ置ク、又東國ノ國司以下ニ詔シテ曰ク、官勢ニ籍リテ公私ノ物ヲ収ル莫レ、宜ク各々部内ノ粟ヲ食ミ、部内ノ馬ニ騎ルヘシ、若シ違フ者アラハ、次官以上ハ爵位ヲ降シ、主典以下ハ笞杖ニ決セン、其贓物ハ倍シテ之ヲ徵セン云々其他葬式ヲ定メテ殉死ヲ禁ス

(六) 左右大臣及内大臣ヲ置クハ何朝ノ時ニ始マリシヤ

謂ク第三十六代孝德帝ノ位ニ即クヤ、皇姪中大兄ヲ立テ皇太子ト爲シ、大連ヲ罷メ阿部倉梯麻呂ヲ以テ左大臣ト爲シ、蘇我石川麻呂ヲ右大臣ト爲シ、中臣鎌足ヲ内大臣ト爲シ大織冠ヲ授ク、是其嚆矢ナリ

(七) 鎌足ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク鎌足ハ天兒屋根命ノ裔ニシテ御食子ノ子ナリ、器局秀邁千古ノ英傑皇極天皇ノ三年神祇伯ニ拜ス、病ト稱シテ就カス、退テ三島ニ居ル、輕皇子曾テ鎌足ト相善シ時ニ蘇我蝦夷父子朝憲ヲ紊リ、私カニ非望ヲ覬覦ス鎌足慨然トシテ匡濟ノ志アリ、竊ニ家室諸皇子ノ

中有烏ノ主ヲ求メ、輔ケテ事ヲ成サントス、中大兄皇子天智ニ如ク者ナシ、乃チ其志ヲ告ゲ奉ラント欲スレト間ヲ得ス、一日中大兄、鞠ヲ法興寺ノ樹下ニ蹴ル、鎌足之ニ陪ス、隅々皇子ノ靴脫ス、鎌足跪キテ之ヲ奉ル、皇子モ亦跪キテ之ヲ受ケサセ玉フ、是ヨリ親近シ奉ルヲ得テ肺肝ヲ吐露ス、然レト深ク外議ヲ懼レ、因テ學ヲ南淵請安ノ門ニ受ルニ託シ、毎ニ相往來密議ス、乃チ蘇我石川麻呂、佐伯子麻呂、葛城綱田等ヲ以テ援ト爲シ、將ニ三韓ノ使、進貢ノ日ヲ以テ事ヲ舉ントス、期ニ及ンテ帝大極殿ニ御ス、入鹿人侍ス、入鹿性猜疑多シ、常ニ劔ヲ持ス、鎌足俳優ヲシテ之ヲ調セシム、入鹿笑フテ劔ヲ解テ入ル、中大兄門者ヲ戒メテ出入ヲ鎖絶セシメ、自カラ長槍ヲ執テ殿側ニ伏ス、鎌足弓矢ヲ持シテ警備シ、劔ヲ子麻呂綱田ニ授ケテ入鹿ヲ斬ラシム、子麻呂恐レテ發セス、時ニ中大兄其機ノ失センコトヲ恐レ、徑チニ進ンデ入鹿ヲ斬ル、既ニシテ父蝦夷マタ誅ニ伏シ事平ク、皇極天皇御位ヲ中大兄皇子ニ讓ラセ玉フ御志アリ、皇子之ヲ鎌足ニ告ゲサセ玉フ、鎌足曰ク、古人大兄ハ殿下ノ兄ナリ、殿下若シ次ヲ越テ大統ヲ紹ガセ玉ハ、恐クハ恭謙ノ道ニ違ハン又輕皇子ハ殿下ノ舅ニ在マセリ、臣以爲ラク輕皇子ニ讓ラセ玉ヒテ、以テ民望ニ答ヘサセ玉フニ如カズト、皇子其言ヲ容レ密カニ之ヲ奏上シ玉フ、是ニ於テ天皇竟ニ御位ヲ輕皇子ニ讓ラセ玉フ是レ孝德天皇ナリ、鎌足マタ中大兄皇子ト力ヲ協セ大化ノ新政

ヲ斷行ス、鎌足功ヲ以テ大錦冠ニ叙セラレ封若干ヲ賜フ、鎌足至誠至忠身官司ノ上ニア
 リテ進退廢置言聽カサルナシ、天智天皇御即位ノ二年十月鎌足病アリ、天皇其第二親臨
 シテ之ヲ慰問ス尋テ大海人皇子天武天皇ヲシテ第二就テ大織冠ニ叙シ、姓ヲ藤原ト賜フ、翌
 日遂ニ薨ス、天皇再ヒ其第二臨マセ玉ヒ、蘇我赤兄ヲシテ詔ヲ宣ベ、金香爐ヲ賜ハル、
 大和多武峰ニ葬リ肖像ヲ祀ル眞ニ王佐ノ大才、中古第一ノ英傑ナリ

(八) 齊明帝ノ朝ニハ如何ナル事アリシヤ

謂ク齊明帝皇極帝ノ朝ニ阿部比羅夫ヲ蝦夷ニ遣ハシ舟師百八十艘ヲ帥ヒテ之ヲ伐タシム、
 蝦夷怖レテ降ル乃チ淳代津輕二郡ノ領ヲ定ム、比羅夫又肅慎高麗ヲ討ツ、時ニ有間ノ皇
 子叛ヲ謀リ誅ニ伏ス、已ニシテ蝦夷復タ叛シ、再ヒ比羅夫ヲシテ討テ之ヲ降サシメ而シ
 テ後方羊蹄ノ領ヲ置ク、尋テ又比羅夫ヲシテ舟師二百艘ヲ帥ヒテ肅慎ヲ伐タシム

(九) 天智帝ノ事ヲ述ヘヨ

謂ク天智帝ハ第三十八代ノ主上ニシテ至孝ナリ、先帝齊明帝ノ喪ニ殯スルコト六年是ニ於テ
 登極ス四年皇子大友ヲ以テ太政大臣ニ拜シ、始メテ漏刻鐘鼓ヲ置キ以テ時ヲ警ム、太政
 大臣ヲ置クコト是レヨリ始マル

(一〇) 壬申ノ亂トハ如何

謂ク天智天皇ノ皇子ヲ大友ト曰ヒ、皇弟ヲ大海人ト曰フ、天皇不豫ナリ、皇弟大海人ヲ
 召シテ位ヲ傳ヘントス、大海人辭スルニ病ヲ以テシ、因テ僧トナランコトヲ請フ、天皇之
 ヲ許ス、大海人髮ヲ剃リテ吉野ニ入ル、後チ天皇崩シ大友皇子立ツ、是ヲ弘文天皇トス、
 時ニ白鳳元年六月大海人皇子、兵ヲ吉野ニ舉ク、時ニ朝廷ハ近江ノ滋賀ニアリ、大海人
 依テ村岡男依等ヲ遣ハシ、不破、鈴鹿、倉歷ノ三道ヲ塞キ、大伴吹負ハ大和ニ留テ應ス、
 又大分惠尺ヲ近江ニ遣ハシ、高市大津ノ二皇子ヲ召シテ伊勢ニ會セシム、皇子自ラ皇妃
 以下ヲ率ヒテ東シ、伊勢ニ至ル、東國ノ國司多ク來附ス、朝廷震駭シ使ヲ諸國ニ遣ハシ
 テ兵ヲ召ス應スルモノ少シ、穗積百足物部ノ日向ハ大和ニ高坂王ト與ニ兵ヲ徵ス、而シ
 テ穗積百足ハ吉野ノ將大伴吹負ノ擊殺スル所トナリ、日向亦タ擒セラレ高坂王出テ降ル、
 朝廷壹岐韓國大野果安ヲ遣シ吹負ヲ拒キ乃樂山ニ戰テ之ヲ破ル、又山部王及ヒ蘇我果安
 巨勢人ヲ遣シテ不破ヲ襲ハシム、諸將和セス軍遂ニ潰ユ、玆ニ於テ大海人伊勢ノ兵ヲ遣
 テ吸負及ヒ村岡男依等ヲ助ケ三道ヨリ並ヒ進ム、韓國敗走シ吹負男依進テ瀬田ニ至ル、
 天皇親ラ諸將ヲ帥ヒテ橋西ニ軍ス、先鋒ノ智曾精兵ヲ率ヒ橋ヲ撤シテ之ヲ拒ク、利アラ
 スシテ智曾之レニ死ス、官軍大敗左右大臣皆ナ逃レ去ル、天皇物部麿ト山前ニ走リテ崩
 ス、是ヲ壬申ノ亂ト曰フ、

(一) 天武帝ノ事ヲ述ベヨ

謂ク第四十代天武天皇ハ天智天皇ノ皇弟ナリ大海人ト曰フ、天皇位ニ即クヤ、專ラ意ヲ政治ニ留メ、諸國ニ詔シテ稅ヲ貸シ、百姓ノ貧富ヲ定メテ三等トシ、諸國司ノ子弟、及ヒ庶人仕進ノ格ヲ定メ、又文武官進階ノ制ヲ定メ、兵政司ヲ置キ、親王及ビ臣寮ヲシテ兵馬ヲ畜ハシムルノ制ヲ立テ、律令ヲ定メ、帝紀ヲ撰ミ歷代ノ遺事ヲ記セシメ、又禁式九十二條ヲ設ケ、親王以下庶人ニ至ルマテノ服色ヲ定ム、又武備ヲ嚴ニシテ豫シメ外國ノ來襲ニ備ヘサセ玉フ、

(二) 氏族八等ノ定メ及ヒ立禮結髮ノ始マリシハ何レノ時代ソ

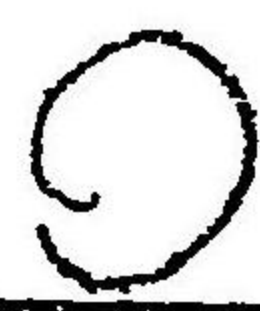
謂ク是レ天武帝政蹟ノ一ニシテ博ク臣民ノ氏族ヲ檢シ、左ノ八等ヲ定メ玉フ

- 眞人 マヒト 朝臣 アソミ 宿禰 スグチ 忌寸 イミキ 道師 ミチシ
- 臣 オミ 連 ムラシ 稻置 イナギ

是ノ八等ニ隨ヒ各姓ヲ賜ヒ、尊卑ヲ明ニシタマフ、又跪禮及ヒ匍匐ノ禮ヲ廢シテ更ニ立禮ヲ用ヒ、男女ヲシテ始メテ髮ヲ結ハシム

(三) 大寶令ノ制定ハ如何

謂ク大化ノ大改革以來地方分權ハ廢絶シテ中央集權トナリ、海内一統朝廷ニ於テ令ス、



然レ凡古來未曾有ノ創業ニシテ法度未タ整ハス、天智天皇此ニ聖慮ヲ配セラレ、即位ノ元年始メテ中臣鎌足等ニ勅シテ律令ヲ撰セシム、之ヲ近江令ト云フ、天武帝ノ時之ヲ刊修シ、持統帝ノ時ニ頒布施行シ、文武天皇ノ大寶元年ニ更ニ刊修シテ、令十一卷律六卷成ル、所謂大寶律是ナリ、元正天皇ノ養老二年再ヒ不比等ニ命シテ之ヲ修飾セシメラル

(四) 大寶令太寶律ノ名目ヲ示セ

- 謂ク養老年中修飾ヲ加ヘテ律令各々十卷成ル、律ハ十二律ニ分レタリ其目左ノ如シ
- | | | | |
|-------|-------|--------|--------|
| 第一 名例 | 第二 衛禁 | 第三 職例 | 第四 戶婚 |
| 第五 廩庫 | 第六 擅興 | 第七 賊盜 | 第八 鬪訟 |
| 第九 詐僞 | 第十 雜律 | 第十一 捕亡 | 第十一 斷獄 |
- 令ハ三十令ニ分レタリ其目左ノ如シ
- | | | | |
|---------|--------|---------|---------|
| 第一 官位 | 第二 職員 | 第三 後宮職員 | 第四 東宮職員 |
| 第五 家令職員 | 第六 神祇 | 第七 僧尼 | 第八 戶 |
| 第九 田 | 第十 賦役 | 第十一 學 | 第十二 選叙 |
| 第十三 繼嗣 | 第十四 考課 | 第十五 祿 | 第十六 宮衛 |
| 第十七 軍防 | 第十八 儀制 | 第十九 衣服 | 第二十 營繕 |

- 第廿一公式
- 第廿二倉庫
- 第廿三廐牧
- 第廿四醫疾
- 第廿五假寧
- 第廿六喪葬
- 第廿七關市
- 第廿八捕亡
- 第廿九獄
- 第卅 雜

右ノ如ク律令ノ撰定アリ、又屢々改正増減シテ大成セシユヘ官制、税制、祿制、兵制、刑制、學制大ニ定マリ、天智帝ヨリ桓武光仁帝ノ頃マデ最モ王朝ノ盛時トセリ

(二五) 律令格式ノ用ヲ問フ

謂ク律トハ既往ヲ罰スルモノ懲肅ヲ主トシ、令ハ未然ニ教ウルモノ勸戒ヲ本トス、格トハ令ノ制ヲ變更スヘキコアル時ニ臨時制定スヘキヲ云ヒ、式トハ官吏ノ章程ノ如キモノナリ、當時是ノ律令格式ノ四ツヲ以テ國家ヲ治ムルノ大要目トセリ

(二六) 稗田阿禮ノ事ヲ問フ

謂ク稗田阿禮ハ何許ノ人タルヲ詳ニセス、天武帝ノ舍人ト爲ル、人ト爲リ聰明ニシテ記憶ニ富ミ、一度目ニ觸レハ口ニ誦シ、耳ニ拂ヘハ心ニ勒ス、初メ天武帝諸家藏ムル所ノ書籍頗ル虚偽多キヲ患ヒ、阿禮ニ勅シテ、帝皇ノ日繼及ヒ先代ノ舊辭ヲ誦習セシメ、以テ史ヲ修メント欲ス、既ニシテ帝崩ス、其後持統文武ノ二朝ヲ歴レテ其事未タ行ハレス、元明帝ノ和銅四幸ニ至テ安萬侶ニ詔シテ阿禮カ誦スル處ノ勅語及舊辭ヲ撰擇セシム、明年

ニ至リテ成ル、安萬之ヲ上ル、古事記是ナリ

(二七) 柿本人麻呂ノ事ヲ問フ

謂ク柿本人麻呂ハ石見國ノ人ナリ、持統、文武ノ兩朝ニ仕ヘ、大夫ニ至ル、人麻呂和歌ニ妙ナリ、世々和歌ノ聖人ト稱ス、

(二八) 惠美押勝ノ誅セラレシ所以ヲ問フ

謂ク孝謙天皇天平勝寶元年始メテ紫微中臺ヲ置キ、大納言藤原仲麻呂ヲ以テ紫微令ヲ兼テシメ、委スルニ樞密ノ事ヲ以テス、尋テ仲麻呂ヲ以テ紫微内相ト爲スヤ、帝ヲ恃ンテ威權ヲ擅ニス、天皇御位ヲ淳仁天皇ニ讓リ、仲麻呂ヲ以テ大保ト爲シ、勅シテ曰ク、善ヲ褒メ惡ヲ懲スハ聖主ノ格言、績ヲ賞シ勞ニ酬ルハ明主ノ彝訓、藤原朝臣仲麿ハ恪勤職ヲ守リ、君ニ事ヘテ赤忠、曠世比ヒナシ、汎ク惠ムノ美斯ヨリ美ナルハナシ、今後宜シク姓中惠美ノ二字ヲ加フヘシ、暴ヲ禁シ強ニ勝ツ、故ニ名テ押勝ト曰フ、朕カ舅中唯卿良トニ尙シ、故ニ字シテ尙舅ト曰ハン、更ニ三千戸切一田町ヲ給シテ、世々襲シム、是時押勝等ニ詔シテ官制ヲ定ム、其後押勝帝寵ノ衰ヒタルヲ恨ミ、陰ニ不軌ヲ圖リ、畿内三關近江丹波播磨等ノ兵ニ都督タランコトヲ請フ、之ヲ許ス、既ニシテ兵ヲ徵シテ反ヲ謀ル、事覺レテ近江ニ據ル、押勝遂ニ誅ニ伏ス、是レ其誅セラレシ理由ナリ

(一九) 僧道鏡ノ驕逆及和氣清麿ノ忠硬如何

謂ク稱徳帝孝謙帝 天平神護元年、宇河内ノ弓削ノ行宮ニ幸ス、尋テ僧道鏡ヲ以テ太政大臣禪師ト爲シ、文武百官ヲシテ拜賀セシム、道鏡驕逆日ニ滋々甚シク出入鸞輿ニ乗リ、服食一ニ供御ニ擬シテ足レリトセズ、竟ニ天位ヲ奪ハントス、太宰ノ神官道鏡ノ旨ヲ希ヒ、宇佐八幡ノ神教ト詐リテ、道鏡ヲ帝位ニ即カシムベシト上奏ス、道鏡之ヲ聞テ大喜ブ、帝甚タ之ニ惑ヒ、從五位下和氣清麿ニ詔シテ曰ク、汝往テ親ラ神教ヲ受ケヨト、發スルニ臨ンテ道鏡清麿ニ謂テ曰ク、神ハ既ニ位ヲ我ニ許ス、卿宜シク實ヲ以テ復命スヘシ、否ラサレハ劍ヲ加フルノミト、清麿字佐ニ詣リ、還テ神旨ヲ奏シテ曰ク、我國開闢以來君臣ノ分定レリ、未タ臣ヲ以テ君トセルコトアラス、天日嗣ハ必ス皇緒ヲ立テヨ、若シ天位ヲ窺竄スル無道ノモノアラバ、處スルニ嚴刑ヲ以テスヘシト直言ス、道鏡大ニ怒リ、清麿ノ官爵性氏ヲ奪フテ之ヲ大隅ニ流ス、然レモ道鏡禪位ノ一ノカ爲メ竟ニ叢ム、第四十九代光仁天皇天智天皇 寶龜元年ニ至リ、道鏡カ死罪一等ヲ赦シテ之ヲ下野ニ流シ、清麿ヲ召還シテ本位ニ復セシム

(二〇) 清麿ノ人ト爲リハ如何

謂ク道鏡帝寵ヲ籍リ、天位ヲ窺竄ス、此時ニ當リテ朝廷ノ百官多ク道鏡ニ媚ヒ、又一人ノ氣節ヲ有スルモノナシ、彼ノ藤原百川ノ如キモ又夕屏息スルニ過キス、獨リ清麿毅然トシテ大節ヲ持シ、僞譎ノ一言妖僧ノ肝膽ヲ破リ、其身貶セルト雖モ天位率ニ以テ搖カス、其誠忠功烈灼然トシテ天下ニ著ル、嗚呼清麿微セハ、皇統忽チ一浮屠ニ歸シ、神州正大ノ氣遂ニ妖氛毒霧ノ爲メニ消滅セン、故ニ後世精忠ノ臣ヲ擧クルモノ、必ス先ツ指テ清麿ニ屈ス、清麿尤モ古事ニ明カニシテ民部省令二十卷ヲ撰ス、後宇佐奉幣使ハ必ス和氣氏ニ命ス、天智天皇ノ御宇ニ及ヒテ正一位ヲ贈ラル

(二一) 奈良ノ朝トハ何帝ノ時代ノ都ナリヤ

謂ク^{天智}明天皇ノ和銅三年ニ都ヲ平城即チ大和國ノ奈良ニ遷シ、左京右京ニ分チ帝都ノ規模ヲ恢ニセリ、之ヲ奈良ノ朝ト云フ、爾來元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁、桓武凡八代八十五年間ノ帝京ナリ、

(二二) 奈良朝時代ノ風俗ハ如何

謂ク此代ハ太平至治ナルヲ以テ其極漸ク奢侈ノ風ニ侵染シ、人民思想亦高雅ニ趣キ、文學ノ士彬々輩出セリ、又算術思想ノ高妙精美ナル此時ヲ以テ美術進歩ノ時代ト特稱スヘキナリ

(二三) 藤原廣嗣ノ反セシ原因如何

大正天皇御宇 九條天皇御宇

藤原廣嗣ノ反セシ原因如何

謂ク聖武天皇大ニ佛法ヲ崇信シ、盛ニ佛寺ヲ創建ス、國勢爲ニ弛廢シ朝政疲弊ス、僧立
防宮中内道場ニ出入シ、光明皇后ニ近侍ス、廣嗣之ヲ惡ミ、立防ヲ奏劾シテ反テ太宰府
ニ貶セラル、廣嗣ノ妻美姿ナリ、立防之ニ姦スルト聞キ、忿恨ニ耐ヘス兵ヲ擧ゲテ君側
ヲ清メントス、朝廷以テ謀反トナシ、將ヲ遣ハシ擊テ之ヲ斬ル、

(二四) 延曆遷都ノ顛末如何

謂ク第五十代桓武天皇延曆十三年ニ和氣清麻呂都ヲ山城國葛野郡ニ遷サンコトヲ建議ス、
朝議之ニ從ヒ、諸國ニ課シテ宮城ヲ築カシメ、大小ノ市場ヲ配置ス、乃チ詔シテ曰ク、
此地山河襟帶自然ニ城ヲ作ス、宜シク山背ヲ改メテ山城國ト爲スヘシト、此時士民謳歌
シテ平安城ト曰フ、

(二五) 上古ヨリ遷都ノ數ヲ問フ

謂ク神武天皇都ヲ大和橿原ニ定メ玉ヒシヨリ、歷代ノ天皇各々其都ヲ移サセ玉フコト四十
餘所、其中大和ニ都スルコト三十餘所、山背、攝津、河内及ビ近江ニ都スルコト十餘所、桓
武天皇山背ニ大都ヲ定メ玉ヒシヨリ歷代ノ帝都トナリテ復タ遷都ノ事ヲナシ、明治維新
ニ至テ都ヲ江戸ニ遷シ玉フト雖モ、尙モ依然京都ト稱ス

(二六) 歷代帝都ノ改マツシハ何故ゾヤ

謂ク上古ノ風俗ハ夫妻同居スルコトナク、女ハ毎ニ親ノ許ニ生長シ、年、人ノ妻トナルニ
堪ヘルニ至リテモ尙然リ、故ニ皇太子ニテモ當時ハ母ノ許ニ生長シテ父王ト同居スルコ
トナク、父ノ天皇崩シ玉フキハ皇太子其在所ニテ即位シ、百官モ亦皆在所ニアリテ朝ニ仕
フ、又皇居モ後世ノ如キ大厦、高閣ヲ構フルニアラス、極メテ簡畧質朴ナルヲ以テ代々都
カハリテモ人民ノ勞苦トナラス是レ歷代帝都ノ改マツシ所以ナリ

(二七) 京地ノ區劃及ヒ大内裏ノ摸樣如何

謂ク京地ノ區劃ハ東西ノ廣袤三十二町、之ヲ分テ九條トス、南北ハ三十八町ナリ、皇城
ハ北端ニ在リテ南ニ面シ、一條二條ノ間ニ跨ル、城中ニ十七殿ヲ造リ、十二ノ宮門ヲ造
ル之ヲ大内裏ト云フ、其廣サ南北千七百五十三丈、東西千五百七十丈、皇城前ノ正面ニ
通スル大達ヲ朱雀大路トス、其東方ヲ左京トシ、西方ヲ右京トシ、各々町六百八、保五
十、防三十六、市街井然トシテ自カラ秩序アリ

(二八) 年號ノ起原由來ヲ問フ

年號ノ起原ハ孝德天皇元年乙巳ノ年ヲ大化ト號セラル、ヲ起原トス而シテ六年ニ長門國
ヨリ白雉ヲ獻スル者アルニヨリ、年號ヲ白雉ト改ム其次齊明天皇ノ二帝ハ年號ヲ建ラレ
ス、其次天武天皇ノ時ニ白鳳朱鳥ノ號アリ、持統天皇ノ時又年號ナシ、文武天皇五年辛

丑對馬金ヲ貢スルニ因テ、三月甲午元ヲ建テ大寶ト云フ、爾來即位并ニ祥瑞災變等ニテ辛酉ノ年ト甲子ノ年ニハ必ス改元セララル、トトナレリ

(二九) 持統天皇ノ朝政如何

謂ク持統帝ノ朝ニ改令アリシモノハ諸國ノ壯丁四分一ヲ點シ、兵ト爲サシメ、陣法博士ヲ遣シテ武ヲ講セシメ、女官ヲ置キ皇女ヲ内親王トシ、百姓ハ黃色ノ衣ヲ服シ、奴ハ皂衣ヲ着ケシムル等ノ令アリ

(三〇) 始メテ錢貨ノ通用ヲ行ヒシハ何帝ノ時ソ

謂ク錢ノ通用アリシトハ已ニ顯宗天皇ノ時ニ見ユ、然レモ當時ノ事未タ詳カナラス、元明天皇和銅元年武藏國ヨリ銅ヲ獻ス、之ニ依リテ始メテ錢ヲ鑄造セシム、鑄錢司ヲ置キ銅錢ヲ行フ、錢文ニ和銅開寶ト云フ、和銅開寶ノ略ナリ、當時官定ノ相場穀六斗ニテ銅錢一文ナリ

(三一) 金錢通用ナキ當時ハ何物ヲ通貨トセシヤ

謂ク人民ノ大半ハ稻ト布トヲ以テ交易ノ媒トセリ、例ヘハ材木一本ノ價稻何束、又ハ布何尺ト云フカ如シ且ツ租稅用及通用ノ稻ハ大概稻ノマ、束子テ交易ノ寶トナス、故ニ何束ト云フ

(三二) 天長節ノ起原如何

謂ク稱徳天皇ノ御宇押勝道鏡等政ヲ紊リシヲ以テ光仁天皇悉ク之ヲ革正シ、文武其職ヲ得タリ、依テ帝ノ降誕日(寶龜六年十月十三日)ヲ以テ天長節ト名ケ、百官ニ酒宴ヲ賜フ、是レ其起原ナリ

(三三) 國史編選ノ初年ヲ問フ

謂ク推古天皇二十八年、厩戸皇子蘇我馬子ト天皇記、國記、臣連伴造國造百八十部、並公民等ノ本記ヲ編選ス、是レ我國歴史ヲ作りシ初ナリ、然レモ此等ノ書皆ナ蘇我氏ノ亂ノ時焚テ大抵亡ヒタリ

(三四) 古事紀ハ何帝ノ時代ニ撰セシヤ

謂ク元明天皇ノ和銅四年太政大臣安磨ニ勅シテ國史ヲ編選セシム、五年正月ニ至リテ成ル、之ヲ古事記ト云フ、凡三卷アリ、ホ、漢文體ニ似タレモ、大抵國語ヲ用ヒテ事實ヲ失ハサラシム

(三五) 日本紀ハ何帝ノ時ニ撰セシヤ

謂ク日本紀ハ元正天皇ノ養老四年五月、舍人親王、太朝臣安磨等ノ撰修セシモノニテ凡ソ三十卷アリ、是ハ天武天皇ノ時ヨリ起手セシカ、後遷延シテ此時ニ竣功セシナリ、是レ

六國史ノ一ニシテ我國正史ノ首ナリ、全部漢文ヲ用ヒ、勉メテ漢史ト同シカラシメン爲メ、修飾スル處多シ、而シテ全ク編年體ノ史ナリ

(三六) 舍人親王ノ事ヲ問フ

謂ク舍人親王ハ天武帝ノ第三子ニシテ、清原氏ノ元祖ナリ、元正帝ノ時一品ニ叙シ、知太政官事ニ任シ、太子ヲ輔翼ス、少シテ文才アリ、勅ヲ奉シテ日本書記三十卷系圖一卷ヲ修ム、聖武帝天平七年斃ル、太政大臣ヲ贈ル、淳仁帝三年ニ追尊シテ崇道盡敬皇帝ト云フ、其後裔世々明經博士トナル

(三七) 佛教宗派ノ起原ヲ問フ

謂ク天智天皇己後國家大ニ治マリ、聖武天皇即位後ハ無事ノ餘リ、佛法ヲ信仰アリ、爾來歷代ノ至尊皆ナ之ヲ尊崇セラレテ、佛法甚タ盛隆ヲ極ム、此頃宗門ノ新ニ起ルモノ少ナカラス、玄昉ハ歸朝シテ法相宗ヲ弘メ、鑑真和尚ハ唐國ヨリ來朝シテ律宗ヲ開キ、華嚴宗ハ天平八年唐僧道璿之ヲ傳ヘ、良辨之ヲ弘メ、從來アル所ノ三論、成實、俱舍ト共ニ行ハル、成實三論ハ推古天皇ノ御宇三韓ノ僧惠觀、惠慈、惠聰、觀勒等ノ僧ヨリ傳ヘ、俱舍ハ皇極天皇ノ七年元興寺ノ智通智達ノ二僧唐ヨリ歸朝シテ之ヲ傳フ、

(三八) 蝦夷ノ叛服ヲ問フ

謂ク蝦夷トハ今ノ三陸兩羽地方ノ總稱ナリ、其人強暴ニシテ久シク王化ニ服セス、景行天皇四十二年日本武尊ノ東夷ヲ征セシ以來歷代其綏服ニ心ヲ用ヒラル、仁德天皇ノ時ニハ上毛野田道、舒明天皇ノ時ニハ上毛野形名共ニ將トシテ之ヲ征シ官軍爲ニ破ラル、孝德天皇大化四年ニ磐舟ノ柵ヲ治メ、蝦夷ノ來寇ニ備ヘ、始メテ柵戸ヲ置ク、齊明帝四年ニ阿部比羅夫ヲ遣シ、水師百八十艘ヲ率テ深ク敵地ニ入り、其酋長ヲ下ス、此後聖武天皇ノ時大野東人、淳仁天皇ノ時ニ惠美朝獯、桓武天皇ノ時坂上田村麿、陽成天皇ノ時小野春風アリテ蝦夷地全ク鎮撫ス

(三九) 坂上田村麿ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク坂上田村麿勇毅剛邁ニシテ且ツ將帥ノ略アリ、狀貌魁梧鬚髯金線ノ如シ、笑フ片ハ嬰兒モ親ミ怒ル片ハ猛獸モ畏伏ス、蝦夷征討ノ後、陸奥ノ膽澤ニ城キ、東國ノ浮浪四千人ヲ配シテ之ヲ戍ル、蝦夷ノ二酋長衆五百ヲ率ヒ來降ス、田村麿二酋ヲ引致シテ京師ニ歸リ、奏シテ曰ク、之ヲ放還シテ朝廷ノ仁慈ヲ諭シ、以テ其黨類ヲ招集セシメント、朝議之ニ隨ハズ、二酋ヲ斬ニ處ス、然レモ東奥之ヨリ無事ナリシハ全ク田村麿ノ功ナリ

(四〇) 弘仁ノ亂ヲ問フ

謂ク平城天皇在位四年ニシテ位ヲ皇太弟ニ傳フ、之ヲ嵯峨天皇ト云フ、上皇既ニ位ヲ禪リ

平城ノ故宮ヲ修メテ居リ、尙侍藥子ヲ寵ス、其兄藤原仲成勢ヲ恃ンテ驕恣ナリ、天皇深ク其奸ヲ憎マセ玉ヒシカハ、御即位後仲成自カラ安ンゼサル所アリ、上皇ニ勸メ奉リテ都ヲ奈良ニ遷シ、復祚ヲ謀ル、上皇乃チ坂上田村麿及ヒ藤原冬嗣ヲ造宮使ニ任シ玉フ、物議洵然タリ、朝廷田村麿カ上皇ノ用ヲ爲サンコトヲ恐レ、遽カニ其官爵ヲ進メ、仲成藥子ノ罪惡ヲ暴露シテ其黨類ヲ捕ヘシメラル、上皇大ニ怒リ兵ヲ發シテ藥子ト同シク東國ニ走ル、天皇坂上田村麿ヲ遣シテ之ヲ美濃ニ徵フ、上皇進ムヲ得ス、衆皆潰ユ、上皇事ノ成ラサルヲ察シテ遂ニ宮ニ還リ薙髮ス、藥子毒ヲ服シテ死シ仲成亦誅ニ伏ス事平ク、之ヲ弘仁ノ亂ト云フ

(四二) 遣唐使ハ何帝ノ時ニ始マリシヤ

謂ク推古天皇ノ朝、小野妹子ヲ隋ニ遣ハシ始メテ好ヲ通ス、是其嚆矢ナリ、尋テ孝徳天皇ノ朝ニ吉士長丹高田根麿二人ヲ大使トシテ唐ニ遣ス、僧俗ノ隨行スル者二百四十一人後又高向玄理等ヲ唐ニ遣ス、是ヨリ歷朝大使留學生ヲ發セラレシカ、宇多天皇ノ御宇ニ菅原道真建議シテ遣唐使ヲ罷ム

(四三) 王朝ノ盛時ニ輩出セル文學家ノ重ナル者ヲ示セ

謂ク吉備眞備ハ聖武天皇ノ頃入唐留學シ、阿部仲麿ノ徒ト名ヲ顯セリ、眞備ハ道慈ヲ擴

張シ親ラ學生四百人ニ五經三史明法算術音韻篆籀等ノ六道ヲ習ハシム、其歸朝セル時曆書以下數多ノ書ヲ携ヘ來レリ、又五十音モ此人ノ作ナリト云ヘリ

石上宅嗣ハ孝仁帝ノ頃ノ人ナリ、博學ニシテ經史ニ涉レリ、芸亭ヲ建テ多ク書籍ヲ貯ヒ衆人ニ縱覽セシム、書籍館ヲ創立セシハ是人ナリ

其他延曆中ニ淡海三船アリ曾テ敕ヲ奉シテ神武以來ノ諡號ヲ定ム、尋テ菅原道真、小野篁、三善清行、都良香、橘良相、島忠臣、大藏善行、藤原佐世紀長谷雄等ノ名家出ツ

(四四) 最澄空海布教ノ次第ヲ問フ

六

謂ク最澄ハ近江國滋賀ノ人、神護慶雲元年ニ生ル、年十八ニシテ出家シ、延曆年間比叡山ニ入り延曆寺ヲ建立ス、後勅命ヲ奉シテ入唐シ支那天台山國清寺ニ至リテ法要經書ヲ受ケ、延曆廿四年遣唐大使高野麻呂ト同船歸朝ス、齋ス處ノ經論二百三十部四百六十卷ヲ獻シテ天台教ノ妙義ヲ奏上ス、其弟子義眞圓澄等最モ力ヲ布教ニ盡ス、是ヨリ天台ノ宗派國內ニ普チク、桓武、平城、嵯峨ノ三帝相繼テ信仰シ玉フ、弘仁十三年十一月滅ス、清和天皇ノ朝ニ至テ傳教大師ノ諡號ヲ賜フ、是レ大師號ノ嚆矢ナリ

空海ハ讃岐國屏風浦ノ人、寶龜五年ニ生ル、延曆二十二年五月三日遣唐使高野麿ト共ニ入唐ス、留學スルコト三年僧慧果ヲ師トシ眞言密教兩部灌頂ノ奧儀ヲ受ケ、其他支那文學

ヲ研修シ、大同元年ヲ以テ歸朝シ、盛シニ眞言宗ヲ開ク、又本地垂迹習合ノ説ヲ唱ヘ兩部神道ヲ興ス、空海博學洪聞大ニ文物典章ヲ進メ、山水ヲ跋涉シ、國益ヲ立ツ、遂ニ紀州高野山ニ一寺ヲ創立ス、金剛峯寺是ナリ、承和二年三月寂ス、其弟子實惠、眞濟等宗義ヲ擴張シテ眞言ノ宗派國內ニ滿ツ、後延喜二十一年ニ至リ弘法大師ノ諡號ヲ賜フ

(四) 王朝ノ盛時徵兵ノ法及軍團配置ノ大略如何

謂ク諸國ノ人民男子二十一歳ヨリ六十歳マデヲ正丁トス、毎年六月三十日以前ニ京ハ京職諸國ハ國司ニテ所管内ノ人民適齡ノ者ヲ檢査シ、帳簿ヲ造リテ八月卅日前ニ太政官ニ具申ス、大抵一國ノ正丁ヨリ總數三ノ一ヲ取ル、而シテ徵發セシ其國ノ近傍ナル軍團ニ入ル、軍團ヲ大中小ノ三等ニ分ツ、大抵四五郡ニ一軍團アル割合ナリ

(五) 防人衛士ノ區別如何

謂ク天智天皇ノ御代ニ三韓ニ事アリ、乃チ兵ヲ筑紫ニ置テ邊海ヲ戒嚴ス是レ防人ノ始メナリ爾來邊境ヲ戍ル者ヲ防人ト云フ、上京シテ禁門ヲ守ル者ヲ衛士ト云フ、其衛士防人兵士等ハ服役中課役ヲ免スルヲ以テ人進シテ兵士ノ徵發ニ當ランヨヲ希フ、

(六) 隊伍ノ組織如何

謂ク兵ニ騎兵步兵アリ、軍團ニ大中小アリ大ハ千人中ハ六百人小ハ五百人以下トス、凡

ソ兵士五人ヲ一伍トシ、十人ヲ一火トシ、五十人ヲ一隊トシ、隊ニ隊正一人アリ、二隊ニ一ノ旅帥アリ、二旅ニ一ノ校尉アリ、千人ニ滿ツルトキハ大毅一人、小毅二人アリテ之ヲ統ヘ、五百人以下ナルトキハ、小毅一人アリテ之ヲ統ブ、又主張一人アリ、大小毅ハ部内ノ散位、勳位ノ者、若クハ庶人ノ弓馬ニ便ナルモノヲ取り、一火毎ニ軍器ヲ備ヘ、六駄馬ヲ養フ、校尉以下ハ庶人ノ弓馬ニ便ナルモノヲ取り、主張ハ書算ニ工ナルモノヲ取ル兵器ハ兵士ノ自辨ニシテ無事ノ時ハ庫中ニ藏ス、

(七) 出征ノ軍制如何

謂ク戰時ニ於テハ三軍ヲ編制ス例ヘハ先ツ出兵一萬人以上二千人マデヲ一軍トスレバ、コレニ將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人アリ、又五千人以上九千人マデヲ一軍トスレバ、將軍、副將軍、軍監各一人、軍曹四人、錄事二人アリ、三千人以上四千人マデヲ一軍トスレハ、コレニ將軍、副將軍、軍監、各一人、軍曹、錄事各二人アリ是ヲ三軍ト云フ、此三軍ヲ統ブル毎ニ大將軍一人アリ、出征スル片ハ之ニ節刀ヲ授ク

(八) 始メテ學校ヲ建設セシハ何帝ノ時ソ

謂ク天智天皇ノ御代ニ始メテ學校ヲ建ツ、尋テ天武天皇ノ御代ニ至リ、又タ占星臺ヲ建

テ、天文博士、天文生ヲ置き、又大學ニ音博士、書博士ヲ置カセ玉フ

(四七) 大學及國學ノ組織ハ如何

謂ク大學ハ專門ノ科ヲ教フル所ニシテ紀傳、明經、明法、算道ノ四科アリ、國學ハ經籍ヲ主トシテ傍ラ普通ノ學問ヲ教フル所タリ、然レ其生徒ヲ取ルヤ大學生ハ五位以上ノ子孫、及ヒ東西史部ノ子弟ニ止マリ、國學生ハ郡司ノ子弟ニ止マリ、共ニ十三歲以上、十六歲以下ニシテ聰明ナルヲ撰ミ、其卒業スルヤ式部省之ヲ試験シテ官ニ登庸ス、

(四八) 寬平法皇ノ遺誠ハ如何

謂ク宇多天皇ノ即位スルヤ詔シテ萬機大小トナク、大政大臣藤原基經ニ關白セシム、關白ノ名是ヨリ始ム、寬平三年基經薨ス、是ニ於テ帝始メテ政事ヲ親裁ス、管時ニ菅原道真ノ才學ヲ愛シ、拔擢シテ之ヲ用ヒ、遂ニ參議トス、天皇位ヲ皇太子ニ禪リ、太上皇タリ、即チ書ヲ著ハシ臣庶ノ賢否國家ノ得失ヲ歷舉シ、以テ嗣帝ヲ誡メテ曰ク、賞罰ヲ明ニシテ、愛憎ヲ用フル勿レ、喜怒ヲ慎ンデ、諸ヲ色ニ形ス勿レ、婦言ヲ聽ク勿レ、小人ヲ近ク勿レ、治ヲ有識ニ詢ヒ、道ヲ六道ニ求メヨ、左大臣藤原朝臣時平ハ功臣ノ後ニシテ、少シト雖モ政事ニ熟ス、以テ輔導ニ資スベシ、右大將菅原朝臣道真ハ當今ノ鴻儒ニシテ、深ク政理ニ通シ、直言忌マス、且ツ將ニ位ヲ讓ラントス未タ果サス、朝臣曰

ク、大事ハ再舉セス事留ラバ變生ズト、遂ニ朕ガ意ヲシテ金石ノ如クナラシム、則チ唯々朕ガ忠臣ナルノミナラズ、乃チ新君ノ功臣ナリ、是レ之ヲ敬重セヨ、季長ハ曲古ニ違シ、長谷雄ハ經典ニ涉ル、共ニ大器アリ、並ニ宜ク進用スベシト、是レ寬平上皇ノ遺誠ナリ

(四九) 聖賢障子ノ由來ヲ問フ

謂ク宇多天皇曾テ畫工巨勢金剛ニ命シテ、殷、周、唐以來ノ支那名臣ノ像ヲ紫宸殿ノ障子ニ圖セシム、世之ヲ稱シテ聖賢障子ト云フ、是又嗣帝ヲ誡ノ其志ヲ獎勵セシモノナリ

(五〇) 初メテ太政大臣トナリシハ誰ソヤ

謂ク文德天皇ノ朝藤原良房ヲ太政大臣ニ任ジ、實劍一雙ヲ賜ヒ、勅シテ曰ク向後此劍ヲ帶ヒテ殿ニ上リ、朕カ懇情ニ副フヘシト、人臣ノ太政大臣ニ任スル玆ニ始マル

(五一) 初メテ攝政トナリシハ誰ソヤ

謂ク清和天皇ノ朝ニ外祖藤原房政初メテ攝政タリ、爾來彼一門毎ニ執柄ノ臣爲リ

(五二) 法皇ト稱スルハ何帝ヲ始メトスルヤ

謂ク宇多天皇落飾シテ寬平法皇ト稱ス是法皇ノ稱ノ始メナリ

(五三) 貞觀ノ治トハ如何

謂ク清和天皇元服シテ藤原良房ノ第二幸セララル、良房郡司ヲシテ百姓ノ田ヲ東垣外ニ耕

サシメ、親ク稼穡ノ辛艱ヲ勸覽ニ供フ、爾來心ヲ政治ニ用ヒ、御宇ノ間内外靜謐ナリ、後世之ヲ貞觀ノ治ト云フ、

(四) 菅原道真ノ貶セラレシ理由ハ如何

謂ク道真ハ當時ノ鴻儒ニシテ深ク政理ニ達シ直言ヲ好ム、昌泰二年大納言藤原時平ヲ左大臣ト爲シ、道真ヲ右大臣ト爲ス、其政務ヲ綜理スル裁決流ル、カ如ク海内景仰ス、時平少壯意甚タ不平ナリ、關白ノ密旨アルヲ聞クニ及テ益々悦ハス、源光、藤原定國、藤原管根等ト謀リ、誣奏シテ曰ク、道真帝ヲ廢シテ女婿齊世親王ヲ立テント欲スト奏ス、天皇之ヲ信シ、道真ヲ太宰府ニ貶謫ス、天下ノ人皆ナ之ヲ冤トセリ、

(五) 清行ノ封事トハ如何

謂ク醍醐天皇延喜十四年詔シテ直言ヲ求ム、式部大輔兼大學頭三善清行、便宜十二事ヲ上ル、祭祀ヲ肅ミ、奢侈ヲ禁シ、兼辨ヲ抑ヘ、學生ヲ勵マシ、舞妓ヲ省キ、刑獄ヲ慎ミ、祿賜ヲ均フシ、牧宰ヲ擇ビ、課役ヲ程シ、邊備ヲ嚴ニシ、僧徒ヲ汰シ、津泊ヲ修ム、其條陳スル所皆ナ時事ニ適切シ、天皇深ク之ヲ嘉シ尋テ服飾ノ奢靡ヲ禁ス、

(五) 醍醐天皇ノ御性徳ヲ問フ

謂ク醍醐天皇歷朝ノ積弊ヲ承ケ、精ヲ勵シ治ヲ圖リ、常ニ刑法ノ弛ヲ患ヒテ之ヲ嚴ニ

シ、臣下ヲ見ル毎ニ温顔ヲ以テ之ニ接ス、嘗テ寒夜ニ方リテ親ヲ御衣ヲ脱シテ以テ民ノ疾苦ヲ察ス、嘗テ曰ク、人君己ヲ持スルノ嚴格ナルトキハ臣民何ソ言ヲ盡スヲ得ント、帝在位年久シク國家泰平ナリ、世以テ仁徳帝ニ比ス、後世ニ至テ治ヲ言フモノ、必ス延喜ノ時世ヲ稱ス

(五) 天曆ノ御治世ハ如何

謂ク天曆ハ村上天皇ノ年號ナリ、天皇亦明敏ニシテ寬恕ナリ、意ヲ政治ニ留メ嘗テ賤吏ノ老者ヲ召シテ密カニ問テ曰ク、當今ノ治ト延喜ノ治ト孰レカ得失アルト、吏曰ク異ナルヲナシ、帝切リニ問フ、吏曰ク賤吏何ヲカ言ハン、唯々主殿寮ノ燎燭ヲ多ク費スト、率分堂ニ草ノ生セシコ小ク異ルノミ、蓋シ政廳忙シクシテ歲貢ナキヲ謂フナリ、天皇悟ル、是ヨリ益々勉勵ス、

(五) 文時ノ封事トハ如何

謂ク村上天皇天曆八年、大内記管原文時ニ勅シテ闕政ヲ言ハシム、文時三事ヲ條陳ス、其一ニ曰ク、方今風俗奢侈ヲ極メ、官途ノ交私門ノ謁ニ至ルマデ、相競フテ力ヲ致サ、ルナシ、故ニ貧キモノハ固ヨリ資ヲ失ヒ、富ル者モ亦タ産ヲ傾ク、蓋シ上ノ爲ス所、下必ス之レニ趨ク、昔シ吳王劍客ヲ好ム、百姓瘵瘡多シ、楚王細腰ヲ好ム、宮中餓死多シ、

夫レ餓ト癡トハ人ノ惡ム所、然レモ尙ホ是ノ如シ、願フニ朝廷苟モ奢ヲ禁ゼハ、天下必
 ス儉ニ從ハン、其二ノ畧ニ曰ク、方今授任正シカラザルニ非ス、而シテ財ヲ以テ人ヲ官
 ニシ、國用ヲ助クル者アリ、功勞ノ臣自カラ退キ、聚斂ノ徒爭ヒ進ム、昔漢ノ明帝公主
 子ノ爲メニ郎ヲ求ムルヲ許サス、而シテ錢十萬ヲ賜フ、官其人ニ非ザレハ、則チ害百姓
 ニ及ブヲ以テナリ、降テ桓靈ニ及ンデ、乃チ初メテ官ヲ賣ル、漢業以テ衰フ、是レ鑑ム
 ヘキナリ、其三ハ遠人ヲ懷ルヲ請フナリ、天皇之ヲ嘉納ス、而シテ文時ハ道眞ノ孫ナリ
 其說ク所切實ニシテ能ク時弊ヲ穿ツ、

(五) 參議及藏人所ノ初メハ何帝ノ時ナリヤ

謂ク初太政官ハ太政大臣左右大臣ヲ以テ庶政ヲ統ヘ、大少納言之參議セシカ、文武帝
 ノ大寶二年ニ參議五人ヲ置キテ朝政ニ與ラシメタルニ、平城帝ノ大同元年參議ノ號ヲ廢
 セリ、嵯峨天皇ノ弘仁元年ニ始メテ藏人所ヲ置キ、頭二人ヲ補シ、又參議ヲ復シ八人ヲ
 置ク、此時平城上皇仙洞ニ在リテ内ニハ藥子外ニハ仲成各其奸計ヲ逞クシテ亂階ヲナサ
 シトスレハ、大臣ノ内ニモ謀ヲ通スルモノ無キニアラス、因テ參議ノ職ヲ分タシメテ其
 權ヲ分チ、藏人所ヲ置キテ殿上ニ侍ラシメ、機密ノ文書及諸訴ヲ掌ラシメ、年來ノ弊政
 ヲ正サントスルニヨリ、殊ニ近臣ヲシテ之ニ與カラシメタリ

(六) 檢非違使廳ノ始メヲ問フ

謂ク嵯峨天皇始メテ衛門ノ尉ヲシテ檢非違使ノ職ヲ兼行セシム、初メ非違ヲ檢彈スルハ
 彈正臺ノ職タリシニ、此制アリテヨリ其職ヲ分ツ、後天長年中ニ始メテ檢非違使廳ヲ置
 キテ一局トセリ

(六) 檢非違使廳ノ職務及權力如何

謂ク畿内諸國ニ盜賊殺害等ノ事アレハ分出シテ追捕シ、權威甚重シ、朝廷モ亦最其任ヲ
 重シ、別當ノ命令ヲ勅宣ニ擬シテ廳宣ト稱ス、是ニ於テ衛府ノ追捕、彈正臺ノ糾彈、
 刑部省ノ判斷、京職ノ訴訟等悉ク使廳ノ手ニ歸ス

(六) 天慶ノ亂及其原因如何

謂ク天慶二年平將門反ス、將門曾テ攝政藤原忠平ニ因リ檢非違使タランヲ求ム、忠平
 肯セス、將門忿テ徒ヲ下總ニ聚メ、伯父常陸大掾國香ヲ攻殺シ、又其叔父下總介良兼ヲ
 滅ス、武藏權守與世王兇儉乱ヲ好ム、將門ニ說テ曰ク、夫レ一國ヲ取ルモ誅セラレ數國
 ヲ取ルモ誅セラル、誅ハ一ノミ、宜シク要害ニ據リ天下ニ霸タルベシト、將門大ニ喜ヒ
 之ヲ謀主トナシ、上下野州武相總ノ五國ヲ下シ、府ヲ下總ノ猿島ニ置キ、百官ヲ定メ潛
 號シテ平親王ト稱ス、其友藤原純友又兵ヲ伊豫ニ起シ、遙ニ將門ニ應シ、人ヲシテ京師

ニ遣リ火ヲ放ツ、京師騒然タリ

(六三) 平將門ヲ征討セシハ誰ソ

謂ク朝廷國香ノ子平貞盛ニ命シ將門ヲ征セシム、貞盛下總大椽藤原秀郷ト謀リ、將門ノ
虛ヲ伺ヒ、兵四千餘人ヲ以テ急ニ之ヲ襲フ、將門大ニ敗レ鳥廣山ヲ保ツ、貞盛潛ニ人ヲ
遣シテ將門カ營ヲ燒ク、將門殘兵ヲ以テ拒戰甚タカム貞盛大ニ戰ヒ遂ニ之ヲ敗ル、將門
單騎出テ走ル、貞盛追馳シ射テ其右額ニ中ツ、將門馬ヨリ墜ツ、秀郷進ンテ其首ヲ斬ル、
與世王以下悉ク誅ニ伏シ八州皆定ル

(六四) 兼明親王ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク親王博學雄才ニシテ當時ニ冠タリ、然レモ藤原兼道ノ爲ニ忌マレ其志ヲ展ルコトヲ得
ス、快々トシテ樂マス、既ニシテ薨ス、一條天皇兼明ノ子ヲ召シ、其遺物ヲ問フ乃チ菟
裘賦ヲ獻ス、帝之ヲ見其抑鬱ヲ憐ミ亦心ニ感スル所アリ親ヲ書寫シテ巾箱ニ藏メ玉フ

(六五) 藤原兼道ノ驕僭ヲ問フ

謂ク兼道請テ關白トナリ威權甚タ盛ナリ、又邸ヲ堀川ニ構フヤ其結構壯麗ヲ極メ、僭カ
ニ宮闕ニ擬ス、偶々之ヲ謗ルモノアレハ忽チ捕ヘテ獄ニ下ス、諸人反目之ヲ憎ム、又弟
兼家ト嫌隙甚タシ、故ニ朝臣ノ兼家ノ邸ニ至ルモノ必ス夜ヲ以テセリ

(六六) 一條帝ノ朝ノ人材及政事如何

謂ク一條天皇嘗テ曰ク、朕不徳ナリト雖モ唯人ヲ得ルノ一事ハ前朝ニ愧チスト、時ニ朝
典ニ明カナルハ藤原齊信公任源俊賢アリ、書ニハ藤原佐理藤原行成アリ文學ニハ大江時
棟慶滋保胤アリ音律ニハ源雅信アリ、加之中宮上東門院文學ヲ好ミ婦人ノ才藝アルモノ
ヲ召致セシヨリ、婦人文詞ヲ學フノ風大ニ振起シ、紫式部、清少納言、赤染衛門、和泉
式部、伊勢大輔、小式部内侍等ノ才媛輩出ス、然レモ藤原道長權ヲ專ラニシ政聖慮ニ出
テス、帝之ヲ惡ムト雖モ制スル能ハス、

(六七) 藤原道長ノ人ト爲リヲ問フ

藤原道長ハ一條、三條、後三條ノ三帝ニ事ヘテ、樞機ヲ典スルコト三十餘年、女ハ三朝ノ
皇后トナリ、子ハ攝政關白トナリ、政柄已ニ歸シ、黜陟心ニ任ス、一條帝已來天子屢々
其第ニ幸シ、富榮王室ニ過キタリ

(六八) 道長ガ奢驕ノ一端ヲ示セ

謂ク一條天皇嘗テ瘡ヲ患フ、僧侶ヲシテ祈禱セシム、賞絹足ラサルヲ以テ道長ノ第ニ取リ
テ給セリ、又東三條ノ第嘗テ災ニ罹リシカハ、諸國ニ課シテ營造セシメ、近衛府ノ材木、及
神泉苑、乾臨閣ノ石ヲ取リテ以テ其用ニ充ツルニ至レリ、道長嘗テ歌ヲ詠シテ曰ク、此

世をば我世とぞおもふ望月のかけたる事のなしとおもへば、以テ其奢僭ノ甚タシキヲ知ルヘシ、外威ノ盛ナルヲ古來比類ナシ

(六九) 後三條天皇ノ御治世ヲ問フ

謂ク天皇諱ハ尊仁後朱雀天皇ノ第三子ナリ、治歷四年太政官廳ニ即位シ玉フ、天皇諸王ニ在シ時ヨリ毎ニ臣強君弱ノ傾アルヲ嘆ス、其東宮ニ居ルヲ二十三年學ヲ好ミ、國家ノ故事ヲ習究ス、位ニ即ニ及ンデ藤原氏ノ權ヲ抑ユ、延久元年勅シテ寛德二年以後新置ノ莊園ヲ罷ム、其以前ニ在ルモノト雖モ、契券明ナラス、又蠹蝕セルモノハ停止ス、又始メテ記録所ヲ太政官ノ朝所ニ置ク、天皇久シク儲宮ニ在シ世亂ヲ經歷シ、且ツ文學ヲ好ミ、博ク古今ニ通ス、位ニ即クニ及テ諸政ヲ總攬シ、民間ノ訴訟ヲ聽斷ス、時ニ權貴多ク莊園ヲ占メ、民ノ蠹毒ヲ爲ス、天皇之ヲ患ヒ是ニ至テ記録所ヲ置テ虚實ヲ檢覈ス、二年絹布ノ制ヲ定メ、尋テ沽價法及斗升ノ法ヲ定ム、天皇量制ヲ審ニセント欲シ、新ニ器ヲ作り藏大頭藤原資仲ヲシテ之ヲ督サシム、天皇自カラ簾竹ヲ抽キ截テ之カ準ト爲ス、成ニ及テ資仲等小舍人ヲ率ヒ殿庭ノ沙ヲ量テ之ヲ試ミ、然後穀倉院ノ米ヲ取テ之ヲ量ル、後世遵用シ之ヲ宣旨升ト云フ

(七〇) 平忠常征討ノヲ問フ

謂ク長元々年前上總介平忠常亂ヲ起シ上總安房ヲ陷レ、攻メテ安房守惟忠ヲ殺ス、朝廷將ヲ遣テ之ヲ討ツ克タス、更ニ甲斐守源賴信ニ命シ、坂東ノ兵ヲ率ヒ之ヲ討タシム、忠常湖ニ臨テ壘ヲ列シ、悉ク舟船ヲ奪フ、賴信涉ルヲ得ス、衆中湖中ノ淺所ヲ知ル者アリ賴信之ヲシテ潛ニ先ツ渡ラシメ、葦ヲ以テ淺所ニ標ス、茲ニ於テ全軍流ヲ亂シテ進ム、忠常大ニ驚キ戰ハスシテ降ル、乃チ忠常ヲ擒ニシテ歸リ、忠常途ニ病死ス、其首ヲ斬テ之ヲ獻ス

(七一) 藤原實資ハ如何ナル人ナリヤ

謂ク實資資性剛直ニシテ操行アリ、藤原道長ノ專横ニ當テ舉朝阿諛令色セサルナシ、獨リ實資侃然トシテ正義ヲ守ル、上東門院道長女入内スルヤ、道長一時ノ名流ニ乞ヒ、和歌ノ屏風ヲ作ル、法皇モ亦御詠アリ、實資獨リ拒ンテ曰ク身苟モ公卿ニ列ス、奚ソ女御ノ姿装ヲナサンヤト、後一條帝嘗テ凶夢アリ、或人佛經ヲ誦センヲ勸ム、實資之ヲ止メテ曰ク、陛下唯タ己ヲ正シクシ政ヲ修メハ百邪モ犯ス能ハスト世之ヲ賢右府ト稱セリ

(七二) 王朝時代ノ刑法ハ如何

謂ク此時代ノ刑ニハ五種アリ、答罪、杖罪、徒罪、流罪、死罪ナリ、答罪トハ小杖ニテ鞭ツナリ、十ヨリ五十マデ五等アリ、杖罪トハ大杖ニテ鞭ツナリ六十ヨリ百マデ五等ア

リ、徒罪トハ一年ヨリ半年ツ、加ヘ三年マデノ五等アリ、流罪トハ遠、中、近ノ三等ニ分ツ京ヨリノ里數ニテ差別アリ、死罪ニ絞罪斬罪ノ二等アリ此五罪ハ唐朝ノ制ニヨリテ參酌セシナリ

(七) 八虐トハ何ソヤ

- (一) 謀反
- (二) 謀大逆
- (三) 謀叛
- (四) 惡逆
- (五) 不道
- (六) 大不敬

(七) 不孝

(八) 不義

右ノ虐罪ニ當ルモノハ常赦ニハ赦サス又應議ニモ減セサルナリ、應議トハ六議ニ應スルコナリ、六議トハ

(一) 議親 天皇及太皇太后皇后等ノ親族

(二) 議故

(三) 議員

(四) 議能

(五) 議功

(六) 議貴

右ノ如ク親、故、賢、能、功、貴ノモノニシテ罪アルハ、常人ナレハ規定ノ刑罰ニ處スヘキヲ詮議シテ赦免セラル、コナリ

(七) 院宣ノ政トハ何ソヤ

謂ク後三條天皇賢明ノ主ヲ以テ藤原氏ノ權ヲ抑ヘ、位ヲ皇太子ニ讓リ、政ヲ院中ニ聽キ、王政ヲ恢復セントシテ不幸早ク崩御シ玉ヲ白河天皇又父皇ノ志ヲ紹キ、政ヲ陣中ニ置キ、

院宣ヲ以テ天下ニ號令シ、院宣ノ勢力詔勅ヨリ重キニ至レリ、院宣トハ院ハ法皇ノ御所ヲ云フ、宣ハ宣旨ナリ

(七) 前九年ノ役トハ如何

後冷泉天皇天喜四年、陸奥ノ土豪安倍賴時亂ヲ作ス、賴時父祖數代陸奥ニ居リ、部族強大、陸奥ヲ横行シ、自ラ六郡ノ酋長ト爲リ、私利ヲ私シテ貢賦ヲ輸サス、時ニ兵ヲ出シテ侵掠ス、國司藤原登任等之ヲ伐ツ利アラス、白河關以北海ニ抵ルマデ皆ナ賴時ニ屬ス、朝廷源賴義ヲ以テ陸奥守兼鎮守府將軍ト爲シ、之ヲ討タシム、五年九月ニ至リ賴時終ニ誅ニ伏セリ、然レモ其子貞任尙屈セス、荐リニ殘兵ヲ集メテ善ク闘フ、互ニ勝敗アリテ數年決セス、康平五年出羽ノ酋長清原武則兵一萬ヲ以テ來リテ賴義ニ從フ、賴義大ニ力ヲ得テ共ニ攻テ貞任ノ弟宗任ガ小松ノ柵ヲ拔キ、之ヲ走ラシ、勝ニ乘シ進ンテ貞任ヲ厨川城ニ攻ム、城兵守嚴ニシテ近ツクコトヲ得ス、賴義乃チ火ヲ城中ニ放チ、貞任以下諸弟並ニ其黨與ヲ誅ス、宗任族ヲ率井テ降ル、陸奥始メテ定マル、朝廷其功ヲ賞シ賴義ヲ正四位伊豫守ニ義家ヲ從五位出羽守ニ武則ヲ從五位鎮守府將軍ニ任ス、其間連戰九年ニ亘ル之ヲ前九年ノ役ト云フ

(七) 後三年ノ役トハ如何

謂ク堀河天皇ノ寛治元年、陸奥守源義家兵ヲ出シテ清原武衡家衡ノ胤ヲ平グ、初メ清原武則前九年ノ戦功ニ依リ、鎮守府將軍トナル、其子武貞傳ヘテ陸奥六郡ヲ領シ、武貞ノ長子貞衡ニ至リ、勢益々強盛ナリ、異母弟家衡事ヲ以テ兄ニ背キ、兵ヲ擧ケテ相攻ム、源義家陸奥守ト爲リ、出羽ニ赴キ家衡ヲ圍ミテ利アラズ、家衡ノ叔父武衡義家ノ敗ルト聞キ、兵ヲ起シテ之ニ應シ、仙北金澤ノ柵ニ據ル、義家大ニ怒リ數萬騎ヲ將井テ之ヲ攻ム、義家ノ弟義光京師ヨリ下リテカヲ併ス、武衡家衡柵ヲ燒テ遁ル、義家追撃シテ二衛及ヒ其黨四十八人ノ首ヲ梟ス、奥羽平ク之ヲ前役ニ對シテ後三年ノ役トイフ

(七) 源氏家人ノ稱ハ何時代ヨリ始マリシヤ

謂ク義家後三年ノ捷ヲ奏シ將士ノ賞ヲ請フニ朝議義家カ勅ヲ受ケスシテ兵ヲ擧ケシヲ以テ私闘トナシテ功ヲ賞セス、依テ義家私資ヲ以テ賞ヲ行ヘリ、是ヨリ源氏ノ恩威東國ニ敷キ相俱ニ請フテ其子弟ヲ擁戴シ、自ラ家人ト稱スルニ至レリ

(六) 保元ノ亂ノ起因ハ如何

謂ク保安四年崇徳天皇、鳥羽帝ノ讓ヲ受ケテ位ニ即ク、崇徳天皇ハ鳥羽法皇ノ子ナリ、然レモ故アリテ之ヲ疎ニス、鳥羽法皇寵姫アリ美福門院ト云フ、保延五年皇子體仁ナリヒトヲ生ム、法皇大ニ悦ビ、生レテ僅ニ四月立テ儲貳トス、美福門院法皇ニ體仁ノ速ニ登祚センコトヲ勸ム、法皇乃チ崇徳帝ニ逼リテ位ヲ退カシメ、遂ニ體仁ヲ立ツ之ヲ近衛帝トス、崇徳帝固ヨリ位ヲ去ルノ意無シ、近衛帝ノ崩スルヤ崇徳上皇其子重仁ヲ立テントス、衆亦屬望ス、美福門院先帝ノ早世ハ上皇ノ咒詛ノ爲メナリト爲シ、重仁ヲ立ツルヲ欲セス、乃チ鳥羽法皇ニ勸テ雅仁親王ヲ立ツ、之ヲ後白河天皇トス、崇徳上皇之ヲ恚リ雅仁ヲ廢シ位ヲ復セント欲ス、保元元年鳥羽法皇崩ス、上皇入テ臨ム、遺命シテ宮ニ入レス、上皇大ニ恚ル、茲ニ於テ上皇機ニ乘シ重祚セント欲シ、左大臣賴長ニ告ク、賴長其兄忠通ト相惡シ、賴長上皇ヲ助ケ忠通ヲ傾ケ、政權ヲ專ニセント欲シ、之ヲ贊ケテ兵ヲ擧ケ白河ノ北殿ニ據ル、

(五) 保元ノ亂ノ結局ハ如何

謂ク上皇賴長ヲシテ源爲義爲朝等ノ將士ヲ召シテ白河殿ニ據ル、後白河天皇ハ源義朝平清盛等ヲシテ來リ攻メシム、勢甚々盛ナリ、爲朝等奮戰之ヲ却ク、義朝火ヲ縱ツ宮中大ニ亂レ、上皇蒼皇出テ走り如意山ニ入ル、遂ニ執ヘラレテ讃岐ニ流サル、賴長又流矢ニ中リテ死ス、爲義出テ降ル、義朝ニ命シ之ヲ斬ラシム、爲朝捕ハレ大島ニ流サレ、事平ク、之ヲ保元ノ亂ト云フ

(六) 平治ノ亂ノ起因及結局ヲ示セ

謂ク初メ藤原信賴後白河上皇ニ寵アリ、近衛大將タランヲ求ム、上皇之ヲ許サント欲ス、信西竊カニ諫詛ス、信賴之ヲ啣ム、源義朝保元ノ亂ニ功アリ、而シテ勢望清盛ニ及ハス、心甚タ不平ナリ、又嘗テ女ヲ信西ノ子ニ妻サンヲ求ム、信西肯セス、而シテ清盛ト婚ス、是ニ於テ義朝益々恨ム、藤原經宗及惟方亦信西ヲ嫉忌ス、因テ陰カニ相黨シ信西ヲ除カンヲ謀ル、平治元年信賴義朝等兵ヲ擧ケ、夜三條殿ヲ襲フテ之ヲ燒キ、天皇及ヒ後白河上皇ヲ宮中ニ幽囚シ信西ヲ斬ル、信賴自ラ大臣大將ト爲リ、冠服天子ニ僭擬ス、義朝以下官ヲ拜ス、時ニ清盛父子熊野ニ詣ツ、變ヲ聞キ馳セテ六波羅ノ邸ニ歸ル、己ニシテ經宗惟方罪ヲ悔ヒ帝ヲ奉シテ平氏ノ第二奔ル、清盛勅ヲ奉シ、子重盛等ヲシテ三千餘騎ヲ率ヒ信賴ヲ攻メシム、信賴倉皇震慄シ、出ツル處ヲ知ラズ、直ニ逃レ去ル、義朝悲テ曰ク怯夫乃公ノ事ヲ敗ルト、子義平ヲシテ之ヲ拒カシム、義平奮戰自ラ重盛ヲ追フテ紫宸殿ノ庭ヲ七匝ス、竟ニ義朝ト俱ニ進ンテ六波羅ヲ攻ム、然レモ克タス、衆潰走ス、義朝乃チ關東ニ赴ント欲シ、尾張ニ至リ、舊臣長田忠致ニ弑セラル、義平信賴亦捕ヘラレテ誅ニ伏ス、事漸ク平クヲ得タリ

(八二) 平氏ノ權勢ヲ得タル原因ヲ問フ

謂ク平氏ハ桓武天皇ノ皇胤ヨリ出ツ、鎮守府將軍貞盛六世ノ孫ニ忠盛アリ、代々武ヲ以テ著ハル、然レモ當時朝廷武人ヲ賤メ、忠盛ノ時ニ至ルマテ昇殿ヲ許サレス、忠盛ニ至リ鳥羽上皇ノ寵ヲ得累進シテ但馬守トナリ、尋テ刑部卿トナリ昇殿ヲ許サル、平氏之ヨリ勃興ス、其子清盛保元ノ亂ニ功アリ次デ平治ノ亂ニ義朝信賴等ヲ討テ功アリ、勢位漸ク加フ、其女徳子ヲ高倉天皇ノ宮ニ納レテ皇子ヲ生ム、安徳天皇是ナリ、清盛功勳ヲ恃ミ、外戚ノ尊貴ヲ恃ミ、威福ヲ極メ、子弟一族朝堂ニ滿チ、其采邑二十餘國ニ誇カルニ至レリ

(八三) 治承ノ變ヲ問フ

謂ク嘉應元年平清盛其妻時子カ太后ノ姉ナルヲ以テ勢力ヲ恃ンデ權ヲ專ラニス、因テ後白河上皇之ヲ忌ミ、薙髮シテ佛道ニ歸シ法皇ト稱ス、治承元年内大臣藤原師長ヲ以テ左大臣ト爲シ、大納言平重盛ヲ内大臣ト爲ス、時ニ右近衛大將闕ク、法變ノ寵臣權大納言藤原成親之レニ補セラレンヲ望ム、然ルニ清盛ハ其子宗盛ニ授ク、成親大ニ憤リ潛カニ檢非違使平康頼、左衛門尉藤原師光等ト平氏ヲ滅ンヲ謀リ、藏人源行綱ヲ引テ黨ト爲シ、法勝寺ノ僧俊寛ガ別莊ニ會シテ事ヲ議ス、既ニシテ行綱兵ノ寡弱ナルヲ見テ、其事ノ成ラサルヲ懼レ、清盛ニ自首ス、清盛大ニ駭キ師光ヲ斬リ成親ヲ備前ニ流シ、後人ヲシテ之ヲ殺サシメ、俊寛ヲ鬼界島ニ放ツ、法皇モ亦タ其謀ニ與ルヲ以テ、鳥羽殿ニ幽

セント欲ス、重盛極諫シテ乃チ止ム、之ヲ治承ノ變ト云フ

(六三) 清盛ノ兇暴ハ如何

謂ク治承三年重盛薨ス、法皇攝政基房ト議シテ重盛ノ封戸ヲ收ム、清盛已レノ意見ニ齟齬スルヲ以テ大ニ怒リ、重盛何ノ罪カアルト兵ヲ率テ京師ニ入り關白藤原基房以下ノ官職ヲ奪ヒ、法皇ヲ烏羽殿ニ幽ス、殿ノ防衛甚タ嚴ニシテ板屋ヲ造リテ法皇ヲ幽ス、食膳日ニ二次、時人呼テ牢御所ト曰フ、尋テ高倉天皇ヲシテ御位ヲ安徳天皇ニ傳ヘシメ、已レ外戚ヲ以テ内機ヲ裁斷ス、又奏シテ都ヲ攝津福原ニ遷ス、清盛世人ノ己レヲ誹譏スル者アルヲ覺リ、童子三百人ヲ各所ニ放チ、秘密ヲ窺ハシメ、以テ嚴刑濫罰ヲ事トス

(六四) 源賴政兵ヲ舉クルノ理由如何

謂ク治承四年源賴政後白河法皇ノ第二子以仁王ヲ奉シテ兵ヲ起ス、初メ平治ノ亂ヨリ益々勢ヲ得テ宗族皆安樂ニ耽ル、而シテ源氏日ニ衰フ、賴家之ヲ慨嘆セリ、清盛ノ法皇ヲ幽スルニ及ヒ王ニ勸メテ諸國ノ源氏ニ檄シテ平氏ヲ滅サンコトヲ謀リ、源行家ヲシテ王ノ令旨ヲ東國ニ傳ヘシム、諸源皆ナ應ス、清盛之ヲ聞キ大ニ驚キ、兵ヲ帥ヒテ京師ニ入り王ノ屬籍ヲ削ル、然レ臣未ダ賴政ノ主謀タルヲ知ラス、其子檢非違使兼綱ヲシテ王ヲ收メシム、兼綱急ニ賴政ヲ告ク、賴政王ヲ奉シテ園城寺ニ赴ク、延曆興福ノ二寺約ニ背キ

來ラス、乃チ南都ニ走ル、清盛ノ兵追躡ス、賴政之ヲ宇治ニ拒ク克タス、平等院ニ入り

テ死ス、王モ亦流矢ニ中リ光明山下ニ薨ス

(六五) 賴朝兵ヲ起セシ狀況如何

謂ク賴朝以仁王ノ令ヲ奉シ兵ヲ伊豆ニ起ス、時二年三十四、阪東ノ將士素ヨリ源氏ニ服スルヲ以テ賴朝ニ來リ屬スル者雲ノ如シ、賴朝諸州ヲ伏シ平維盛ヲ富士川ニ擊チ、遂ニ鎌倉ニ入ル、範賴、義經亦來リ會ス、木曾義仲亦之ニ應ス、兵氣大ニ振フ

(六六) 平氏西國ニ奔リシ顛末如何

謂ク木曾義仲平維盛ヲ越中ニ敗リテ西上ス、源行家後ニ嗣キ兵勢恰モ破竹ノ如シ、進テ叡山ニ陣ス、宗盛大ニ怖レ、帝及ヒ法皇ヲ奉シテ西ニ走リ以テ再舉ヲ圖ラント欲ス、知盛以テ不可トス、宗盛聽カス諸族ヲ率ヒテ西ス、時ニ義仲行家ト兵六萬ヲ帥ヒ、路ヲ分ツテ京師ニ入ル、法皇、法住寺殿ニ還御シ、皇子尊成位ニ即キ玉フ、是ヲ後鳥羽天皇ト爲ス、因テ義仲ヲ從五位下左馬頭ニ任シ後守ニ叙シ、行家ヲ備前守ニ叙シ、平族二百餘人ノ官爵ヲ削リ、京師ヲ守ラシム

(六七) 富士川ノ戰ヲ記セ

謂ク清盛其孫維盛及薩摩守忠度等ヲシテ賴朝ヲ討タシム、賴朝之ヲ富士川ニ逆ヘ戰フ、

武藏人齋藤實盛平軍ノ嚮導タリ、其兵士ヲ激勵セント欲シ、盛ニ東兵ノ勇ヲ説ク、平氏ノ士大ニ怖ル、一夜水禽ノ群起スルヲ聞キ、以爲々源軍大ニ至ルト人馬相踏藉シテ走ル、頼朝之ヲ追撃セント欲ス、廣常等止テ己ム、維盛亦留テ戰ハント欲ス、忠清固ク諫メテ歸ル、清盛大ニ怒リ維盛ヲ流シ、忠度ヲ斬ラントス、衆之ヲ救解シテ止ム

(八八) 義仲ノ暴恣ヲ記セ

謂ク壽永二年、法皇義仲ニ勅シテ西伐セシム、義仲糧食乏シキヲ以テ發セス、士卒ヲ縱テ京師ヲ侵掠ス、法皇稍々之ヲ厭苦シ、頼朝ヲ引テ之ヲ除カント欲ス、義仲之ヲ聞テ懼ヒズ、遂ニ兵ヲ率ヒテ備中ニ赴キ、進テ屋島ヲ攻メント欲ス、時ニ頼朝兵ヲ遣ハシ、二弟範頼、義經ニ之ヲ引卒セシメ、貢賦ヲ護シテ、京師ニ入レトス、義仲之ヲ聞キ引テ還ル、法皇勅シテ之ヲ止ム、義仲勅ヲ奉セズ、是ニ至テ法皇檢非違使平知康ニ命ジ、延曆園城二寺ノ僧徒ニ義仲ヲ討タシメント欲ス、義仲遽カニ兵ヲ舉ケ、法住寺殿ヲ圍ミ、火ヲ放テ之ヲ燒ク、知康敗走ス、義仲新帝ヲ閑院ニ法皇ヲ攝政基經ノ第二遷シ、頼朝ヲ討ツノ宣旨ヲ乞フ、法皇已ムヲ得ズシテ之ヲ許シ、征夷大將軍ト爲ス、世呼ンテ旭日將軍ト稱スルハ、俄カニ官爵ノ進ムヲ以テナリ

(八九) 宇治川ノ戰ヲ記セ

謂ク法皇素ト義仲ノ暴恣ヲ憂ヒ、之ヲ弭メント欲シテ暫ク之ヲ忍ヒ東軍ノ來ルヲ待ツ、既ニシテ源範頼義經、兵六萬ヲ率ヒテ義仲ヲ討ツ、範頼勢多ヨリシ、義經菟道ヨリシ、二道並ヒ進ム、義經精悍ニシテ兵略アリ、義仲今井兼平、根井行親ヲ遣シテ之ヲ菟道勢多ニ拒ク、義經菟道ニ至ル、其將佐々木高綱等流ヲ亂シテ進ム、北軍支ヘズ遂ニ大ニ敗ル、義仲敗ヲ聞キ僅カニ三百騎ヲ以テ進ンテ東軍ヲ衝ク、向フ所口披靡ス、義經數百騎ヲ連テテ衝撃亂射ス、義仲大ニ敗走シ盡ク其騎ヲ亡フ、而シテ馬淖ニ陥リ箭額ニ中リテ死ス、

(九〇) 一ノ谷ノ戰ヲ記セ

謂ク義仲既ニ死ス、平宗盛進テ福原ノ故趾ヲ復シ、城ヲ築キテ之ニ據ル、生田森ヲ以テ東門トナシ、一ノ谷ヲ以テ西門トナス、城山ヲ負ヒ海ニ瀕シ、兵艦數千兵十萬餘ヲ以テ備フ、平教盛等山陽南海ノ諸源ヲ撃テ悉ク之ヲ平ゲ、威關西ニ振フ、頼朝法皇ノ宣旨ヲ以テ二弟範頼義經ニ命ジ、兵數萬ヲ率ヒテ之ヲ攻メシム、範頼五萬騎ヲ以テ東門ニ向ヒ義經一萬騎ヲ以テ西門ニ向フ、義經更ニ自ラ數騎ヲ率ヒ、潛カニ城後鷗越ニ出テ大呼シテ入ル、城兵驚キ潰ユ、乃チ火ヲ放テ城ヲ燒キ三面合撃シ、城遂ニ陷ル、宗盛先帝ヲ奉シテ屋島ニ奔リ、源軍京師ニ還ル

平

(九一) 屋島ノ戰ハ如何

既ニシテ義經又南海ヲ征セント欲シ、京師ヲ發シテ邊海ニ艦ス、東軍水戰ニ習ハス衆議紛然タリ、義經目ヲ數十騎ヲ從ヒ颯風ヲ冒シ、夜尼子浦ニ達シ、敵將櫻間良遠ヲ走ラシメ、進テ屋島ヲ犯ス、平軍大ニ驚キ、宗盛先帝ヲ奉シテ海ニ航ス、時ニ日既ニ晡ナリ、敵一舟ヲ出シ、美姫ヲ載セテ扇ヲ竿頭ニ挿ミ、之ヲ舳ニ植テ、陸地ヲ去ルヲ五十歩ノ處ヨリ麾シテ其扇ヲ射ンコトヲ求ム、義經乃チ那須宗高ニ命シテ之ヲ射サシム、宗高一發シテ之ニ中ツ、扇穀忽チ碎ケテ波上ニ翻リ落ツ、兩軍呼譟シテ雷ノ如シ、是ニ至テ西軍又來リ戰フ、遂ニ利アラヌ、宗盛先帝ヲ奉シテ志度ニ遁ル、義經追擊シテ之ヲ破ル、

(九二) 壇浦ノ戰ヲ記セ

謂ク平軍屋島ニ破ラレ、宗盛鎮西ニ趣カント欲ス、範賴三萬騎ヲ以テ筑前ニ在ルト聞キ、還テ壇浦ニ泊ス、建久三年義經兵艦七百餘艘ヲ以テ進撃ス、平軍皆殊死シテ戰フ、平將田口成良降リ告テ曰ク、平氏乘輿ヲ兵艦ニ移シ、兵士ヲ帝船ニ置キ、誘テ之ヲ撃タント欲スルナリト、義經乃チ宗盛等ノ在ル所ヲ知り、兵ヲ麾テ之ヲ集ラシム、西軍遂ニ大ニ敗レ、資盛教經等相繼テ戰死ス、二位ノ尼神劍ヲ帶ヒ、帝ヲ抱テ海ニ投ス、建禮門院繼テ投ス、源軍鈞シテ之ヲ獲、宗盛亦同シク獲ラレ、知盛之ヲ見テ切齒シテ曰ク、我以テ

死スヘシ、教盛ト共ニ自殺ス、宗盛父子京師ニ引致セラル、後チ之ヲ篠原ニ斬ル、於是平氏亡フ

(九三) 天子兩立ノ惡弊ハ何時代ニ始マリシヤ

謂ク壽永ノ亂ニ平氏ノ一族安德帝ヲ奉シテ西國ニ奔リシカハ京師主上ナシ、後白河法皇使ヲ遣シテ留ムレモ宗盛從ハス、右大臣藤原兼實法皇ニ勸メテ天子ヲ立テ、亂原ヲ塞カシコトヲ奏ス、法皇之ヲ嘉納シ、尊成親王ヲ立テ、皇太子トシ、即日踐祚ス、時ニ年四歲、後鳥羽天皇是ナリ、西ニ安德天皇アリ、是レ兩帝分立ノ始メニシテ、古來例無キ事ナリ

(九四) 源賴朝捕ハレシ時何ニ因テ死ヲ免レシヤ

謂ク平治ノ亂ニ源賴朝父義朝ニ隨テ東走ス、路ニ大雪ニ遇ヒ、義朝ト相失ス、尾張守平賴盛ノ家人宗清ニ執ハレ、六波羅ニ送ラル、清盛命シテ之ヲ宗清ノ家ニ囚ス、宗清之ヲ待スルヲ甚厚シ、密ニ清盛ノ繼母池尼ニ白シテ曰、囚人ノ容姿故右馬介殿ニ似タリ、(右馬介ハ池尼ノ生ム所ナリ早ク亡ス) 尼之ヲ聞テ憫傷ス、宗清賴朝ニ問テ曰ク、郎君免レント欲セハ、吾爲ニ之ヲ請ン、賴朝曰父兄皆亡セリ、冀ハ僧ト爲テ冥福ヲ修メンノミ、宗清之ヲ池尼ニ語ル、尼重盛ヲシテ之ヲ乞ハシム、清盛肯セス、尼泣テ曰、我之カ爲ニ寢食常ヲ失ス命亦久カラス、汝能ク我爲メニ之ヲ請ヘ、重盛賴盛ト復之ヲ請フ、清盛已

ムヲ得スシテ之ヲ合ルス、遂ニ伊豆蛭島ニ流シ、伊藤祐親北條時政ヲシテ之ヲ監セシム

(九五) 忠度和歌ヲ俊成ニ托セシメ如何

謂ク平氏一門西奔スルニ當リ、薩摩守忠度途ヨリ還リ、其和歌ノ師藤原俊成ニ詣リ、夜門ヲ叩キ刺ヲ通シ面謁ヲ請フ、俊成徹シク門ヲ啓キテ之ヲ見ル、忠度曰ク、兵起リシヨリ君ノ門ヲ數々スルヲ得ヌ、今當ニ遠ク別ルヘシ、聞ク君勅ヲ奉シテ撰輯スル所アリト、臣幸ニ一章ヲ收メラル、一ヲ得ハ死ストモ朽セスト、其歌集ヲ鑑縫ヨリ出ス、俊成位テ之ヲ受ク、又左馬頭行盛ハ俊成ノ子定家ヲ師トス、亦其集ヲ遺シテ留別ス、俊成定家後チ並ニ其集ヲ撰ヒ、二人ノ作ル所ヲ收ムト云フ、

(九六) 大内裏ノ十七殿トハ何ソヤ

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 紫宸殿 | 仁壽殿 | 承香殿 | 常寧殿 |
| 貞觀殿 | 春興殿 | 宣陽殿 | 綾綺殿 |
| 溫明殿 | 麗景殿 | 宣耀殿 | 安福殿 |
| 校書殿 | 清涼殿 | 後涼殿 | 弘徽殿 |
| 登花殿 | | | |

(九七) 大内裏ノ十二門トハ何ソヤ

- | | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 陽明門 | 待賢門 | 郁芳門 | 美福門 |
| 朱雀門 | 皇嘉門 | 談天門 | 藻壁門 |
| 殷富門 | 安嘉門 | 偉鑿門 | 達智門 |

(九八) 大内裏ノ五舍トハ何ソヤ

- | | |
|-----|-----|
| 昭陽舍 | 梨壺 |
| 淑景舍 | 桐壺 |
| 飛香舍 | 藤壺 |
| 凝花舍 | 梅壺 |
| 襲芳舍 | 雷鳴壺 |

(九九) 三筆三跡トハ何ソヤ

- | | |
|---------|---------|
| 嵯峨天皇 | 小野道風 |
| 三筆 橘 逸勢 | 三跡 藤原佐理 |
| 僧 空海 | 藤原行成 |
- 三筆三跡ハ本邦中古時代ノ能書家ヲ稱セシナリ

(100) 二十一代集トハ何ンヤ

謂ク二十一代集トハ代々ノ天皇ノ勅命ヲ奉シテ其世ニ高名ナル歌人ノ撰ヒシ歌書ナリ、今其卷ノ名ト撰者ノ名ヲ舉クレハ左ノ如シ

古今集 貫之、躬恒、友則、忠峰、

後撰集 能宣、元輔、順、時文、望城、

拾遺集 公任卿

後拾遺集 通俊卿

金葉集 俊賴朝臣

詞華集 顯輔

千載集 俊成卿

新古今集 通具、有家、定家、家隆、雅經、

新勅撰集 定家卿

續後撰集 為家卿

續古今集 家良公、為家、行家、光俊、

續拾遺集 為氏卿

新後撰集 為世卿

玉葉集 為兼卿

續千載集 為世卿

續後拾遺集 為藤卿、為定卿、

風雅集 萩原法皇御自撰

新千載集 為定卿

新拾遺集 為明卿

新後拾遺集 為遠卿、為重卿、

新續古今集 雅世卿

第三編 近古史

(一) 鎌倉幕府創立ノ概略ヲ問フ

謂ク朝頼關東ヲ平定スト雖モ、未タ霸業ヲ開クニ至ラス、平氏族滅シ義仲亦亡フルニ及ビ、兵馬ノ大權漸ク頼朝ニ歸ス、頼朝初メ平氏ヲ富士河ニ敗リ、相摸ノ鎌倉ヲ相シテ根據ノ地ト爲ス、茲ニ於テ府ヲ開キ職ヲ設ケテ東國ニ號令ス、之ヲ鎌倉幕府ト云フ、後府中

ニ公文所ヲ置キ大江廣元ヲ以テ別當トナシテ政令ヲ出サシメ、問注所ヲ置キ三善康信ヲ以テ執事トナシテ訟獄ヲ決セシム、世人賴朝ヲ稱シテ鎌倉殿ト云フ、此時朝賴ノ弟義經平氏ヲ討テ功アリ、朝賴之ヲ忌ミ、兵ヲ遣ハシテ襲ヒ殺サントス、義經遁レ竄ル、賴朝乃チ大江廣元ノ策ヲ用ヒ、義經追捕センコトヲ名トシ、奏シテ諸國ニ守護ヲ莊園ニ地頭ヲ置キ、皆家人ヲ以テ之ニ任シ、自ラ請フテ總追捕使トナル、義經陸奥ニ逃ル、ニ及ビ藤原泰衡ヲ誘ヒテ之ヲ殺サシメ、尋テ自將トシテ泰衡ヲ討テ之ヲ滅セリ、是ニ依テ奥羽ヲ平ケ天下又抗スルモノナシ、建久二年賴朝征夷大將軍ニ任セラレ、

(二) 鎌倉幕府ノ職制ヲ問フ

謂ク幕府ノ海内ヲ制スルヤ執權、政所、問注所、侍所等ノ職制アリ、執權ハ將軍ヲ補佐シ、内外ノ機務ヲ統フ、世ニ之ヲ後見職トモ云フ、政所ニハ別當以下數職ヲ置キ、天下ノ政令ヲ掌リ庶務ヲ行フ、問注所ハ訴訟ヲ判決スルコトヲ掌ル、侍所ハ軍事ヲ議シ非違ヲ檢察シ、警衛ヲ兼掌ス、當時北條時政ハ賴朝ノ妻ノ父ナルヲ以テ執權ニ任シ、大江廣元ハ政所別當ニ任シ、三善康信問注所執事ニ任シ、和田義盛梶原景時等侍所別當ニ任シ、皆幕府ニ於テ事ヲ執レリ

(三) 同ク地方ノ職制ヲ問フ

謂ク地方ノ職ハ諸國ニ守護地頭アリ、守護ハ武事ヲ司トリ、地頭租ハ稅ヲ司トル、鎮西奉行ハ九州ヲ治メ、奥羽奉行ハ奥羽ヲ治メ、蝦夷ニハ蝦夷代官アリ、内外相持シテ政治ヲ行フ

(四) 賴朝ノ義經ヲ殺セシ所以ヲ問フ

謂ク賴朝性猜忌ニシテ固ヨリ義經ノ功勳ヲ忌ム、西海ノ役義經其節教ニ違ヒ、又梶原景時ト逆櫓ノ諍ヨリ隙ヲ生シ、治後之ヲ賴朝ニ讒ス、法皇義經ヲ伊豫守トナスヤ、賴朝吏ヲ伊豫ニ遣ハシ其國務ヲ領セシム、義經之ヲ怨ム、時ニ源行家モ亦賴朝ト善カラス、來テ義經ニ歸ス、賴朝乃チ僧昌俊ヲ遣ハシ義經ヲ堀川ノ邸ニ襲ハシム、義經之ヲ殺シ次テ陸奥ニ走ル、賴朝其使ヲ殺スヲ口實トシ、遂ニ泰衡ニ命シテ之ヲ襲殺セシム、或ハ云フ義經死セス遁カレテ蝦夷ヨリ韃靼ニ入ルト、

(五) 賴朝奥羽ヲ征セシ概要如何

謂ク賴朝泰衡ノ義經ヲ庇護セシヲ口實トシ、之ヲ擊ント請フ、未タ許サレス、賴朝勅ヲ待タスシテ發シ、大軍ヲ以テ三道ヨリ進ミ、直ニ白川關ニ至リ、厚樫城ヲ拔ク、時ニ東海北陸ノ軍亦敵ヲ敗リ來會ス、凡ソ二十八萬進ンテ平泉ニ至ル、泰衡城ヲ燒テ逃レ遂ニ臣下ノ爲メニ殺サル、

(六) 賴朝ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク賴朝資性深沈ニシテ大度アリ、年三十四ニシテ兵ヲ起シ、平氏ヲ夷ケ天下兵馬ノ權ヲ握ルコト十五年、遂ニ霸府ノ基ヲ開ク、然レモ殘忍ニシテ猜忌甚シク、弟範賴義經ヲ殺シ、又叔父義廣、行家、從兄弟義仲光家及ヒ其女媚義高ヲモ斬リ、自ラ一門ノ枝葉ヲ斷盡シ骨肉ヲ殺キタリ而シテ其統又程ナク亡ヒタリ、

(七) 源氏ノ東國ニ起リシ所以如何

謂ク源氏ハ威信ヲ關東ニ布キ、數世國守ヲ歷任セリ、賴信ハ陸奥甲斐美濃等ノ守、上野常陸ノ介ヲ經テ鎮守府將軍トナリ、賴義ハ相摸、武藏、信濃、下野、出羽等ノ國守ニ歷任シ、其子弟亦東國ニ守介タルモノ多シ、故ニ賴朝此地ニ藉リテ兵ヲ起セシナリ

(八) 平氏ノ西國ニ走リシ所以如何

謂ク平氏ノ西國ニ走リシハ西國ニ平氏數代恩顧ノ武士多キヲ以テナリ、其先正盛ハ伊勢ニ居リテ伊勢、因幡、讚岐等ノ國守トナリ、忠盛又播磨伊勢備後等ノ國守トナリ、清盛又肥後、安藝、播磨等ノ守ヲ經テ太宰太貳トナリ、其子弟亦淡路、美作、但馬、丹波等ノ守トナル者アリ、故ニ平氏ノ武士ハ多ク西國ニアリ、是レ西國ニ據リテ再舉ヲ謀ル所アラントセシナリ

(九) 曾我兄弟工藤祐經ヲ殺セシ原因如何

謂ク河津祐泰往時工藤祐經ト論争シテ殺サル、祐泰ノ遺子祐成、時致曾我祐信ニ養育セラル、建久四年賴朝大ニ富士野ニ獵シ、關東ノ將士畢ク來リ會ス、兄弟此時ニ乘シテ父ノ警ヲ復セント、夜祐經ノ營ニ入り、之ヲ殺ス、此夜暗黒ニシテ雷雨甚シ、士卒出テ闘ヒ死スル者多シ、祐經遂ニ死シ時致轉シテ賴朝ノ幕ヲ犯シ殺サル、其幕ヲ犯ス者ハ賴朝ハ祖父祐親ノ警ナルヲ以ナリ

(一〇) 總追捕使トハ如何

謂ク建久元年十一月賴朝入朝シ、天下ノ總追捕使タランコトヲ請フ、朝廷之ヲ許ス、始メ朝廷追捕使ヲ諸國ニ遣シテ、姦盜ヲ糾察ス、賴朝又曾テ家臣ヲ以テ追捕使トナシ、近畿諸國ヲ按檢セシメシコトアリ、是ニ至リ自ラ請フテ天下總追捕使トナリ、翌年征夷大將軍ニ任ス

(一一) 議奏官ヲ設ケシ理由如何

謂ク賴朝奏請シテ朝廷ニ議奏官十人ヲ置キ、已レニ親善ナル公卿ヲ以テ之ニ充ツ、故ニ關東ノ奏請スル所、總テ此輩ヲシテ議決セシメ、且ツ朝廷ノ大事ハ必ラス此輩ヲ經テ關東ト商議シ、而シテ後之ヲ施行スルコトス、故ニ朝廷ハ全ク關東ノ控制ヲ受ケ、天下ノ

實權ハ悉ク武門ニ歸ス

(二三) 頼朝、範頼ヲ殺セシ理由如何

謂ク曾我兄弟ノ讐ヲ報スルヤ鎌倉訛傳シテ頼朝又害ニ遭フト、政子大ニ驚キ泣ク、時ニ
範頼留守タルヲ以テ、之ヲ慰安シテ曰ク、範頼アリ以テ憂ト爲ス勿レト、後チ頼朝之ヲ
聞ヒテ範頼ヲ惡クミ、伊豆ノ修禪寺ニ逐フ、梶原景時、頼朝ニ勸メ兵ヲ遣シテ之ヲ攻ム、
範頼火ヲ縱テ自殺ス

(二四) 北條時政頼家ヲ殺スノ原因如何

頼家父ノ職ヲ嗣キ、母政子政事ヲ與リ聞ク、外祖北條時政執權タリ、頼家淫縱度ナシ、
政子之ヲ戒ムルモ尙ホ悛メス、時政之ヲ知ルモ敢テ問ハス、既ニシテ頼家病劇シ、政子
其起ツヘカラサルヲ度リ、時政ト議シテ天下ヲ二分セントス、比企能員之ヲ不可トシ、
頼家ト議シテ之カ計ヲ爲ス、政子其謀ヲ聞キ時政ニ告ク、時政遂ニ頼家ヲ伊豆ノ修禪寺
ニ幽シ後人ヲシテ之ヲ殺サシム

(二五) 義時父時政ヲ幽スルハ如何

謂ク時政夫妻、大將軍實朝ヲ弑シテ、女婿平賀朝雅ヲ立テント謀ル、事覺ル、子義時時政
夫妻ヲ其邑北條ニ放チ、朝雅ヲ攻メテ之ヲ殺ス、義時代テ政ヲ執ル威權愈々熾ナリ

(二六) 和田義盛亂ヲ起スノ原因如何

謂ク建保元年信濃ノ人泉親衡、頼家ノ子千壽丸ヲ奉シ、兵ヲ舉ゲテ北條氏ヲ滅ント謀ル、
和田義盛ノ二子義直、姪胤長等之レニ應ズ、既ニシテ事覺ハレ、義時兵ヲ遣シテ親衡ヲ
捕ヘントス、親衡勇力アリ數十人ヲ殺シテ逃ル、千壽丸京師ニ走リ、義直等虜ニ就ク、
是時義盛上總ニ在リ、馳セ歸リテ實朝ニ竭シ、己カ功勞ヲ叙シテ二子ヲ贖ハント請フ、
實朝素ト義盛ヲ親任ス、故ニ特ニ之ヲ聽ス、義盛又一族ヲ率ヒテ胤長ヲ赦シコトヲ請フ、
義時常ニ和田ノ強族ヲ忌ミ、激シテ之ヲ除カント欲シ、胤長ヲ陸奥ニ流シ其第ヲ奪フ、
義盛大ニ怒リ、兵ヲ起シテ義時ヲ攻メ、急ニ幕府ニ赴キ、實朝ヲ取ラントス、時ニ義時
大江廣元ト實朝ヲ擁シテ難ヲ法華堂ニ避ク、義盛奮戰シ、其七子ト共ニ死ス、

(二七) 公曉實朝ヲ殺スノ顛末如何

謂ク承久元年、實朝拜賀ノ禮ヲ鶴岡ノ祠ニ行フ、時ニ頼家ノ子公曉祠ノ別當タリ、常ニ
父ノ害ニ遭フヲ憤ホリ、實朝ヲ父仇ナリト思ヒ、竊カニ復仇ヲ謀ル、此日遂ニ實朝ヲ祠
前ニ斬ツ、備中ニ走ル、後政子ノ命ナリト稱シテ之ヲ殺ス、源氏ノ正統是ニ至リテ絶ツ、
(二七) 北條九代トハ何ソヤ

謂ク第一代時政、第二代義時、第三代泰時、第四代經時、第五代時頼、第六代長時、第

七代時宗、第八代貞時、第九代高時はナリ此間凡百二十餘年、天下ノ政權ヲ執ル、第九代高時執權ノ時ニ至リ暴虐奢侈會テ民治ニ心ヲ委テス、諸國勤王ノ師起ルニ及ンテ新田義貞ノ討伐スル所トナリ、北條氏遂ニ亡ブ

(二八) 承久ノ亂ノ原因如何

謂ク後鳥羽上皇常ニ北條氏ノ無禮ヲ憤リ、鎌倉ヲ圖ルノ志アリ、實朝害ニ遇フニ及ヒ、謂ヘラク機ニ乘シ王權復スヘシト、而シテ義時却テ權ヲ弄シ鎌倉ノ機勢依然タリ、上皇益々之ヲ惡ム、是ヨリ先キ上皇熊野ニ幸スルノ時幕府ノ士仁科盛遠兒ヲ携ヘテ路傍ニ伏謁ス、上皇其兒ヲ愛シ擢テ、西面ト爲ス、盛遠感喜シ竟ニ京師ニ留ル、義時幕士ヲ以テ恣マ、ニ奉侍スルヲ怒リ、盛遠カ邑ヲ獲フ、上皇勅シテ之ヲ復サシメントスルモ義時命ヲ奉セス、又上皇ノ寵姫龜菊、長江倉橋ノ二莊ヲ領ス、地頭之ツ侮慢ス、上皇命シテ其職ヲ停メシム、又從ハス、是ニ於テ上皇遂ニ意ヲ決シテ院宣ヲ下シ兵ヲ聚メテ義時ヲ討ツ

(二九) 同其結局如何

謂ク後鳥羽上皇ノ兵ヲ聚ムルヤ、北條義時政子ト謀リ諸將ヲ會シテ戰守ヲ議ス、三浦義村安達景盛等足柄、國根ニ據リテ官軍ヲ待ント請フ、大江賢元京師ヲ犯サンコトヲ建策ス、

義時廣元ノ策ヲ用ヘ遂ニ叛ス、總兵十九萬人、東海東山北陸ノ三道ヨリ並ヒ進ム、官兵一萬七千餘美濃尾張越中ノ間ニ防ク皆利アラズ、泰時遂ニ京師ニ入り六波羅ニ居ル、乃チ義時ノ官爵ヲ復シ罪ヲ藤原忠信、光親、信能等六人ニ歸シ、悉ク之ヲ鎌倉ニ押送ス、義時之ヲ斬及流ニ處シ、遂ニ天皇ニ逼リテ位ヲ遜ラシメ、三上皇ヲ隱岐、佐渡、土佐ノ三處ニ遷シ、二皇子ヲ但馬、備前ニ流シ、高倉天皇ノ孫茂仁親王立ツ、後堀河天皇是ナリ

(三〇) 僧高辨泰時ヲ戒メシコト如何

謂ク泰時一日京師ノ梅尾ノ僧高辨ノ名ヲ聞キ、往テ之ヲ訪フ、高辨、泰時ニ語テ曰ク、我國ハ皇祚ヲ無窮ヲ傳ヘテ實ニ至貴至嚴ナリ、天下孰レカ之ニ反スル者アラシヤ、今君等官軍ニ抗シ、天皇ニ逼テ位ヲ遜ラシメ、上皇ヲ遷シ公卿ヲ殺戮ス、上下爲ニ痛歎セザル者ナシ、古人云フ、人衆ケレハ天ニ勝チ、天、定レハ亦人ニ勝ツト、君將タ何ヲ以テ大逆ノ罪ヲ償ントスルヤト、泰時悚然トシテ大ニ悔悟スル所アリ

(三一) 北條泰時ノ治績如何

謂ク元仁元年義時卒ス、政子泰時ヲシテ執權職ヲ襲ガシム、嘉祿元年泰時評定、引付ノ兩職ヲ設ケ以テ政務ヲ處辨ス、貞永元年式目五十條ヲ定メ、以テ聽斷ニ資ス、是レ泰時認獄ヲ斷スルハ公理ニ依テ毫モ私セサルノ意ニ出ルナリ、是ヨリ先キ天下凶荒農民大ニ

困弊ス、泰時乃チ債券ヲ燒棄シテ之ヲ免シ、又酒食ヲ給シテ人毎ニ米一斗ヲ與フ、故ニ農民皆ナ其恩ニ感泣ス

(三) 北條時頼ノ行爲如何

謂ク時頼意ヲ政事ニ用ヒ、最モ人材ヲ得ルヲ重ンス、故ニ青砥藤綱ヲ擢用シテ訴訟ヲ掌ラシム、又頼朝ノ舊制及ヒ泰時ノ式目ヲ遵守ス、故ヲ以テ士民悅服シ、内外治ト稱ス、時頼解職ノ後微服シテ各地ヲ周覽シ、民ノ疾苦ヲ訪ヒ、冤枉ヲ察ス、是ニ由テ郡國ノ守宰自ラ奮勵シ、風化大ニ行ハル

(三三) 青砥藤綱ノ行爲如何

謂ク藤綱ハ上總ノ人ナリ、資性廉潔剛直ニシテ權貴ヲ憚カラス、好シテ貧困ノ民ヲ賑恤シ、自ラ奉スルコト甚タ薄シ、嘗テ夜滑川ヲ過ク、誤テ十錢ヲ水中ニ遺ツ、乃チ直五十錢ノ炬ヲ買ヒ、水ヲ照シテ之ヲ索ム、或其得失相償ハサルヲ笑フ、藤綱云ク、五十錢ハ吾ニ出テ人ニ入ル、今十錢ヲ収メテ世ニ存ス、是レ六十錢ナリ、遂ニ一ヲ失ハス亦洪益ナラスヤト其用意ノ周到ナルコト此ノ如シ

(三四) 岡崎正宗ハ如何ナル人ソ

謂ク正宗ハ後醍醐天皇御宇ノ人ニシテ劔工行光ノ子ナリ、三河國岡崎ニ住ス、壯年ヨリ

諸國ノ名工ヲ歷問シ、發明スル所少ナカラス、遂ニ劔工ノ妙處ヲ極ム、其子眞光亦名聲アリ、當時戰亂ノ世ナルヲ以テ大ニ稱セラル

(三五) 北條氏時代ノ宗教如何

謂ク北條氏ノ時代ニハ佛教最モ盛ニシテ名僧多ク輩出シ、新立ノ宗派即チ禪宗、淨土宗、日蓮宗、一向宗、時宗等續々開立ス、而シテ淨土、一向、日蓮、時宗ハ大ニ民間ニ行ハレ、禪宗ハ高貴ノ間ニ行ハレタリ

(三六) 兩統迭立ノ議ヲ定ムルハ如何

謂ク後嵯峨上皇後深草、龜山ノ二帝ヲ生ミ、而シテ龜山帝ノ才アルヲ愛シ、後深草帝ヲシテ位ヲ讓ラシメ、其子孫ヲシテ世々皇統ヲ承ケシメントス、龜山帝ノ子後宇多帝立ツニ及ヒテ、後深草上皇之ヲ愠リ、北條時宗ニ諭シテ其子伏見帝ヲ立ツ、時ニ時宗死シ子貞時嗣ク、伏見帝密カニ貞時ニ告ケテ曰ク、龜山上皇常ニ承久ノ事ヲ憤ル、其後ヲ立ツルハ鎌倉ノ利ニアラスト、貞時乃チ伏見帝ノ子後伏見帝ヲ立ツ、因テ後宇多上皇使ヲ鎌倉ニ遣リ、其先帝ノ遺詔ニ違フヲ以テ貞時ヲ讓ム、貞時奏シテ後深草、龜山ノ兩統十年毎ニ迭ニ立ツノ議ヲ定メ、上皇ノ子後二條帝ヲ立ツ後二條帝位ヲ花園帝ニ傳ヘ、花園帝又後醍醐帝ニ傳フ、其順左ノ如シ

持明院派ト云フ
 (一)後嵯峨 (二)後深草 (三)龜山 (四)後宇多 (五)伏見 (六)後伏見 (七)後二條 (八)花園 (九)後醍醐
 大覺寺派ト云フ
 已上後醍醐帝マテハ兩統迭立ノ議行ハレタリ、後醍醐帝ノ御宇ニ當テ南北分立ノ結果ヲ生ス

(三七) 南北朝分立ノ順序ヲ問フ

謂ク後醍醐帝幼ニシテ聰明ナリ祖父龜山上皇之ヲ鍾愛ス、花園帝即位シ、後二條帝ノ子邦良マサニ立ツヘキニ、父後宇多上皇思フ所アリトテ先ツ帝ヲ立テ、邦良ヲ其太子トス、既ニシテ邦良薨ス、帝皇子護良ヲ立ラントス、高時迭立ノ議ヲ執リテ後伏見帝ノ皇子量仁ヲ太子トス、即チ北朝ノ光嚴帝ナリ、護良僧トナリテ北條氏ヲ圖ル、時ニ高時失政人心漸乖ク、帝之ニ乘シテ王威ヲ復セントス、事露ル、高時遂ニ帝ヲ隱岐ニ遷シ、光嚴帝ヲ立ツ、楠正成、新田義貞等義兵ヲ擧テ高時ヲ殺ス、北條氏亡フ、後醍醐帝京師ニ還リ、中興ノ業成ル、時ニ足利尊氏反ス、然レモ賊名ヲ負フヲ忌ミ、光嚴上皇ノ院宣錦旗ヲ請ヒ、光明帝ヲ立ツ、後醍醐帝吉野ニ幸シ、行在所トス、是ニ於テ同時ニ帝アリ吉野ヲ南朝ト云フ正統ナリ、京都ヲ北帝ト云フ閏位ナリ、此後兩朝並立シ、南朝ハ三代北朝ハ四

代ヲ歷テ相分カル、一五十七年、後小松帝ニ至テ兩朝統一ス

南朝

(一)後醍醐 (二)後村上 (三)長慶 (四)後龜山

後小松 兩朝統一

北朝

(一)光嚴 (二)光明 (三)崇光 (四)後光嚴 (五)後圓融

(三六) 蒙古來寇ノ始末ヲ畧示セヨ

謂ク後宇多天皇ノ弘安四年元兵大擧シテ、我西邊ヲ襲フ、時ニ北條時宗執權タリ、兵ヲ遣ハシテ之ヲ拒カシム、適々大風暴ニ起リ、敵艦悉ク覆没シ、大ニ敗レテ逃ケ去ル、是ヨリ先キ元ノ世祖忽必烈宋ヲ滅シ四隣ヲ併呑シ、餘威ヲ以テ日本ヲ征服セント欲シ、高麗ヲシテ書ヲ我ニ致サシム曰ク服セスンハ則チ尋クニ兵ヲ以テセント、朝廷鎌倉ニ下シテ之ヲ議セシム、時宗剛武ニシテ膽略アリ、以爲ラク書辭無禮ナリト、因テ之ヲ却ク、其後屢々使ヲ遣ハセトモ時宗之ヲ拒絶シ、其使者ヲ斬ル、元主大ニ怒リ是年范文虎ニ命シテ戰艦數十艘ヲ率ヒテ來リ寇セシム、直ニ壹岐島ヲ攻メ、太宰府ニ至リ、能古志賀ノ二島ニ陣ス、關東及西國ノ兵悉ク太宰府ニ會シ、堤防ヲ築キテ之ニ備フ、賊巨艦ヲ連テ弩ヲ發ス、我兵死スル者甚タ多シ、河野道有其族ト獨リ進ミ、賊ノ一將ヲ擒ニシテ歸ル、已ニシテ賊勢稍ヤ沮ミ轉シテ鷹島ニ至ル、會マ西風大ニ起リ、賊艦破碎ス、溺死スルモ

ノ算ナシ、我兵之ニ乗シ、殺獲甚ダ多シ、虜兵十萬生テ還ルモノ僅カニ三人、是ヨリ元兵又我邊境ヲ窺ハス

(二九) 北條貞時ノ治績ハ如何

謂ク貞時ハ祖父時頼ノ風ヲ慕ヒ、意ヲ政治ニ留ム、在職二十八年、後チ解職スルニ及ンデ、屢々緇衣ヲ着シ郡國ヲ巡察シ、民ノ冤枉ヲ問ヒ、摘發スル所多シ、故ニ吏員欺クヲ得サルナリ

(三〇) 楠正成ノ人ト爲リ如何

謂ク後醍醐天皇笠置山ニ駐リ、諸國勤王ノ兵ヲ募リ玉フヤ、密ニ藤原藤房ト謀リ、楠正成ヲ召ス、正成ハ河内ノ人、左大臣橘諸兄ノ末、世金剛山下ニ任ス、人ト爲リ英邁忠烈兵ヲ用フルヲ神ノ如シ、遠近傳ヘ稱ス、正成直ニ召ニ應シテ行宮ニ至ル、天皇藤房ヲシテ問フニ討賊興復ノ事ヲ以テス、正成奏シテ城ヲ赤阪ニ築ク、城僅ニ二町方ニシテ三面平地民粟ヲ集メテ糧トス、守者五百人ニ過キス、東軍三十萬來攻ムレモ勝タス、此後正成其弟子族人ト共ニ南朝ノ爲メニ力ヲ盡クシテ、各地ニ血戦スルヲ數十回、尋テ攝津湊川ニ至リ賊ト血戦シテ之ニ死ス

(三一) 新田義貞北條氏ヲ滅ス概畧如何

謂ク元弘三年新田義貞陽ニ高時ニ與ミシ、賊中ニ在リテ正成ヲ攻ム、然レモ素ヨリ其本心ニアラス、護良親王ノ令旨ヲ奉スルニ及ンテ直ニ官軍ニ歸シ義兵ヲ擧ク、高時大ニ怒リ之ヲ撃ツ、義貞屢々北條氏ノ兵ヲ敗リ、進ンテ鎌倉ニ迫ル、義貞稻村崎ヨリ海潮ヲ涉リ、府中ニ入り風ニ乗シ火ヲ放チ、鼓噪シテ進ム、死傷算ナシ、高時兵ヲ率ヒテ東勝寺ニ據ル、義貞之ヲ圍ム、高時終ニ自殺シ從士六千餘人皆自刃シ、北條氏亡フ、天皇乃チ京師ニ入ル

(三二) 後醍醐帝中興ノ大業如何

謂ク後醍醐帝北條氏ヲ滅シ、軍士ノ功ヲ賞セシム、時ニ有功ノ將士闕下ニ集ル者數萬人、而シテ天下ノ郡邑多ク諸妃皇子及ヒ朝臣歌童舞妓ニ散賜シテ將士ニ頒タス、將士多ク飲望シ各相率テ郷里ニ歸ル、赤松則村ノ如キ功ヲ以テ播磨ノ守護トナリ、未タ幾ナラズシテ其封ヲ褫ハレ僅カニ一莊ヲ有ツノミ、人其論旨ノ反覆ヲ譏ル、建武元年大ニ宮殿ヲ修シ、又諸國ノ租ヲ徵ス、然レモ天下爭亂ノ後ナルヲ以テ租入足ラス、又鎌倉亡ヒシヨリ諸國ノ家人零落シテ殆ト飢餓ニ迫ル、茲ニ於テ人心離反シ天下復々武門ノ治ヲ思フ、是レ中興ノ大業成ラザリシ所以ナリ

(三三) 兒島高德ノ事ヲ問フ

元弘三年
の事

謂ク高德ハ備前ノ守護兒島範長ノ子ニシテ勤王忠烈ノ士ナリ、元弘二年高時後醍醐帝ヲ
 隱岐ニ遷ス、是ヨリ先キ帝ノ六波羅ニ入ルキ高德駕ヲ道ニ奪ハント欲シテ成ラス、初メ
 高德帝ノ笠置ニ在ルヲ聞キ、赴キ援ケント欲ス、會々行在所及赤坂ノ陷リシヲ以テ止ム、
 後帝ノ隱岐ニ遷ルト聞キ、駕ヲ奪ハント欲シ、衆ヲ勵マシテ曰ク、身ヲ殺シ仁ヲ成スハ
 今日ニ在リ、衆奮然トシテ之ニ從フ、乃チ山谷ニ潜伏シテ之ヲ候フ、謀齟齬シ衆皆ナ散
 去ス、獨リ高德恨去ルニ忍ヒス、一夜行在ニ入り櫻樹ヲ削リ、天莫空勾踐、時非無范蠡
 ノ十字ヲ書シ、以テ已レノ誠忠ヲ表ス、賊將護兵皆讀ム能ハス、帝獨リ心ニ之ヲ知リ勤
 王者ノアルヲ欣ヒ玉フ、既ニシテ車駕隱岐ニ至リ國分寺ニ御ス

(三三) 始メテ紙幣ヲ行フノ時代如何

謂ク後醍醐帝建武二年大ニ皇居ヲ造營セラル、然レモ亂後ナルヲ以テ經費足ラス、遂ニ
 紙幣ヲ造リテ發行シ又々乾坤通寶錢ヲ鑄造シ並ヒ行ハル

(三四) 足利尊氏謀反ノ概畧ヲ問フ

謂ク尊氏潛ニ異圖ヲ懷キ隱ニ士志ヲ收ム、護良親王慧明之ヲ看破シ、其行爲ヲ惡ミ密ニ
 之ヲ誅セントス、尊氏其檄文ヲ得テ變ヲ後醍醐帝ニ上リ、經ルニ謀反ヲ以テス、帝大ニ
 怒リ、終ニ親王ヲ鎌倉ニ流シ、足利直義ニ監セシム、北條時行亂ヲ起スニ及ンテ尊氏自

ラ請テ東征シ、且ツ征夷大將軍東國管領タランヲ請フ、聽サレズ、尊氏茲ニ本心ヲ顯
 ハシ、辭セスシテ發ス、武人附從スル者甚タ多シ、乃チ直義ト兵ヲ合セテ時行ヲ撃チ之
 ヲ走ラセ、遂ニ鎌倉ニ據リテ反ス

(三五) 尊氏京師ヲ犯セシ概况如何

謂ク延元元年正月尊氏京師ヲ犯カス、新田義貞等宇治瀬多ノ間ニ防ク利アラズ、帝叡
 山ニ幸ス、尊氏等宮闕ヲ焚ク、時ニ源顯家義良親王ヲ奉シ、兵六萬ヲ率テ陸奥ヨリ
 至ル、官軍勢ヲ合テ大ニ賊ヲ敗リ、進ンテ兵庫ニ至ル、尊氏狼狽海ニ航シテ九州ニ走
 ル

(三六) 湊川ノ役ヲ問フ

謂ク尊氏鎮西ノ兵ヲ率ヒ水陸大舉シテ東上ス、義貞之ヲ兵庫ニ拒キ、書ヲ飛ハシテ急ヲ
 朝廷ニ告ク、帝乃チ正成ニ詔シテ往テ義貞ヲ援ケシム、正成奏シテ曰ク、賊鋒頗ル銳シ、
 陛下姑ク叡山ニ幸シ、尊氏ヲシテ京師ニ入ラシメ、臣義貞ト之ヲ挾撃セント、
 尊氏ヲ不可トス、正成復タ抗議スヘカラサルヲ知リ、拜辭シテ西ス、而シテ櫻井驛ニ至
 リ正行ヲシテ河内ニ歸ラシム、其訣別ニ臨ンテ正成誠メテ曰ク、吾汝ヲ見ルハ唯々今日
 アルノミ、明日復タ見ント欲スルモ能ハサルナリ、吾今戰死セハ、天下悉ク尊氏ニ歸スル

ハ言ヲ俟タス、汝慎ンテ禍福ヲ計較シ、死ヲ惜ミ生ヲ貪リ、以テ父志ヲ廢スル勿レ、一族必ス國ノ爲メニ殉シ、然ル後己マン、汝ガ父ニ報フル所ノモノハ、是ヨリ大ナルハナシト因テ授クルニ帝ノ曾テ賜フ所ノ寶刀ヲ以テス、正行涙ヲ揮テ去ル、既ニシテ正成湊川ニ陣ス、賊ノ陸兵二十萬餘正成手兵七百騎ヲ以テ之ニ當リ、向背敵ヲ受ク、是ニ於テ弟正季ハ共ニ進テ直義ノ兵ト戦ヒ、縱横奮戰殆ト直義ヲ獲ントス、適々尊氏ノ兵來リテ直義ヲ援ヒ、官軍ノ後ヲ包ム、正成轉シテ之ニ當リ、血戰數十合悉ク其騎ヲ失フ、正成乃チ湊川ノ民家ニ入り遂ニ正季ト耦刺シテ死ス、年四十三、帝其死ヲ追悼シ正三位左近衛中將ヲ贈ル

(三六) 新田義貞戰死ノ狀ヲ問フ

謂ク義貞皇太子成良、尊良ノ兩親王ヲ奉シ、越前金崎城ニ入ル、賊將足利高經等大兵ヲ以テ來リ攻ム、里見時成義貞ヲ援ケ、戦利アラヌシテ死ス、時ニ兵寡ク糧盡ク、義貞竊ニ杣山ニ趣キ兵糧ヲ募集ス、未タ還リ來ラサルニ城既ニ陥リ、尊良親王義顯ト自刃シ、皇太子賊手ニ落ツ、是ニ至テ義貞轉シテ杣山ヲ保チ、足利高經ト相持ス、既ニシテ義貞越前城ヲ抜ク、高經敗レテ足羽城ニ走ル、而シテ義貞處々ニ轉戦シ、終ニ高經ヲ藤島ニ攻ム、賊鋒頗ル銳ク抜ク能ハス、中野宗昌義貞ニ單身遁逃セシメテ勸ム、義貞曰ク、士

ヲ失フテ、獨リ免ル、ハ、吾志ニ非ルナリト、馬ニ鞭チテ將ニ進マントス、箭其額ニ中リ乃チ自刎シテ死ス、年三十八

(三九) 四條畷ノ戰ヲ問フ

謂ク正平三年足利尊氏高師直同師泰ヲシテ兵八萬ヲ率ヒテ來リ寇ス、楠正行弟正時及ヒ一族ヲ率ヒ、行宮ニ入朝シ、拜辭シテ去リ、遂ニ臣族百四十三人ト後醍醐帝ノ廟ニ謁シ、告テ曰ク、一戦利ナクハ臣必死セント、進ンテ四條畷ニ陣シ三百騎ヲ以テ突進シ、師直ノ中軍ヲ衝ク、衆皆奮戰シ、一以テ百ニ當ラサルナシ、賊兵萎靡シ、死屍山ヲナシ、血戰晨ヨリ晡ニ至ル、正行等全身矢ヲ被リ、疲困進ムヲ能ハス、終ニ正時ト相刺シテ死ス、時ニ年二十二、子弟族人皆之ニ殉ス

(四〇) 正行辭世ノ歌如何

謂ク正行後醍醐帝ノ廟ニ謁セシ時、如意輪堂ノ壁上ニ一首ノ和歌ヲ題ス、歌ニ曰ク
かへらしどかねておもへば梓弓なき數に入る名をぞ留むる

(四一) 後醍醐帝ノ性徳ヲ問フ

謂ク後醍醐帝英邁博學ニシテ書史ニ通ス、即位ノ初メ北條氏ノ專横ヲ憤リ、其怠荒ニ乘シ治ヲ圖リシモ、建武中興ノ時ニ及ンテ心忽チ驕怠シ三年ナラスシテ延元ノ變アリ、爾

來曆應二年ニ至ルマテ竟ニ意ノ如クナラス、吉野ノ行宮ニ在リ、八月崩スルニ臨ンテ遺詔シテ曰ク、朕唯逆賊ノ平カザルヲ恨ム、太子位ニ即カハ宜ク賢ヲ任シ功ヲ舉ケ、力メテ恢復ヲ謀ルベシ、朕南山ニ座スト雖モ、靈常ニ北闕ヲ望ム、若シ命ヲ墜ス者アレハ、子ハ繼體ニ匪ス、臣ハ蓋忠ニ乖クト、言訖リテ左ニ法華經ヲ把リ、右ニ劍ヲ按シテ崩シ玉フ

(四二) 尊氏新帝ヲ立ツル始末如何

謂ク官軍湊川ニ敗ル、ヤ尊氏京師ニ入り、兵ヲ放テ行在ヲ犯ス、源顯忠名和長年等拒戦シテ死ス、是ヨリ先キ尊氏人ヲ京師ニ遣ハシ、竊ニ光嚴上皇ニ請テ院宣ト錦旗トヲ得タリ、是レ鎮西ニ多クノ將士ヲ得タル所以ナリ、故ヲ以テ上皇ノ皇弟豊仁親王ヲ立テ天皇トス、光明帝是ナリ

(四三) 菊地氏勤王ノ始末如何

謂ク菊地武光ツチナガ懷良親王ヲ奉ジ、少貳頼尙ト筑後川ニ戦フテ大ニ之ヲ破リ、軍氣稍々振フ、武光既ニ卒シ、孫武朝、親王ヲ奉シ大内弘義及ヒ今川貞世等ト戦フ、己ニシテ親王薨シ武朝亦卒ス、菊地氏世々王事ニ勤メ、南朝ニ至ルマテ數代其志ヲ變セズ、

(四四) 直義ノ南朝ニ降リシ始末如何

謂ク北朝足利尊氏ヲ拜シテ征夷大將軍ト爲シ、直義ヲ副將軍ト爲ス、時ニ高師直尊氏ノ執事タリ、師直軍功尤モ多キヲ以テ專横ヲ極メ、直義ト相軋轢ス、直義ノ執事上杉重能、畠山重宗モ又師直ト隙アリ、直義之ヲ除カント欲シ、兵ヲ伏セテ之ヲ召ス、師直己ニ其謀ヲ知り、兵ヲ率ヒテ幕府ヲ圍ミ、直義ヲ斥ケント請フ、尊氏之ヲ慰諭シ、重能重宗ヲ斬リ直義ノ政務ヲ息メ、義詮ヲ鎌倉ヨリ召シテ代テ政ヲ執ラシム、正平五年師直兄弟尊氏ヲ奉シテ足利直冬ヲ追討ス、直冬ハ尊氏ノ庶長子ニシテ直義ノ養子ナリ、時ニ直義屏居シテ自安セス、遂ニ南朝ニ降ル、乃チ勅シテ尊氏ヲ討タシム、直義尊氏ト御影濱ニ戦ヒ大ニ之ヲ敗ル、既ニシテ兄弟和ヲ講シ京師ニ還ル、師直兄弟窮蹙シテ降り、誅ニ伏ス、後直義尊氏ノ爲メニ藥殺セラル

(四五) 北畠親房神皇正統記ヲ撰ム旨趣ヲ問フ

謂ク親房常ニ中興ノ終ヘニ皇統ノ絶エントスルヲ歎キ、身戎馬ノ間ニアリテ神皇正統記ヲ撰述シ、之ヲ奉ル、此書皇祖建國ノ意ヲ推戴シ微ヲ明ニシ正ヲ扶ケ、南朝ノ正統ヲ明ニス、實ニ國家ノ寶典ナリ

(四六) 後村上帝尊氏ヲ親征シ玉フ始末ヲ問フ

謂ク尊氏直義ト隙アリ之ヲ伐ントスレモ官軍ノ其虛ニ乘センコトヲ畏レ、伴リテ降ヲ乞フ、

後村上帝權ニ之ヲ聽シ、窃ニ兒島高德ヲ東國ニ遣ハシ新田氏ノ諸族ヲシテ之ヲ伐タシメ、自ラ百官ヲ宰ヒテ男山ニ幸シ、北畠顯能、楠正儀等ヲシテ足利義詮ヲ撃チ走ラセ、崇光院及光嚴、光明ノ二上皇ヲ賀名生ニ徙ス、時ニ新田義宗、義興、義治等密旨ヲ奉シテ尊氏ヲ武藏ニ敗リ、基氏ヲ鎌倉ニ襲テ之ヲ走ラス、義詮再舉シテ東山ニ據リ戰フ、官軍利アラズ、帝親ヲ甲ヲ被リ馬ニ御シ圍ヲ衝テ進ム、賊前後來リ逼リ、矢御鎧ニ及フ、藤原隆資等三百餘人防戰シテ死ス、帝辛フシテ行宮ニ達ス

(四七) 足利氏ノ權ヲ鎌倉ニ分ケタル原因如何

謂ク尊氏治ヲ鎌倉ニ爲スノ意アレバ、南朝ノ常ニ京師ヲ窺フヲ以テ京師ヲ距ルヲ能ハス、故ニ室町ニ幕府ヲ創立ス、然レバ關東動モスレバ足利氏ニ背反スルノ恐アルヲ以テ次子基氏ヲ鎌倉ニ置キ、以テ關東ヲ管領セシム、

(四八) 關東管領トハ如何

謂ク尊氏基氏ヲ東國ニ置キ政務ヲ管セシム、基氏上杉憲顯ヲ執事トナシ、室町ニ倣フテ評定、引付、問注所ヲ置ク、正平二十二年基氏薨シテ子氏滿之ニ代ル、時ニ京師ニテハ將軍ヲ公方ト云ヒ、其居ヲ御所ト云ヒ、執事ヲ管領ト云ヘルニヨリ、鎌倉モ又公方、御所、管領ノ名ヲ用ユ、基氏氏滿二代將士ヲ撫治シテ關東ヲ鎮シ、東國事ナク將士之ヲ翼

欠

MISSING

諫ムレ正聽カス遂ニ憲實ヲ逐フ、是ニ於テ義教兵ヲ發シテ之ヲ攻ム、持氏敗レテ自殺ス、正平四年基氏管領タリシヨリ是ニ至ルマテ四代九十餘ニシテ滅亡ス、

(五三) 足利義教北畠滿雅ヲ殺ス所以ハ如何

謂ク稱光帝崩御ノ後足利義教又約ニ違ヒ、後花園帝ヲ立ツ、後龜山帝ノ皇子良恭親王統ヲ得サルヲ以テ、怒リテ伊勢ニ走ル、伊勢ノ國司北畠滿雅、足利氏ノ數々兩統迭立ノ約ニ背クヲ憤リ、乃チ親王ヲ奉シテ兵ヲ起ス、紀伊大和ノ南軍之ニ應ス、永享元年、義教仁木持長等ヲシテ滿雅ヲ攻メシム、滿雅拒キ戰ツテ之ヲ破ル、世保持頼、土岐興安持長ヲ援フ、滿雅邀擊シテ之ヲ走ラス、既ニシテ興安持頼返戰シ、滿雅遂ニ敗レ格闘シテ死ス、

(五四) 赤松滿祐將軍義教ヲ殺スヲ問フ

謂ク赤松滿祐嘗テ事ヲ以テ義教ヲ怨ミ之ヲ報ヒントス、乃チ兵士ヲ第宅中ニ伏セ、義教ヲ饗シ酒酣ナル片伏起リ義教ヲ弑ス、而シテ滿祐奔テ播磨ノ白旗城ニ據ル、義教ノ子義勝父ノ職ヲ襲キ、滿祐ヲ討テ之ヲ亡ボシ、父仇ヲ報ス

(五五) 楠光正義教ヲ狙撃セントセシト如何

謂ク楠次郎光正後龜山帝ノ皇子尊秀王ヲ奉シ、夜ル禁中ヲ襲ヒ、神璽ヲ奪ヒ、叡山ニ據ル、將軍義教ヲ狙撃ス謀成ラスシテ死ス、

近古史

吐何者ソレク紙(公家)ヲ截盜スルカ

(五) 結城氏朝兵ヲ起ス所以如何

謂ク足利義教既ニ鎌倉ヲ亡ボス、結城氏朝持氏ノ遺孤春王、安王ノ二子ヲ奉シテ兵ヲ下總ニ作ス、義教乃チ上杉憲實ヲシテ之ヲ伐タシム、遂ニ氏朝戰死シ、春王安王共ニ斬ラ

(五七) 足利氏ノ時始メテ朝鮮ト互市セシハ誰ソ

謂ク嘉吉三年幕府對馬守宗貞盛ヲシテ朝鮮ト互市ヲ約シ、吏ヲ釜山浦ニ置キ、毎歲五十船ヲ以テ定額トス、義滿ノ時高麗ノ李成柱自立シテ王ト稱シ、國號ヲ朝鮮ト改メ、使ヲ遣シテ來聘シ、隣好ヲ修ム、

(五六) 足利時代ノ文教如何

謂ク足利時代ニ至リテ文學ノ衰微極點ニ達セリ、當時文學ノ事ニ堪フルハ僅ニ五山(京ニアリ)ノ僧徒ノミ、故ニ外國通好往復書簡ヨリ日記々錄等ノ事ニ至ルマテ重ニ僧徒ヲ採用シ、公卿武臣ハ皆テ文事ニ心ヲ用フルヲナシ、且ツ度々ノ兵戰ニテ京地ノ史書大半散失セリ、後世私塾ノ寺子屋ト稱スル者、當時教育ハ僧徒ノ與リシ所ヨリ唱ヘシ事ナリ

(五九) 足利氏ノ國體ヲ辱カシメシ例如何

謂ク應永八年足利義滿僧祖阿ヲ明ニ遣ハシテ好ヲ通シ、金千兩馬十四匹及兵器扇紙等ノ物

ヲ贈ル、參議菅原秀長ヲシテ書ヲ作ラシムハ書辭甚タ恭謙ス、時ニ彼國ハ太宗建文ノ世ニシテ、年號ヲ永樂ト云フ、明年明主僧道彝一如ヲシテ報聘セシメ、義滿ヲ封シテ日本國王ト云フ、義滿喜テ之ヲ受ク、薨スルニ及テ明主諡シテ恭獻王ト云フ、義滿豪奢ヲ好ミ居所華麗ヲ極ム、故ニ財用乏シク經費足ラス、明王時ニ永樂錢ヲ鑄ル、因テ之ヲ願贈ス、義滿又喜テ之ヲ受ク、

又義政ノ時ニ至リ同ク明國ニ使ヲ遣ハシテ錢ヲ乞フヲ寬正五年、文明七年、同十五年、凡三度ナリ、就中文明十五年四月書ヲ明ニ贈テ日本國王臣義政ト云ヒ、錢十萬貫ヲ賜フコトヲ得ハ、我國人用足ルト哀求スルニ至レリ

(六〇) 應仁ノ亂トハ何ソ

謂ク後土御門天皇應仁元年京師大ニ亂ル、是ヨリ先キ義政頗ル政務ニ倦ミ、職ヲ辭セント欲ス、然レモ未ダ職ヲ襲ガシムルノ子アラス、時弟義尋僧トナリテ淨土寺ニ在リ、義政之ヲ立テ嗣ト爲ント欲ス、義尋其淪ハルコアルヲ恐レ、固ク辭シテ受ケス、義政乃チ誓フテ曰ク、吾若シ他日男子ヲ擧ケハ必ス僧ト爲シ、子ヲ廢セサルナリト、義尋依テ蓄髮シテ名ヲ義視ト改メ、今出川ノ第二移ル、細川勝元之ヲ輔ク、後義政義尙ヲ生ム、其母僧ト爲スニ忍ビス、然レモ義視業ニ己ニ嗣ト爲リ、其誓ヲ淪ヘ難ク、又勝元之ヲ輔タルヲ

以テ容易ニ滅スヘカラス、因テ強援ヲ得テ義視ヲ廢セントス、遂ニ山名持豐ニ托ス、持豐大ニ喜ヒ擁立シテ勝元ノ權ヲ奪フノ計ヲ爲ス、是ヨリ先キ畠山持國子ナシ、其姪政長ヲ養フテ嗣トス、持國義就ヲ生ム、因テ政長ヲ廢セントス、政長出テ勝元ニ依ル、勝元之ヲ援ク、持豐モ亦之ニ黨ス、持國乃チ勝元ニ謝シ、義就ヲ逐フ、義就河内ニ走リ嶽山ニ據ル、政長之ヲ攻ム、義就敗走シテ高野山ニ入ル、嶽山ノ戰ニ義就奮闘ス、持豐其勇ヲ聞キ營救シテ以テ已ガ援ト爲サント欲シ、義政ニ請フ、義政乃チ義就ヲ赦シテ京師ニ還ラシム、應仁元年正月持豐義就ヲ政長ノ第二納レントス、政長兵備ヲ爲ス、勝元之ヲ助ク持豐亦戒嚴ス、義政命シテ義政長就手兵ヲ以テ雌雄ヲ決スヘシ、諸將相助クル勿レト、然レモ持豐潛ニ義就ヲ援ケ擊テ政長ヲ走ラス、世人勝元ヲ嗤フテ怯トス、勝元慙憤其黨與ノ諸國ニ在ルモノニ檄シテ十六萬ノ兵ヲ招ク、持豐モ亦十一萬ノ兵ヲ集メ、勝元ハ東ニ陣シ、持豐ハ西ニ陣ス、義滿以來京師稍々少康ヲ得タルニ、是ニ至テ兩軍戰鬪已ム時ナク東軍毎ニ利ヲ失フ、勝元將軍義政ヲ擁シ、又天皇及ヒ上皇ヲ其軍ニ迎フ、是ヨリ東軍毎ニ勝利アリ、西軍モ亦義視ヲ奉シテ將軍兄弟ノ相争フカ如クス、文明五年持豐勝元相尋テ卒ス、九年義視美濃ニ走リ西軍ノ諸將散歸ス、此役ヤ應仁以來前後十一年間、京師戰爭ノ區ト爲リ、歷朝ノ典籍及ヒ文武百官ノ邸宅、兵燹ニ罹リ、公卿率テ四方ニ散

ス

(六) 強臣吞噬ノ有様如何

謂ク義政爭亂ノ餘ニ在リテ毫モ民人疾苦ヲ顧ミヌ、東山ニ銀閣ヲ構ヘテ以テ義滿ノ金閣ニ擬ス、是ヨリ諸將驕横自恣互ニ攻略ヲ事トシ、復タ足利氏ノ命令ヲ奉ゼス、漸ク割據ノ勢アリ、延徳元年義尙六角定頼ヲ近江ニ討チ陣中ニ薨ス、義尙子ナキヲ以テ義教ノ孫義植ヲ養フテ嗣トス、二年義政薨シ義植立ツ、明應二年細川政元畠山政長ヲ殺シ、義植ヲ幽ス、而シテ足利政知ノ子義澄ヲ立ツ、時ニ義植逃レ出テ越前ニ奔リ、朝倉貞景ニ依ル、又轉シテ大内義興ニ依ル、義興義植ヲ奉シテ京師ニ入ルヤ、義澄近江ニ奔ル、爾來諸將相戰ヒ、妄リニ將軍ヲ廢立ス、是ニ於テ義晴、義輝、義榮相尋テ立チ十五代義昭ニ至テ亡ブ、

(六) 足利將軍ノ歴代及其名號年齢ヲ問フ

一代	等持院尊氏 <small>初名高氏</small>	在職二十五年	薨年五十四
二代	寶篋院義詮 <small>尊氏子</small>	同 十 年	同 三十八
三代	鹿苑院義滿 <small>義詮子</small>	同 二十七年	同 五十一
四代	勝定院義持 <small>義滿子</small>	同 二十九年	同 四十三

五代	長得院義量 <small>義持ノ子</small>	同三年	同十九
六代	普廣院義教 <small>義滿ノ子</small>	同十四年	同四十八
七代	慶雲院義勝 <small>義教ノ子</small>	同二年	同十
八代	慈照院義政 <small>義勝ノ弟</small>	同三十一年	同五十六
九代	常徳院義熙 <small>義政ノ子</small>	同十六年	同二十五
十代	惠林院義植 <small>義熙ノ孫</small>	同十八年	同五十八
十一代	法住院義澄 <small>義植ノ孫</small>	同十六年	同三十二
十二代	萬松院義晴 <small>義澄ノ子</small>	同二十五年	同四十
十三代	光源院義輝 <small>義晴ノ子</small>	同十六年	同三十三
十四代	義 <small>義輝ノ孫</small>	同一年	同三十一
十五代	靈陽院義昭 <small>義輝ノ弟</small>	同五年	同六十一

(六三) 戰國時代ノ大名及其割據ノ地方ヲ示セ

謂ク應仁ノ亂後足利氏威衰へ、諸國ノ豪族相踵テ起リ、四方ニ割據シテ戰爭絶ヘス、元龜天正ノ際ニ至リテ其勢最モ甚シ、今列國割據ノ地方ト其大名ノ重ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

北條氏	武藏、相模、伊豆
里見氏	安房、下總ノ内
關東 佐竹氏	常陸
宇都宮氏	下野、下總
喜連川氏	甲斐、信濃、駿河
東山 武田今川二氏	陸奥
東海 南部氏、伊達氏、大島氏、相馬氏、蘆名氏、	出羽
奥羽 秋田氏、大寶寺氏、最上氏	
北陸 上杉氏	越後、越中、飛騨、能登、加賀、上野、佐渡
毛利氏	周防、長門、安藝、備中、備後、伯耆、出雲、隱岐
山名氏	但馬、因幡
一色氏	丹後
宇喜多氏	備前
浦上氏	美作
赤松、別所二氏	播磨
山陰 波多野氏	丹波
山陽	

細川三好二氏 阿波、讃岐
四國 長曾我部氏 土佐

河野氏 伊豫

大友氏 豊前、豊後、肥後

島津氏 薩摩、大隅、日向

龍造寺氏 筑前、筑後、肥前

宗氏 壹岐、對馬

織田氏 美濃、尾張、近江、山城、大和、河内

北畠氏 伊賀、伊勢、志摩

羽柴氏 攝津

根來僧徒及島山氏 紀伊

(六四) 後花園帝義政ヲ戒ムルヲ問フ

謂ク足利義政天下ノ凶荒ヲ意トセス、大ニ其第宅ヲ營ミ華奢ヲ極ム、モト足利氏ノ制大儀アル時ハ諸侯ニ課ス概テ五六年ニ一度トス、然ルニ義政ニ至リ五年ニ九度ニ及ビ、民大ニ疲勞セリ、後花園帝深ク之ヲ憂ヒ、御製ノ詩ヲ以テ之ヲ規箴セラル、其詩ニ曰ク

殘民爭採首陽薇、處々閉鎖鎖三竹扉、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥、

(六五) 扇ヶ谷定正太田道灌ヲ殺ス原因如何

謂ク扇ヶ谷定正ノ臣太田道灌才略拔群ナリ、曾テ河越江戸ノ二城ヲ築キ、大ニ恩威ヲ八洲ニ布ク、八洲ノ將士山内ニ背テ扇ヶ谷ニ歸スル者甚タ多シ、山内顯定大ニ之ヲ恐レ、道灌ヲ除キ定正ノ勢ヲ削ラントス、乃チ反間ヲ放テ頻ニ道灌ヲ讒ス、定正之ヲ信シ、道灌ヲ召シ酒ヲ賜ヒ人ヲシテ之ヲ殺サシム、定正ノ威勢之ヨリ衰フ

(六六) 鐵砲ハ何レノ時代ニ傳來セシヤ

謂ク天文十二年八月葡萄牙ノ商船大隅種子島ニ來リ、明人ヲ通辨トシ互市ヲ求メ且ツ鳥獸ヲ傳フ、島主種子島時堯大ニ悦ヒ、之ヲ購求シテ家人ヲシテ其術及製藥ノ法ヲ學ハシム、紀州根來ノ僧徒時堯ニ請フテ之ヲ傳フ、然レモ製法未備ハラス、十三年葡人又來ル、時堯鍛工定清ニ命シテ其製法ヲ學バシメ、新ニ數挺ヲ製ス、後和泉ノ人橋屋又三郎ト云フモノ種子島ニ學ヒ、業成テ歸ル、島主時堯新ニ十挺ヲ製シ、國主島津氏ニ獻ス、島津氏之ヲ將軍義晴ニ獻ス、後數年ニシテ天下ノ利器トナル

(六七) 松前光廣蝦夷ヲ服セシヲ問フ

謂ク後柏原天皇明德九年蝦夷大ニ亂ル、渡島ノ城主蠣崎光廣討テ之ヲ平ケ、松前ニ徙リ

疆土ヲ拓キ、夷民ヲ撫シ、遂ニ蝦夷全島ヲ治ム、

(六六) 北條早雲相摸ヲ畧スル概要如何

謂ク北條長氏大森實頼ヲ小田原ニ襲ヒ、其城ヲ取リ子氏綱ヲシテ之ニ居ラシム、長氏ハ伊勢ノ人豪邁大志アリ、嘗テ義視ニ仕フ、應仁ノ亂ニ及シテ一方ニ割據スル志ヲ起シ、其徒七人ト東游シ、今川氏ニ寓ス、足利茶々丸其父ヲ弑スルニ及テ、兵ヲ擧テ之ヲ誅シ、伊豆及相摸ヲ略取シ兵威大ニ振フ

(六九) 甲越戰爭ノ原因如何

謂ク天文十六年八月信濃ノ人村上義清甲斐ノ武田ニ滅ホサレシテ越後ニ赴キ、上杉謙信ニ謁シテ曰ク、僕等屢々武田信玄ノ苦ムル所トナリ、身ヲ置ク所ナシ、願クハ將軍僕ノ爲ニ怨ヲ報セヨト、謙信之ヲ諾シ兵ヲ出シテ信玄ト戰フ、

(七〇) 川中島ノ戰況如何

謂ク信玄謙信ハ當時有名ノ驍將ニシテ一雙ノ雄武ナルヲ以テ勝敗久シク決セス、永祿四年九月九日、上杉武田ト大ニ川中島ニ戰フ、謙信進テ刀ヲ揮ヒ、信玄ヲ連撃スルコト三タビ、信玄胡牀ニ踞シ、軍扇ヲ擧テ之ヲ扞ク、原大隅槍ヲ以テ謙信ヲ縱ス、誤テ其馬ニ中ル、馬駭キ逸ス、武田父子皆傷キ、諸將士多ク死傷ス、越軍モ亦死傷多シ、後世學者此

戰ヲ稱シテ義戰ト云フ

(七一) 武田勝頼敗戦ノ始末如何

謂ク天正十年織田信長大軍ニ將トシテ武田氏ヲ甲斐ニ攻ム、徳川氏及ヒ北條氏各兵數萬ヲ率テ來會ス、勝頼拒ク能ハス、遁レテ天目山ニ據ル、將士離反シテ從兵僅ニ四十人終ニ敗レ、勝頼父子自殺シ武田氏茲ニ滅亡ス、

(七二) 大内氏滅亡ノ始末如何

謂ク天文二十年八月陶晴賢其君大内義隆ヲ弑ス、大内氏ハ義弘貞治年中周防ヲ鎮セシヨリ、是ニ至テ凡ソ百七十八年ニシテ亡フ、初メ晴賢相良武任ト權ヲ爭フ、武任之ヲ義隆ニ讒シテ遠サク、晴賢病ト稱シテ邑ニ歸リ、密ニ兵食ヲ聚ム、義隆意ニ介セス、流寓ノ廷臣前ノ關白尹房、前ノ左大臣公頼、中納言親世等ト日々宴樂ス、晴賢卒ニ兵ヲ擧テ山口ヲ襲フ、義隆海ニ航シテ他州ニ逃レントス、晴賢沿海ノ船ヲ匿ス、義隆遂ニ大寧寺ニ入リテ自殺ス、晴賢大友義長ヲ迎テ主トス

(七三) 毛利元就晴賢ヲ誅セシハ如何

謂ク陶晴賢其主大内氏ヲ亡ボスヤ毛利元就之ヲ聞キ、討賊ノ詔勅ヲ請ヒ、巖島ニ城キテ賊兵ヲ誘キ、風雨ニ乘シ大ニ賊ノ船艦ヲ破ル、賊軍大ニ潰敗シ遂ニ晴賢ヲ亡シ盡ク大

内氏ノ故地ヲ併ス、後又大内義長ヲ山口ニ攻テ之ヲ誅ス、

(七四) 本願寺僧徒ノ勢威ヲ張リシ原因如何

謂ク細川晴元其家宰三好元長ト隙ヲ生セシキ、本願寺ノ僧徒ヲ誘テ之ヲ殺ス、尋テ本願寺ト睦シカラス、遂ニ大ニ之ト戦フ、主僧大阪ニ城キ相抗シ後和睦ス、是ヨリ同寺ノ僧徒勢威ヲ張リ、諸國ニ門徒交々起レリ

(七五) 耶蘇教渡來ノ起原ヲ問フ

謂ク天正年間葡萄牙人西班牙人等豊後ニ來リ、耶蘇教天主教又ハ舊教ト云フヲ弘ム、大友義鎮之ヲ崇奉シ漸ク九州ニ傳播ス、宣教師南海ヨリ來ルヲ以テ邦人之ヲ南蠻人ト總稱シ、爭テ洗禮ヲ受ク、此其起源ナリ

(七六) 足利氏時代ニ於ケル衣食住ノ有様ヲ問フ

謂ク足利氏ノ時代ニ至リテ風俗更ニ一變シ、鎌倉時代質素ノ風去リテ公武ノ別ナク専ラ華美ヲ尊フニ至レリ、
家屋ノ形ハ唐破風ヲ具ヘテ檜皮葺トス、下民ノ家ハ藁或ハ萱ヲ以テ葺キ板扉等ヲ附セリ、衣服ハ多ク素襖スワカメギヌ肩衣ヲ用エ、更衣ノ期節ハ九月一日ヨリ翌年三月マデ袷アキハ薄小袖ヲ用ヒ四月朔日ヨリ袷ヲ着シ、男子ハ五月五日ヨリ、女子ハ六月朔日ヨリ帷巾ヲ着スルヲ定

例トス、飲食ハ尚ホ朝夕二回ナレモ餅或ハ温饅ノ如キモノヲ間食スル事アリ、之ヲ點心ト云ヘリ、客人ヲ饗應スルニハ種々ノ法式アリテ配膳ノ方法膳部ノ整備等甚タ鄭重ナリ

(七七) 織田信長ノ人ト爲ヲ問フ

謂ク織田信長ハ平重盛ノ後裔ニシテ、世々清洲キヨスニ居リ、尾張八郡ヲ領ス、信長ノ父ヲ信秀ト云フ、屢々美濃ノ齊藤道三ト兵ヲ構フ、信長幼ヨリ磊落ニシテ大志アリ、最モ武事ヲ好ミテ細節ニ拘ハラズ、平常放縱ニシテ威儀ヲ顧ミス、平手政秀深ク之ヲ憂ヒ遂ニ諫死ス、信長是ヨリ其行ヲ改メ、遂ニ足利氏ニ代ツテ天下ヲ一統セシト雖モ、惜ムヘシ明智光秀ノ爲メニ怨ヲ受ケ、其霸業ヲ全クセサリシモノハ、信長ノ性粗暴急激ニシテ寛裕大度ノ徳ナキニ由レリト云フ

(七八) 織田氏足利氏ヲ滅ス概要如何

謂ク信長今川義元ト桶峽ニ戦ヒ之ヲ斬リ、信長ノ威名海内ニ聞ユ、時ニ足利義昭、松永久秀ノ亂ニ際シ、逃レテ各所ニ流寓シ、使ヲ信長ニ使シ托スルニ恢復ノ事ヲ以テス、信長乃チ義昭ヲ迎ヒ、進テ近江ニ入り六角氏ヲ亡シ、竟ニ京師ニ入り、立テ、將軍トス、既ニシテ義昭信長ト隙アリ、兵ヲ擧ケテ信長ヲ除カントス、信長之ヲ攻圍シ、遂ニ義昭

ヲ河内ニ遷ス、詔シテ義昭ノ官爵ヲ削ル、是ニ至リ足利氏亡ビ織田氏代リテ京畿ノ政ヲ行ヒ、近江ノ安土ニ城ヲ之ニ居ル、後義昭諸國ニ流寓シ、終ニ毛利氏ニ客死ス、

(七九) 織田氏ノ勤王ハ如何

謂ク正親町天皇信長ノ名ヲ聞キ、密カニ使ヲ尾張ニ遣ハシ、托スルニ天下ノ亂ヲ平定スルノ任ヲ以テス、信長感激シ報復ヲ圖ル、且皇室ノ式微ヲ嘆シ、資ヲ獻シ皇宮ヲ修理シ、舊典ヲ復興シ、廢職ヲ繼起シ、カメテ皇室ヲ尊崇セリ、

(八〇) 信長叡山ヲ焚クハ何故ソ

謂ク元龜二年信長叡山ヲ焚ク、佐久間信盛等諫テ曰ク、桓武帝此等ヲ創立シテ以テ王城ノ鎮ト爲ス、今之ヲ滅スハ不可ナリ、信長曰ク、吾レ國賊ヲ芟鋤ス、汝何ヲ以テ不可ト爲ス、吾レ大義ヲ顯ハシ以テ衰運ヲ挽回セント欲シ、間關崎嶇未タ嘗テ一日モ安居セス、曩ニ淺井長政、朝倉義景ヲ擊テ將ニ之ヲ山上ニ殲ントスルヤ、僧徒務メテ兇焰ヲ煽キ、以テ王師ニ抗ス、國賊ニ非スシテ何ソ、且聞ク彼レ其戒ヲ破リテ姪慾ヲ恣ニシ、法務ヲ修メス、安ニ其王城ヲ鎮スルニ在ント、乃チ火ヲ縱チ悉ク僧徒ヲ捕ヘ、其蓄フ所ノ婦女童幼ヲ併セテ皆ナ之ヲ斬ル

(八一) 信長一向宗ノ僧徒ヲ殲スハ何故ソ

謂ク信長ノ時ニ當リ一向宗諸國ニ跋扈シ、就中尾張野島ノ一揆最モ狂暴ヲ極ム、信長四年ヲ經テ之ヲ平ケ、宗徒二萬餘人ヲ戮殺ス、而シテ本願寺其根據タリ、故ニ大坂城ニ據リテ屢々信長ト戰フ、遂ニ勅諭ヲ奉シテ城ヲ致シ、之ヲ討平ク

(八二) 明智光秀反逆ノ顛末如何

謂ク羽柴秀吉ノ毛利氏ヲ攻ムルヤ援ヲ信長ニ乞フ、信長自ラ兵ヲ率ヒ進ンテ京師ニ入り、本能寺ニ館ス、時ニ光秀西征ノ命ヲ受ケ、丹波龜山ニアリ、悉ク其兵ヲ發シテ夜大江山ヲ度リ、老阪ニ至リテ左旋ス、士卒之ヲ驚異ス、光秀策ヲ揚ケ大呼シテ曰ク、敵ハ本能寺ニ在リト、衆始テ其叛ヲ知ル、味爽呼譟シテ本能寺ヲ圍ム、時ニ信長ノ從臣百餘人ニ過キス、信長乃チ火ヲ縱テ自殺ス、時年四十三、其子信忠二條城ニ據リ、亦力戰シテ死ス

(八三) 山崎ノ戰トハ如何

謂ク秀吉京師ノ凶報ニ接シ、直ニ兵ヲ移シ諸將ト尼崎ニ會ス、諸將光秀ヲ討ンコトヲ議ス、秀吉之ヲ督シ山崎ニ陣ス、光秀之ヲ聞キ兵一萬五千ヲ以テ洞嶺ニ次シ、兵ヲ分ツテ天王山ニ上ル、秀吉、堀秀政及ヒ堀尾吉晴ヲ遣ハシ、縱擊之ヲ殲ス、秀吉遂ニ賊ト山崎ニ戰フ、高山友祥先鋒ト爲リ、中川清秀池田信輝左右ノ翼ヲ張リ、奮闘シテ之ヲ破ル、賊餘

衆ヲ率ヒテ青龍城寺ニ據ル、時ニ城兵稍ヤ散亡ス、光秀恐怖シ將ニ坂本ニ奔ラントス、夜十餘騎ト小栗栖ヲ過ク、土兵俄ニ起リ林中ヨリ槍ヲ以テ光秀ヲ刺ス、光秀馬ヨリ墜テ死ス、秀吉既ニ光秀ノ軍ヲ破リ、京師ニ入りテ信長ノ尸ヲ灰燼中ニ收メ、光秀ノ首ヲ本能寺ニ梟ス、信長ノ薨セシヨリ僅十三日ニシテ平ク、秀吉ノ威望愈々海内ニ震フ、

(八四) 秀吉毛利氏ト和スルヲ如何

謂ク秀吉毛利氏ト相持シ、高松將ニ陥ラントス、輝元和ヲ請フ、會々本能寺ノ凶報至ル、秀吉實ヲ以テ告ク、毛利氏ノ諸將變ニ乗シ約ヲ破ラント欲ス、小早川隆景進テ曰ク、秀吉ノ智略ヲ見ルニ尋常人ノ及ブ所ニアラス、今小利ヲ貪リ怨ヲ結ハ、必ス後害アラント、輝元之ニ從ヒ好ヲ修シ、援兵ヲ發ス、秀吉乃チ師ヲ班シ、尼ヶ崎ニ至ル

(八五) 三十六町ヲ以テ一里ト定ムノ制ハ何頃始マリシヤ

謂ク信長既ニ近畿ヲ平定シ、四境ノ道里ヲ均一ニシ、三十六町ヲ以テ一里ト定メ、一里毎ニ樹木ヲ植ヘシメ、又津梁ヲ通シテ關征ヲ蠲ク、民人大ニ便トセリ

(八六) 秀吉ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク豊臣秀吉ハ尾張愛知郡中村ノ農民彌助ナル者ノ子ナリ、幼名日吉丸ト云フ、八歳ニシテ父ヲ失フ、母之ヲ僧ト爲ント欲ス、日吉僧事ヲ學ブヲ欲セス、慨然トシテ嘆シテ曰ク、僧

ハ乞丐ノ徒ノミ、大丈夫世ニ生レ安ンゾ之ヲ學ブヲ爲サンヤト、是ニ於テ遊戲意ニ任ス、年十六ニシテ遠江ノ松下之綱ニ仕ヘ、木下藤吉郎ト稱ス、尋テ信長ニ仕ヘテ擊鞋ノ奴トナリ奉仕太々勤ム、信長之ヲ奇トシ漸ク其寵ヲ得、擢ラレテ部將トナリ、連リニ戦功ヲ建テ、信長ノ肱股トナリ、姓ヲ改メテ羽柴ト稱ス、蓋シ丹羽、柴田兩將ノ姓ヲ侵セシ者ナリ

(八七) 賤ヶ岳ノ戦ヲ問フ

謂ク織田信孝秀吉ノ威名ヲ忌ミ、柴田勝家瀧川一益ト謀リ、秀吉ヲ討ントス、秀吉兵ヲ將井テ信孝ヲ岐阜ニ圍ム、勝家佐久間盛政ヲシテ中川清秀ヲ攻メシム、清秀ノ兵賤嶽ノ址ニ據リ其備固カラス、清秀退キ走ル、盛政勝ニ乗ジテ之ヲ逐フ、清秀力戰遂ニ死ス、盛政捷ヲ勝家ニ報ス、勝家之ヲ召還ス、盛政答フル兵疲ル、ヲ以テ明日ヲ俟チ退クベシト、使者五タヒニ至ルモ用ヘス、其翌秀吉岐阜ヲ攻メント欲スルノ時ニ當リ、賤嶽ノ報至ル、秀吉盛政ノ軍未タ退カサルヲ知リ、踴躍シテ曰ク、我レ捷ヲ得タリト即チ駛走五十人ニ命シテ沿道ノ民ヲ募リ、炬火及ヒ酒食ヲ具ヘシメ、勗シムルニ厚賞ヲ以テス、遂ニ堀尾吉晴等ヲシテ岐阜ニ當ラシメ、自ラ輕兵ヲ提ゲ叱咤疾馳ス、暮ニ及ビ山谷皆ナ炬ニシテ士氣益々奮フ、北軍炬火ノ甚タ多キヲ望見シ、秀吉ノ兵速ニ至ルニ驚キ、盛政將ニ暗ニ乘ジ軍ヲ括テ退ントス、適月己ニ出ツ、秀吉追擊シテ盛政ヲ走ラス、勝家之ヲ援ハ

ント欲ス、加藤清正、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、福島正則、片桐直盛、糠谷武則等槍ヲ提ゲテ争ヒ進ミ、向フ所敵スルモノナシ、遂ニ賤嶽ヲ復ス、世呼テ賤嶽ノ七槍ト云フハ是ナリ

(八六) 柴田勝家ノ亡フル所以如何

謂ク勝家核山ニ在リテ盛政ノ敗ヲ聞キ、大ニ憤恨シテ曰ク、吾レ自ラ往テ戰ヲ決セント、乃チ散兵ヲ收メテ進ミ撃ント欲ス、家臣毛受勝介諫メテ曰ク、敗衄此ニ至ル、命ノ窮ルナリ、臣請フ君カ背職ヲ假リ、君ニ代リテ死ヲ効サン、君宜ク北莊ニ入り徐ニ計ヲ爲スベシト、勝家之ニ從フ、既ニシテ秀吉之ヲ圍ム、勝介陽リ呼テ曰ク、柴田勝家此ニ死スト終ニ力戰シテ死ス、勝家聞テ得テ府中ニ至リ、前田利家ト訣別シ、走テ北莊ニ歸ル、秀吉進ンテ北莊ニ至ル、盛政及ビ勝家カ義子權六皆チ執ヘラル、城中頗ル窮蹙ス、勝家夜將士ヲ天主閣ニ宴シ、慨慷シテ曰ク、終ニ猴奴ヲシテ名ヲ成サシム、死ストモ餘憾アリト、遂ニ曉ニ至リ火ヲ縱テ自殺ス、是ニ至リ柴田氏遂ニ亡フ

(八九) 小牧山ノ役ヲ問フ

謂ク秀吉ノ威權日ニ隆ナリ、織田信雄之ヲ忌ム、遂ニ之ヲ討センコトヲ圖リ、援ヲ徳川家康ニ求ム、家康信雄ノ使ヲ得テ曰ク、吾故右府ノ厚誼ヲ受ク、然ルニ其孤ヲ難ニ救ハザレバ天下其レ我ヲ何トカ言ハント、乃チ大舉シテ赴キ援ビ、小牧山ノ故壘ヲ修メ、信雄ト俱ニ軍ヲ駐ム、其戰フニ及ンテ秀吉ノ別軍ヲ長湫ニ敗リ、森長可池田信輝等ヲ斬ル、秀吉輒ク勝ツヘカラサルヲ察シ、信雄ト和シ、大坂ニ歸リ、家康モ亦兵ヲ解テ濱松ニ還ル

(九〇) 秀吉島津氏ヲ伐チシ始末ヲ問フ

謂ク天正十四年島津義久薩摩ヨリ起リ、大舉シテ豊後ノ十餘城ヲ拔ク、時ニ長曾我部元親大友氏ヲ援ケテ之ヲ拒ク利アラス、義久ノ兵勢日ニ益隆ナルヲ以テ、秀吉大兵ヲ發シテ西征ス、時ニ龍造寺氏秀吉ニ属シ、秀吉連戰皆ナ捷チ、遂ニ進ンデ薩摩ニ入り千代川ニ至ル、尋テ諸城ヲ下シ秀吉ノ軍盡ク鹿兒島ニ集ル、是ニ至テ島津氏ノ諸將交々義久ヲ勸メテ降ヲ乞ハシム、乃チ使ヲ遣ハシテ謝罪ス、秀吉曰ク聞ク島津氏ハ源石大將ノ遙胃ニシテ、國ヲ建ルコト玆ニ四百歳、一朝ニシテ之ヲ滅ズハ、吾ガ忍ビサル所ナリ、其レ之ヲ宥セト、義久大ニ喜ヒ髮ヲ剃リ、來リ謝ス、秀吉禮シテ之ヲ還シ、命シテ弟義弘ヲ以テ嗣ト爲サシム、是ニ於テ九州悉ク平ラク、

(九一) 秀吉天下ヲ平ケシ順序如何

謂ク賤ヶ岳ノ戰終ルヤ信雄亦兵ヲ舉ク、徳川家康之ヲ援ク、秀吉一戰長湫ニ敗ル、因テ

秀吉和ヲ講シ、兵ヲ罷メ次テ長曾我部氏ヲ降シ四國ヲ平ケ、上杉氏ト和シテ北陸ヲ定ム、於是天下大抵秀吉ニ歸シ、遂ニ織田氏ニ代テ天下ニ覇タリ、天正十四年累進シテ關白トナリ太政大臣ニ任シ、從一位ニ叙シ姓ヲ豊臣ト賜フ

(九二) 秀吉小牧ノ一役ニ敗衄ヲ取リシハ如何

謂ク此戰タル秀吉ノ兵弱キニアラス、又家康ノ軍強キニアラス、然レモ秀吉ハ天下ニ覇タルノ念ヲ起シ、古主ノ子ヲ滅サント欲シ、家康ハ信長ノ舊誼ヲ重ンシ、其孤ノ窮蹙ヲ援クニ出ツ、是レ理非順逆神人ノ與ミセサルモノアルヲ以テ、終ニ其志ヲ得サリシナリ、

(九三) 朝鮮征討ノ概況如何

謂ク秀吉既ニ海内ヲ一統スルニ及ヒ、朝鮮ニ諭シ明國ヲ擊ツノ先導タラシメントス、朝鮮之ヲ虛喝トス、秀吉更ニ宗義智ヲ遣ハス、又答ヘス、是ニ於テ議ヲ征韓ニ決シ、職ヲ秀次ニ讓リ、自ラ太閤ト稱シ、出テ、肥前名護屋ニ營ス、加藤清正、小西行長陸軍ノ先鋒タリ、九鬼嘉隆、加藤嘉明水軍ノ將タリ、浮田秀家元帥タリ、總兵凡三十萬以テ朝鮮ヲ討ツ、朝鮮諸道風ヲ望ミテ敗潰シ、國都陷リ國王平壤ニ奔ル、平壤亦陷ル、清正咸鏡道ニ入り、二王子ヲ擒ニス、李公急ヲ明ニ告ク、明主翊朱鈞、及祖承訓、史儒算ヲシテ

兵ヲ率テ平壤ヲ援ケシム、行長邀ヘ擊テ大ニ之ヲ敗リ、史儒算ヲ斬リ、承訓ヲ走ラセ、遂ニ平壤ヲ取ル、時ニ清正咸鏡ヲ平ク、尋テ明將李如松大擧シテ平壤ヲ攻ム、行長敗レテ國都ニ入ル、李如松勝ニ乘シ鼓行シテ來ル、隆景宗茂等之ヲ碧蹄館ニ邀撃シ、大ニ之ヲ破ル、明將畏懼シテ復タ南下セス、明和ヲ請フ、秀吉之ヲ許シ、二王子ヲ還ス、

(九四) 朝鮮再征ノ始末如何

謂ク秀吉明國ト和シ、後其冊文ヲ讀ムニ爾ヲ封シテ日本國王ト爲スノ語アリ、秀吉大ニ怒リ、再ヒ兵十餘萬ヲ發シテ朝鮮ヲ征ス、韓主警ヲ聞テ海州ニ走ル、明主那玠楊鎬等ヲシテ朝鮮ヲ援ケシメ、清正ヲ蔚山ニ圍ム、清正淺野幸長ト堅ク守テ屈セス、時ニ諸將來リ蔚山ヲ援フ、清正幸長等城ヲ出テ、挾撃シ、大ニ之ヲ敗ル、明兵ノ伏屍數十里絶ヘス、會秀吉薨ス、乃チ遺命シテ諸將ヲ召還サシム、是ニ於テ征韓ノ諸兵皆ナ歸途ニ就ク

(九五) 秀吉裂冊ノ理由ヲ問フ

謂ク慶長元年、明韓ノ使節來ル、秀吉明使楊方亨、沈惟敬ヲ召見ス、惟敬冊書冕服ヲ奉ス、秀吉僧承兌ヲ召シテ冊書ヲ讀マシム、承兌之ヲ讀ンデ曰ク、爾ヲ封シテ日本國王ト爲スト、秀吉色ヲ變シ、立ドコロニ冕服ヲ脱キテ之ヲ抛チ、冊書ヲ柱裂シテ曰ク、日本ハ吾カ掌握ニ在リ、王ト爲リ覇ト爲ル、髯虜何ゾ與ラン、且ツ吾ニシテ王タラハ天朝ヲ如

何セント、乃チ使者ヲ逐フ、是ニ於テ再征ノ命ヲ下ス、

(九六) 小田原ノ役ハ如何

謂ク秀吉東征西征概チ海内平定ニ歸スト雖モ、北條氏政ノ子氏直獨リ關東ニ據リテ猶兵勢ヲ張レリ、秀吉氏政父子ニ入覲ヲ促セトモ依違シテ應セス、天正十八年秀吉大舉シテ氏直ヲ小田原城ニ攻メ、諸將ヲ分チ遣ハシ、關東六十餘城ヲ下ス、氏政窮蹙シテ降リ乞フ、秀吉之ニ自盡セシメ、氏直ヲ高野ニ縱ツ、北條早雲ヨリ是ニ至ツテ凡ソ五世九十餘年ニシテ滅ブ、

(九七) 秀吉聚樂ノ盟如何

謂ク秀吉嘗テ聚樂第ヲ築ク、後陽成天皇太上天皇ト之ニ幸ヌ、諸皇子及宗室妃嬪皆從フ、秀吉普ク諸將ヲ會シ、皇室ヲ尊奉シ關白ノ命ニ違ハサランコトヲ盟フ、車駕駐ルコト五日ニシテ宮ニ還ル是ヨリ秀吉ノ威望益ヌ高シ、

第四編 近世史

(一) 關ヶ原ノ役ノ始末如何

謂ク慶長四年正月前田利家、秀吉ノ遺命ニ遵ヒ豊臣秀頼ヲ奉シテ大坂ニ徙ル、時ニ徳川家

康伏見^弟ニ徙リ、豊臣氏ニ代テ權ニ天下ノ事ヲ決ス、威權甚熾ナリ、石田三成等姦計ヲ以テ前田利家ヲシテ隙ヲ生セシメ、遂ニ家康ノ政柄ヲ解カシメ、更ニ又家康ヲ襲撃セントス、前田玄以細川忠興等之ヲ沮止ス、上杉景勝等三成ト謀テ、各其國ニ歸リ、明年東西兵ヲ擧ゲ共ニ家康ヲ夾ミ撃タンコトヲ約ス、家康屢々景勝ノ入覲ヲ促スニ來ラス、且ツ家康ノ十罪ヲ數フ、家康怒テ自將トシテ景勝ヲ伐ツ、諸將從征ス、兵凡五萬五千餘、三成乃チ事ヲ擧ケ、書ヲ移シテ兵ヲ徵ス、毛利輝元以下侯伯大坂ニ會スル者四千餘人、應援ヲ爲スモノ三十六國、其兵凡ソ九萬三千餘、三成乃チ輝元ヲ推シテ盟主ト爲シ、増田長盛ト共ニ大坂城ヲ守ラシメ、浮田秀家小早川秀秋島津義弘等ト伏見及諸城ヲ陷レ、勝ニ乘シテ美濃ニ至ル、兵凡ソ十二萬餘時ニ家康下野ニ至ル、上國ノ變ヲ聞キ、其子結城秀康ヲ留メテ景勝ニ當ラシメテ師ヲ旋ヘス、加藤清正、黒田孝高等三成ヲ惡ミテ家康ニ屬ス、正則東軍ノ先鋒タリ、兵凡ソ七萬進ミテ美濃ニ會シ、大ニ關ヶ原ニ戰フ、勝敗未タ決セス、秀秋兩端ヲ觀望シテ動カズ、遂ニ家康ニ應ス、忠勝正則等勢ニ乘シテ奮戰ス、西軍竟ニ大敗シ、輝元義弘皆其國ニ逃レ歸ル、西軍ノ斬獲セラル、モノ三萬二千六百餘、原草爲メニ赤シ、東軍ノ死傷四千ニ滿タス將帥一人モ死スル者ナシ、四方之ヲ聞テ震懼シ、旬月ノ間六十餘州盡ク徳川氏ニ服ス、之ヲ關ヶ原役トナス

(二) 鳥居元忠戰死ノ事ヲ問フ

謂ク元忠ハ家康ノ將ニシテ伏見城ヲ守ル、増田長盛使ヲ遣リ、元忠ヲ諭シ城ヲ廢シテ去ラシメントス、元忠曰ク、吾特撰ヲ得テ之ヲ守ル、唯々死アルヲ知ルノミト、乃チ使ヲ關東ニ馳セテ家康ニ變事ヲ報ス、既ニシテ浮田秀家、小早川秀秋鳥津義弘來リ攻ム、城兵僅カニ二千、元忠盡ク城下ヲ燒キ、諸將ヲ部署シテ戰ヒ、固ク守リテ屈セス、西軍累日大礮ヲ用ヒテ之ヲ攻メ、外城遂ニ陷ル、元忠牙城ニ在リテ守ルベカラサルヲ知リ、兵二百ヲ麾キ、門ヲ開テ血戰シ、數合皆ナクツ、然レモ士衆終ニ殲クヲ以テ自裁ス時二年六十二、後家康、元忠ノ戰死ヲ聞キ、泣ヲ垂レテ悼惜ス、

(三) 家康江戸開府ノ顛末如何

謂ク慶長八年、詔シテ家康ヲ以テ征夷大將軍ト爲シ、右大臣ニ進ミ、淳和榮學兩院ノ別當ヲ兼ヌ、源氏ノ長者ニ補ス、是ヨリ先キ家康ノ功ヲ賞セント欲シテ、擬スルニ此職ヲ以テス、家康敢テ當ラス、且ツ其勞費多キヲ恐レテ固ク辭ス、是ニ至テ大納言藤原兼勝、參議藤原光豐傳奏司ヲ以テ詔書ヲ奉シ、伏見ニ就テ拜ス、尋テ家康入朝シテ命ヲ拜ス、後チ家康右大臣ヲ辭シテ江戸ニ歸ル、是時ニ當リ家康關原ノ亂ヲ平ゲ、天下兵馬ノ權一ニ徳川氏ニ歸シ、諸侯皆チ江戸ニ會ス、是ヨリ家康天下ノ侯伯ニ課シ、皇居ヲ修シ、其

規模ヲ擴メ以テ舊觀ニ復ス、尋テ江戸城ヲ修ム、城ハ元ト太田持資カ築ク所ニシテ、東ハ隅田川ヲ帶ビ、南ハ海灣ヲ控シ、西北ハ武藏野ニ接シ、平坦ニシテ蘆葦叢生ス、家康居ヲ徙スニ及ンテ漸ク市街ヲ起シ、渠ヲ鑿チ水ヲ疏ス、又諸侯伯ヲシテ其邸第ヲ江戸ニ置キ、妻子ヲ其邸ニ留メテ質ト爲シ、隔年ヲ以テ交代セシムルノ制ヲ定ム

(四) 大坂夏冬ノ陣ハ如何

謂ク慶長十九年、豊臣秀頼既ニ長シタレハ、豊臣ノ家臣徳川氏ヲ滅シテ、主家ヲ再興セントノ念盛ナリ、偶々大佛方廣寺鐘銘ノ事ヨリ家康ノ詭牒セルヲ憤リ、遂ニ大野治長等秀頼及ヒ其生母淀君ヲ勸メ、諸浪士ヲ募集シテ、此年十月兵ヲ大坂ニ舉ク、其勢凡六萬人ナリ、是ニ於テ家康又諸大名ヲ率井テ大坂ヲ攻ム、其勢凡ソ十五萬人城ノ四面ヲ攻メ圍ミ、攻戰スルヲ數十日ニシテ、和議成リ、墮ヲ填メテ兵ヲ解ク、之ヲ大坂ノ冬陣ト云フ

然ルニ明年即チ元和元年大坂再兵ヲ舉ケント多ク浪人ヲ集メテ十五萬人餘ヲ得タリ、而シテ有土ノ侯伯一人モ至ルナシ大野治長、眞田幸村、長曾我部盛親、後藤基次、木村重成等諸軍ヲ統率セリ、將ニ天子ヲ狹ミテ天下ニ號令セントス、異議アリテ果サス、家康父子又天下諸侯ノ兵ヲ會シテ五月之ヲ攻ム、戰フヲ三日ニシテ城陷リ秀頼己下自殺シ、

諸將多ク戦死ス、之ヲ大坂ノ夏陣ト云フ、豊臣氏茲ニ亡フ

(五) 徳川家康ノ政略ヲ問フ

謂ク豊臣氏亡ビ、海内ノ政令盡ク徳川氏ニ歸ス、是年家康、秀忠入朝シ、關白ニ條昭實ト議シ、廷式十七條及ヒ武員式十三條ヲ定メ、又諸侯伯ヲ令シテ要地外ノ城壘ヲ悉ク毀タシメ、家族ノ勳奮ヲ各地ニ封ジ、郡代々官ノ職ヲ置キ、各藩ト犬牙交錯シ、京師ニ城番ヲ置キ、伏見ニ城代ヲ置キ、奈良、佐渡、長崎ニ奉行ヲ置キ、治國ノ制大ニ定マル、元和二年正月家康病劇シ、勅使駿府ニ就テ太政大臣ニ拜ス、時ニ家康七十有五ノ高齡ヲ以テ薨ス、久能山ニ葬ル、後朝廷東照宮ノ號ヲ賜フ

(六) 家康ノ人ト爲リヲ問フ

謂ク家康沈毅大略兵ヲ用フルノ神ノ如ク、學ヲ好ミ治ヲ求メ、人ヲ愛シ事ヲ處スルノ甚タ重固ナリ、而シテ朝廷ヲ重シ、護國ヲ以テ任トシ、自ラ儉約ヲ執リテ且稼穡ノ事ヲ重ス、嘗テ人アリ一疏ヲ出シテ獻ス、家康其レニ讀マシメテ之ヲ聽キ、每條輒ク善ト稱ス、讀ミ畢ルヤ之ニ謂テ曰ク、爾後見ル所アラバ、言フニ憚カル勿レト、其人頓首シテ出ズ、時ニ本多正信傍ニ侍シテ曰ク、彼何ソ輕率ナルヤ、且ツ其言フ所一モ取ル可キナシ、君何ソ之ヲ褒ズト、家康曰ク、否ナ吾レ其志ヲ褒スルナリ、且ツ取ルヘキ者ヲ褒セバ、取

ル可キ者必ズ至ルト、其孫女和子後中宮トナリ、東禮門院ト稱ス、其出與子内親王寛永七年九月天位ニ即ク、之ヲ明正天皇トス

(七) 徳川氏ノ威望ヲ得シ所以ヲ問フ

謂ク其原因一ナラスト雖モ、之ヲ概言スレハ、其初メ北畠信雄ヲ助ケテ秀吉ヲ小牧ニ破リ、其和スルノ後ト雖モ、敢テ秀吉ニ屈セス、秀吉ハ務メテ其歡心ヲ得ントシテ或ハ之ト婚事ヲ約シ、或ハ母大廳ヲ質トスルカ如キ種々ノ關係アリ、而シテ秀吉薨去ノ後秀頼尙幼ニシテ天下ノ望ヲ繫クニ足ラス、故ニ關ヶ原ノ戦勝後ハ靡然トシテ天下ノ大權ヲ掌握ス、是レ家康一朝一夕ノ功ニ非ス、多年ノ徳望自ラ覇業ヲ爲スニ至レルナリ、

(八) 秀忠ノ人ト爲リヲ記述セヨ

謂ク秀忠人ト爲リ恭儉温厚ニシテ勤王ノ志厚ク、嘗テ禁内ニ在リ、獨リ便室ニ休フ、或人之ヲ闕フニ衣冠肅然トシテ毫モ惰容アルコトナシ、其父家康ニ事フルヤ、心ヲ盡シ權ヲ承ク、細微ノ事ニ至ルマテ咨禀セザルナシ、其政ヲ執ルヤ征稅ヲ薄クシ徭役ヲ省キ、務メテ無爲ヲ圖ル、寛永九年秀忠職ヲ辭シ、家光襲テ征夷大將軍ニ任ス、是ヨリ先キ、秀忠其弟頼宣ヲ紀伊ニ、義直ヲ尾張ニ頼房ヲ水戸ニ封シ、是ヲ三家ト稱ス、秀忠疾ニ罹ル、乃チ三家ヲ召シ之ニ諭シテ曰ク、將軍年少シ卿等深ク祖宗ノ艱難ヲ念ヒ、協心輔翼シ、

異姓ヲシテ覬覦ノ心ヲ生ゼシムル勿レト、遂ニ薨ス

(九) 家光ノ人ト爲リヲ記述セヨ

謂ク家光ハ秀忠ノ子ナリ、元和元年酒井忠世、土井利勝、青山忠俊ヲ擇テ股肱トナス、家光諸侯伯ヲ召シ、親ラ出テ之ニ面シテ曰ク、前將軍已ニ薨セリ、諸君或ハ天下ヲ冀望セハ唯々其欲スル所ニ任ス、然レモ家光已ニ軍職ニ係ルヲ以テ宜ク弓箭ニ依テ授受スベキノミ、諸侯愕然トシテ未タ答ヘス、時ニ伊達政宗進テ曰ク、孰カ徳川氏ノ恩澤ヲ被ラザラン、今日敢テ異志ヲ挾ム者アラバ、政宗請フ往テ之ヲ蹂躪セント、衆又異口同音ニ心ナキヲ盟フ、家光資性英邁ニシテ膽畧アリ、恩威並ヒ行ハル、且祖先ヲ敬シテ談家康ノ事ニ及ヘハ輒チ盟漱シテ後聽ク、家光秀忠ノ世ハ、諸大藩各自偃蹇シ、其會同スル者將軍或ハ之ヲ郊迎シ、禮分未タ定ラズ、因テ家光又諸侯ニ諭シテ曰ク、我祖考ハ卿等ノ力ヲ以テ天下ヲ定ム、故ニ禮待ヲ加ヘ敢テ譜代ノ將士ニ比セス、予ニ至テハ襦袢已ニ天下ノ主タリ、自ラ祖考ト異ル、自今卿等ヲ待スルヲ譜第ニ同ウセン、若シ心ニ滿サレハ各三歳ノ間熟思シテ、宜ク去就ヲ決スヘシト、諸侯皆ナ逡巡シテ曰ク、敢テ台命ヲ聽カサラシヤ、家光乃チ内應ニ入り、次ヲ以テ諸侯ヲ延キ、佩刀ヲ賜フ、時ニ家光刀ヲ脱シテ便懸服坐ス、諸侯刀ヲ受ケテ拜ス、家光曰ク刀ヲ撿セヨ、諸侯悚息刀ヲ拔ク寸許ニシテ

退ク、是ヨリ徳川氏ノ權勢益々定ル

(一〇) 天草ノ亂ノ概況如何

謂ク大友、小西ノ亡臣等耶蘇教ヲ奉スル者民間ニ散在ス、天草ノ人益田時貞等之ヲ煽誘シ、原城ノ故趾ニ據ル、將軍家光特ニ松平信綱、戸田氏鐵ヲ遣ハシ之ヲ討タシメ、西海ノ諸侯皆ナ兵ヲ發シテ來リ援フ、賊防戰甚タ巧ニシテ東軍死傷甚タ多シ、此ニ於テ東軍長圍ヲ築キテ之ヲ困シメ、己ニシテ諸將兵ヲ勵マシ、四面肉薄シテ攻メ、悉ク外城ヲ奪フ、賊僅ニ牙城ヲ保ツノミ、諸將火箭ヲ以テ之ヲ火ク、城遂ニ陷ル、時貞以下男女三萬七千餘人ヲ殺戮シ、復タ餘類ナシ

(一一) 慶安ノ亂トハ如何

謂ク慶安三年逆徒ノ魁首由井正雪誅ニ伏ス、正雪ハ駿府青染匠ノ子ナリ、幼ニシテ武技ヲ好ム、一日太閤記ヲ讀ミ、感激シテ江戸ニ往キ、專ラ兵事ヲ研究ス、材智絶倫終ニ一家ヲ爲ス、諸侯家士庶人ノ門弟ト稱スル者殆ント千ヲ以テ數フ、曾テ某ヲ誑カシテ楠氏ノ系圖及徽章ノ旗ヲ獲テ之ヲ淺間山ノ松樹下ニ埋ム、是ニ至テ之ヲ發シ、奇異ヲ說キテ世ヲ瞞着ス、人益々信服セルヲ以テ、自カラ楠氏ノ遺胤ト稱ス、丸橋忠彌正雪ト親交シ共ニ謀テ結黨ヲ募ル、正雪ハ駿府ニ赴キ、忠彌ハ江戸ニ居テ事ヲ舉ントス、老中松平信

綱之ヲ探知シ、忠彌ヲ捕へ之ヲ誅ス、正雪其徒八人皆自殺シテ事平ラク、

(二) 德川氏ノ藩制ヲ問フ

謂ク德川氏ノ藩制第一ヲ親藩ト稱シ紀伊、尾張、水戸ノ三家及越前、會津、松平是ナリ、第二ヲ外様トス乃チ舊來ノ諸侯ナリ、第三ヲ譜代トス、德川氏ノ家臣ナリ、此三種ノ諸侯凡ソ二百六十餘家ナリ、當時全國ノ歳入三千萬餘石アリ、而シテ幕府及家門ノ諸侯其三分ノ一ヲ領セリ

(三) 德川施政ノ大綱ヲ問フ

謂ク德川氏施政ノ大綱ハ都テ德行ヲ勸メ、忠孝ヲ勵マシ、禮義ヲ正シ、風俗ヲ善クセシムルモノニ非ルナシ、故ニ大名ニ下ス法度ノ第一條ニハ文武忠孝ヲ勵マシ禮義ヲ正スヘキ事云トアリ、町人百姓ニ示ス高札ニ親子兄弟夫婦ヲ始メ、諸親類ニ睦マシク、下人ニ至ルマデ、之ヲ憐ムベシ、若不忠不孝ノ者アラハ、嚴科ニ處スヘキ事、主人アル者ハ各其奉公ニ精出シ、家業ヲ專ニシテ怠ルコトナク、萬事分限ニ不可過事ナド、記シタリ

(四) 德川氏ノ時王室ノ有様如何

謂ク慶長十六年家康諸侯ニ命シテ上皇ノ宮ヲ修メシメ、十八年又三十七藩ニ命シテ皇居ヲ修理セシメタル故、内裏ノ規模大ニ面目ヲ改メヌ、又公卿縉紳ニハ各采邑ヲ供給シ、

天皇ニハ御領三萬石、上皇ニハ七千石ヲ献シテ用度ノ料トナス、當時モ昔ノ如ク、諸公卿ハ三大臣納言參議辨官諸省ノ卿輔以下ニ任スルコトナレモ、何ツレモ虛官空位ニシテ、事務ヲ執ル者ハナク、又執ルヘキ事務モ無カリシナリ、但關東ヨリ奏上スル公事ハ所司代ヨリ傳奏ヲ經テ關白ノ上奏スル所トセリ、而シテ禁裡ノ諸事及ヒ武家ノ政事等ハ關白、傳奏、議奏ノ三職ヲシテ掌ラシムルコトニテ、他ノ公卿ハ一切之ニ關スルヲ得サル規定ナリ

(五) 後光明帝ノ英明ヲ畧述セヨ

謂ク後光明帝英明宏度ニシテ學ヲ好ミ、嘗テ侍講ニ勅シテ程朱ノ新註ヲ進メシム、帝平素詩賦ヲ好ミ、和歌ヲ疎斥ス、嘗テ後水尾上皇ニ觀ル、上皇曰ク聞ク帝詩賦ヲ好ンデ和歌ヲ詠スルヲ好マズト、然レモ和歌ハ吾朝ノ故典ニシテ學ハサルベカラスト、帝乃チ和歌十首ヲ献ス、上皇未タ讀ミ了ラサルニ又十首ヲ詠進ス、上皇歎ジテ曰ク、斯ノ如クナラハ學バサルモ可ナリト、帝又タ擊劔ヲ好ム、所司代板倉重宗奏シテ曰ク、擊劔ハ天子ノ事ニアラス、幕府之ヲ聞ク片ハ必ス喜ビスト、帝聽カス、重宗復奏シテ曰ク、陛下之ヲ停メズンハ臣以テ幕府ニ謝スルニ辭ナシ、腹ヲ割テ死スルノ外ナキナリト、帝曰ク朕未タ武人割腹ノ實狀ヲ見ズ、宜ク壇ヲ南殿ニ築テ自裁スベシ、朕臨ンデ之ヲ視ント、重

宗慚謝ス、又嘗テ短襖ヲ好マズ、烏帽素襖ノ舊別ニ復セント欲シテ曰ク、夷狄ト雖モ猶ホ袖アリ、吾朝何ソ此凶服ヲ用ント、又孔子ノ廟ヲ建設シ大學寮ヲ復セント欲シ、共ニ果サスシテ早ク崩シ玉フ時ニ承應三年ナリ

(二六) 魚戸八兵衛火葬ヲ諫止スルノコトヲ問フ

謂ク承應三年、後光明帝崩ス、帝英明ニシテ常ニ復古ノ志アリ、未タ果サスシテ崩ス、世人甚タ悼惜ス、或ハ曰ク幕府帝ノ聰明ヲ忌憚シ、密ニ之ヲ毒セリト、之ヨリ先キ持統常ノ喪ニ始メテ火葬ヲ行ヒシヨリ世々相承ケ復タ葬埋スルモノナシ、帝毎ニ之ヲ歎シ、亦將ニ詔シテ其典ヲ革メントス、其崩スルニ及テ朝議尙ホ舊章ニ依リ、火葬ノ設ケヲ爲ス、茲ニ魚戸八兵衛ナルモノアリ、常ニ宗學ヲ好ム其常ニ宮庖ニ出入スルヲ以テ竊ニ之ヲ聞キ、大ニ歎シテ曰ク、噫呼天子固ヨリ浮屠ノ法ヲ惡ミ火葬ヲ廢セント欲ス、而シテ今ヤ其大行ヲ奉送シテ其惡ム所ニ從テ、之ヲ何トカ謂ハン、臣敢テ之ヲ諫ム、聽レズンハ死アルノミト、乃チ行宮及ヒ攝政關白ノ家ニ奔走シ、號泣シテ退カス、朝廷其忠ニ感シ、遂ニ葬埋ノ典ヲ復セリ

(二七) 我國洋學ノ起原ヲ問フ

謂ク洋學ハ將軍家宣ノ時、新井白石采覽異言、西洋紀聞等ヲ著ハシ、始メテ阿蘭學ヲ開ク、

尋テ吉宗ノ時青木教書ニ命シ長崎ニ至リ、蘭人ニ就テ蘭書ヲ研究セシム、本邦人ノ洋籍ヲ讀ムハ是ヲ濫觴トス、其後前野良澤、杉田玄白、桂川甫周、大槻玄澤皆皆ナ蘭學ヲ以テ名聲アリ、而シテ其徒日ニ進ミ、天文、地理、數理、醫術譯書世ニ續出ス、尋テ幕府翻譯局ヲ設置シ、筒井政憲、川路聖謨、大久保忠寬等ヲシテ其事務ヲ總理セシメ、又古賀謹一郎ヲ頭取ニ任ス、是ヨリ洋學ノ研究漸々發達セリ

(二八) 和國海外ト交通セシ起原沿革ヲ問フ

謂ク我國ノ海外諸國ト交通ヲ始メシハ葡萄牙ヲ以テ蒿矢トス、尋テ佛英魯等漸次交通ス、天文中葡國島銃及ヒ天主教ヲ傳フ、爾後九州中國京畿ニ傳教セシモ、豐臣氏之ヲ嚴禁セリ、徳川天下ニ霸タルニ至ツテ田中莊助幕府ニ請テ西班牙國ニ航シ、歸朝ノ日五色ノ羅紗及葡萄酒ヲ家康ニ獻ス、家康是ヨリ各國ト通商ヲ開クノ意アリ、伊達政宗名ヲ奉教ニ托シテ、其臣支倉常長ヲ呂宋嶋ニ遣ハシ、又羅馬ニ遣ハシ、其政治風俗ヲ窺ハシム、

伊勢國ノ山田長政暹羅ニ航シ、國王ヲ援ケテ内亂ヲ平ケ、王女ヲ娶リ、代リテ其國政ヲ攝シ、終ニ六昆國ノ王トナル、當時海外ノ往來漸ク盛ナラントス、會々長崎蘭人變ヲ上テ曰フ、耶蘇教陽ニ布教ヲ名トナシ、其實異志ヲ抱ク、日本ニ利アラザルナリト、是ニ

於テ幕府西教ヲ嚴禁シ、西班牙、及葡萄牙人ヲ逐ヒ、獨リ支那及蘭ノ互市ヲ許ス、其後島原ノ亂アリシヨリ益々耶蘇教ノ禁ヲ嚴ニシ、遂ニ海外渡航ヲ止メ船舶ノ制ヲ定メテ大船ヲ造ラシメズ、是ヨリ海外交通ノ道全ク絶ヘタリ

(二九) 琉球征伐ノ始末ヲ問フ

謂ク徳川氏既ニ天下ヲ一統シ、使ヲ朝鮮ニ遣ハシテ好ヲ通ス、又島津氏ヲシテ琉球ヲ討チ降シテ附庸ト爲シ、永ク入貢セシム、是ヨリ先キ琉球久シク朝貢ヲ欠キ、徳川氏之ヲ召セテ來ラス、島津氏幕府ニ請フテ其臣新納一氏及樺山久高ヲ遣ハシ、沖繩那覇ニ入り王城首里ヲ陷レ、島主尙寧ヲ擒ニシ、全嶋ヲ平定セリ、家康其地ヲ島津氏ニ與ヘ屬部ト爲サシム、爾來我國ノ版圖西南海ニ擴マレリ、後明治五年ニ至リ、其王ヲ華族ニ列シ、尋テ藩ヲ廢シテ沖繩縣ヲ置ク、

(三〇) 將軍綱吉時代ノ出來事ヲ擧ケヨ

謂ク綱吉ハ家光ノ子家綱ノ弟ナリ家綱薨スルニ及ンテ其職ヲ繼ク、綱吉性學ヲ好ミ儒臣ヲ召シテ經籍ヲ講セシメ、大ニ文教ヲ興起ス、綱吉子ナシ、僧隆光説テ曰ク、人ノ嗣ナキハ前生多殺ノ報ナリ、宜シク殺生ヲ禁スヘシ、又將軍生年戌ニアリ、最モ犬ヲ愛スヘシ、綱吉之ヲ信シ、嚴ニ殺生ヲ禁シ、所在群犬ヲ養ハシメ、苟モ之ヲ殺傷スルモノアレ

バ處スルニ嚴罰ヲ以テス、民之ヲ苦ミ、綱吉ヲ評シテ犬公方ト云フ、綱吉柳澤吉保ノ妾ヲ愛シ、子ヲ生ム、遂ニ吉保ヲ擢テ、老中ト爲シ、其嗣家重廢シ、甲駿百萬石ヲ以テ吉保ヲ封セントス、議畧等定マル、綱吉ノ夫人入テ之ヲ諫ムレモ聽カス、夫人綱吉ヲ寢室ニ刺シテ自殺ス、

(三一) 八代將軍ノ治蹟如何

謂ク七代將軍家繼在職四年ニシテ薨ス、嗣ナシ、是ニ於テ吉宗紀州家ヨリ入テ將軍ニ任セラル、吉宗ハ徳川中興ノ英主ニシテ最モ治體ニ通ス、銳意ヲ以テ前代ノ弊政ヲ改革シ、節儉ヲ行ヒ諫言ヲ求メ、賢ヲ擧ケ能ニ任シ、刑ヲ寬フシテ仁ヲ施シ、又文學技藝ヲ勸ム、大岡忠相ヲ擢テ、江戸奉行トス、此他儒人及ヒ武技ニ長スルモノ濟々トシテ出ツ、始メ家光ノ薨セシヨリ、幕政漸ク替廢シ、弊政頗ル多カリシモ、吉宗ノ時ニ到テ綱紀大ニ張リ、治蹟ノ見ルヘキモノ多シ、

(三二) 各藩々政ノ得失如何

謂ク徳川氏封建ノ制ハ四家尾記水越譜代、外様、ト爲シ、萬石以上大名ト稱シ、大藩ノ中十八家ヲ國主ト稱シ、其次ヲ城主ト稱シ、其次ヲ領主ト名ク、其數合計二百八十藩ニ及ベリ、斯ノ如キ各藩ノ中ニ就キ藩政ノ得失ヲ述ブレハ

尾張藩主德川義直ハ其性温良恭儉ニシテ學ヲ好ミ、孔廟ヲ設ケ釋奠ノ儀ヲ行ヒ、禮樂ノ諸器ヲ備ヘ、經書一千部ヲ置クカ如キ、文物ノ隆盛他ニ比ナシ
 備前藩主池田光政ハ英明ニシテ學ヲ好ミ、熊澤蕃山ヲ擧ケテ藩政ヲ委テ、每郡ニ學校ヲ設ケ普ク子弟ヲ教育シテ孝義ヲ表シ、利水ヲ謀リ倉廩ヲ設ケ、豫メ凶荒ニ備フ、故ニ封内大ニ治マレ
 水戸藩主德川光圀ハ天資英邁ニシテ學ヲ好ミ、嘗テ伯夷傳ヲ讀ミ舊史ノ闕文ヲ慨キ、彰考館ヲ置キ、名儒ヲ招聘シ、奏請シテ御府ノ秘書ヲ出シ、天下ノ逸書歷朝ノ實錄ニ依リテ、大日本史二百四十卷ヲ著ハス、又禮儀類典ヲ撰ンデ之ヲ上皇ニ獻ス、光圀平素帝室ヲ崇尊シ、忠臣ノ事蹟湮滅ニ歸スルヲ慨歎シ、楠正成ノ墳墓ヲ修シ碑石ヲ造リ、嗚呼忠臣楠子之墓ト云フ、世人以テ義舉ト爲ス、其國政ヲ執ルヤ勵精治ヲ圖リ、奢侈ヲ禁シ、稅斂ヲ薄フス、卒スルニ及ンデ私ニ諡シテ義公ト曰フ、
 加賀藩主前田綱紀ハ庶物類纂編纂ノ事ヲ其臣稻生宣義ニ命ス、宣義本草物産ノ學ニ長スルヲ以テ普ク之ヲ搜探シ、編シテ三百六十二卷ノ大部ヲ成シ、之ヲ將軍吉宗ニ獻シ、吉宗又丹羽貞機義宣ノ門人ニ命シテ續輯セシメ、正續併セテ一千五十四卷品類三千四百種ノ多キニ達セリ

酒井忠勝ハ性恭謙ニシテ三十餘年間幕府ノ元老ヲ以テ樞機ヲ掌ル、家光嘗テ忠勝ノ封ヲ増給セントス、忠勝固辭シテ曰ク、古來政ヲ執ルノ臣厚祿ヲ食ムトキハ必ス驕奢ヲ極ム、驕奢ヲ極ムルハ必ス覆墜ス、臣ニシテ縱令恭謙ヲ守ツテ天命ヲ終ルモ、厚祿ノ爲メニ子孫禍ヲ招クヲナシトセスト、此一言ヲ以テ其人ノ性行ヲ知ルニ足レリ、
 抑柳澤吉保ハ將軍綱吉ノ寵臣ニシテ一時政權ヲ握ル、故ヲ以テ名士ヲ招致ス、就中荻生徂徠、細井知慎ノ如キハ著名ナリ、知慎勤王ノ志深ク曾テ吉保ニ歷朝ノ山陵ヲ修メンコトヲ勸告シ、以テ幕府ニ稟請セシメ、而シテ山陵ノ境域ヲ分明修繕セリト、芳志千古ノ人ト云フヘシ

(三) 幕府時代學士ノ高名ナルモノヲ問フ
 謂ク當時文學ノ士各地ニ輩出シ、其最高名ナル者ハ石川丈山、山崎闇齋、安積澹泊、中江藤樹、三宅觀瀾、伊藤仁齋、其子東涯、荻生徂徠、太宰春臺、熊澤蕃山、山縣周南、木下順庵、新井白石、室鳩巢、柴栗山、古賀精里、尾藤二洲、佐藤一齋等アリテ漢學ヲ以テ聞ユ、又國學ニテハ北村季吟、荷田東滿、其子在滿、加茂真淵、本居宣長等アリ、又醫者ニシテ博學一世ヲ獲フモノハ塙保己一ナリ、天明年中群書類從六百三十五卷ヲ輯ム、

(二四) 寛文ノ治トハ如何

謂ク天明六年家治薨シ、家齊一橋ヨリ入テ職ヲ繼ク、松平定信(後チ樂翁ト號ス)ヲ擧ケテ老中ト爲ス、定信首トシテ前代ノ弊ヲ改メ吉宗ノ遺法ヲ興張シ、節儉ヲ守リ武事ヲ修メ、人材ヲ擧ケテ文教ヲ興セシヲ以テ、天下大ニ治平ヲ得タリ、後世之ヲ稱シテ寛文ノ治ト云フ

(二五) 尊王家海防家ノ重ナル人物ヲ問フ

謂ク徳川ノ初世ニ於テ水戸黄門大ニ尊王ヲ唱ヒ、大日本史ヲ修撰シ、南北ノ兩朝正閏ヲ斷決シ、南朝ノ忠臣ヲ賞揚ス、下テ寛政年間ニ上野ノ處士高山彦九郎ト云フモノアリ、又下野ノ人ニ蒲生君藏ト云フモノアリ、又同時ニ仙臺林子平ト云フ者アリ、共ニ希世ノ尊王愛國者アリ

(二六) 高山彦九郎ノ事ヲ問フ

謂ク彦九郎名ヲ正之ト稱ス、常ニ武臣政權ヲ恣ニシ、王室ノ萎靡振ハザルヲ憤リ、海内ヲ蹴涉シテ天下ノ志士ヲ勤奨ス曾テ京都ニ上リ一日五條橋ヲ過キ、遙ニ皇居ヲ拜跪シテ曰ク、艸莽ノ臣正之ト、路人見テ狂トナスモ正之意トセズ、又宇治平等院ニ詣リ足利尊氏ノ墓ヲ鞭ツテ數百鞭、辭氣激昂人ヲ感動ス、後筑後ニ遊ビ遂ニ自殺ス、人其故ヲ知ルモノナシ、

(二七) 蒲生君藏ノ事ヲ問フ

謂ク君藏又ハ君平ト云フ、下野宇都宮ノ人ナリ、慷慨ニシテ奇節アリ、常ニ朝威ノ地ニ墜ツルヲ嘆シ、今書山陵志等ノ書ヲ著ハシテ尊王ノ大義ヲ唱フ、當時聞クモノ皆耳ヲ掩フ、是ヨリ朝野王室ト武家トノ名分ヲ論スル者多キヲ見ルニ至ル

(二八) 林子平ノ事ヲ問フ

謂ク子平ハ仙臺ノ人幼ニシテ儻大志アリ、長スルニ及ンテ四方ニ周歴シ、長崎ニ至リテ海外ノ事情ヲ聞キ、切ニ其來寇ニ備フベキノ必要ヲ論シ、三國通覽、海國兵談等ヲ著ハシ、次テ海防攻守ノ策ヲ唱フ、然レモ世人永ク太平ニ慣レテ此事ヲ信セス、幕府又海外ノ事ヲ論スルヲ罪シテ、遂ニ書ヲ燬キ子平ヲ禁錮ス、子平一首ノ歌アリ

家もなし親なし子なし板木なし

金もなけねど死にたくもなし

後果シテ魯人ノ邊海ヲ窺フニ及ンテ人皆ナ其先見ノ明ナルニ服セリ、已上ノ三人ヲ寛政ノ三奇人ト稱ス、昨明治二十四年右三人へ正四位ヲ贈位アリタリ

(二九) 赤穂ノ變ヲ問フ

謂ク元祿十四年綱吉勅使ヲ城中ニ延ク、赤穂ノ城主淺野長矩、吉良義英ヲ撃テ之ヲ傷ク
 綱吉長矩ニ死ヲ賜ヒ、赤穂ノ五萬石ヲ沒收ス、初メ勅使ノ江戸ニ至ルヤ、綱吉長矩及ヒ
 伊達宗春ヲシテ館待ノ事ヲ掌ラシム、長矩其禮式ヲ義英ニ問フ、義英賄ヲ遺ラザルヲ以
 テ指授甚タ疎ナルノミナラス、極メテ之ヲ辱カシム、長矩憤激ニ堪ヘス、刀ヲ拔テ義英
 ヲ傷ク、綱吉其不敬ヲ罪シテ長矩ニ死ヲ賜フ、長矩ノ家臣大石良雄等四十餘人相盟ヒ、
 明年十二月十四日夜大雪ニ乘シテ義英ノ邸ヲ襲ヒ、其首ヲ馘シテ長矩ノ墓ニ供ジ、即チ
 自首ス

(三〇) 魯人北邊ニ寇スル概畧如何

謂ク文化元年魯西亞ノ使節レサノツト來テ通商ヲ求ム。幕府之ヲ許サス、魯之ヲ怨ミ其
 後蝦夷ニ來寇スル一連年、文化八年我戎兵夷賊八人ヲ擒ニス、是ニ於テ彼來リ謝シテ曰
 ク、前年來貴邊ヲ暴掠セシハ皆兇徒ノ所爲ニシテ國王ノ知ラサル所ナリト、幕府其八人
 ヲ赦ス、是ヨリ邊寇且ク止ミス、

(三一) 仙石騷動トハ何ソヤ

謂ク天保二年出石ノ城主仙石久利尙幼ニシテ父久道ノ封ヲ繼承ス、然ルニ老
 臣仙石親友利久ノ叔父久利ノ繼承スルヲ欲セス、己ノ子親定ヲ立テント欲シ、久道ヲ毒殺シ、

久利ヲ江戸ノ邸ニ刺サントス、其臣神谷轉ツダ之ヲ幕府ニ訴フ、幕府久利ノ封ヲ削リ、親友
 等ヲ誅ス、之ヲ仙石騷動ト云フ

(三二) 上杉治憲ノ治蹟ヲ問フ

謂ク米澤ノ藩主上杉治憲賢明ニシテ仁政ヲ布ク、細井德民尾張人ヲ招聘シ、封内一般ニ教
 化ヲ布ク、又倉廩ヲ設ケテ二年間凡ソ十五萬人ノ食ニ供スヘキ米穀ヲ貯ハフ、後チ天明
 年間太凶荒ノ際獨リ米澤封内ノ人民一人餓死スル者ナカリシト云フ

(三三) 大鹽ノ亂トハ何ソヤ

謂ク天保八年大鹽平八郎亂ヲ爲ス、平八郎博識ニシテ陽明學ニ精シ、大坂奉行ノ屬吏ト
 ナリ、妖巫姦髡賊吏ノ獄ヲ斷ス、是ヨリ名大ニ著ハル、安政六年以來諸國大ニ飢饉ス、
 是ニ於テ藏書ヲ鬻キ以テ之ヲ賑卹シ、又奉行跡部良弼ニ説キ救恤センコトヲ請フモ聽カ
 ス、平八郎大ニ怒リ、其子格ト黨與百數十人ヲ帥ヒ、巨礮ヲ發シ、東西ノ吏房及ヒ天滿
 ヲ焚キ、將ニ府城ヲ襲ヒ姦吏ヲ殲サントス、城代土井利位兵ヲ發シテ之ヲ伐ツ、平八郎父
 子敗レテ自殺シ、事平ク、或ハ云フ平八郎死セス薩摩ニ走ルト

(三四) 米艦渡來ノ始末如何

謂ク嘉永六年米國ノ水師提督ペルリ軍艦四隻ヲ率井テ相摸ノ浦賀ニ來リ國書方物ヲ呈シ

通好互市ヲ乞フ、物情恟々幕府急ニ列藩ニ令シテ沿海ノ守備ヲ脩メ、日ニ和戦ノ可否ヲ議ス、議未タ決セス、幕府明年ヲ約シ之ヲ還サシム、尋テ安政元年ベルリ再ビ軍艦七隻ヲ率ヒテ浦賀ニ來リ強請シテ止マス、是ニ於テ幕府下田、箱館、長崎ノ三港ニ碇泊シ、薪糧ヲ給與スルヲ許セリ、次テ魯、英、和三國ニ亦之ヲ許ス

(三五) 假條約訂結ノ始末如何

謂ク安政四年ベルリ來リ將軍ニ謁シ書ヲ呈センヲ請フ、家定之ヲ延見ス、時ニベルリ訂約ヲ督促シテ曰ク、英佛既ニ支那ニ勝チ、勢ニ乘シテ來リ迫ル復タ米人恭順ノ比ニアラス、貴國之ヲ如何セント欲ス、然レ厄速ニ條約ヲ定メ印信ヲ給ハ、業ニ己ニ同盟國タルヲ以テ、我能ク二國ヲ諭シ、圖ルニ患ナキヲ以テセン、否ラザレハ禍測ラレズト、幕府大ニ怖レ、勅裁ヲ得ズシテ、俄ニ横濱、長崎、箱館、兵庫、新潟ノ五港ヲ開キ、以テ互市ノ埠頭ト爲シ、而シテ江戸ニ全權公使ヲ置キ假條約ヲ締結ス、尋テ幕府和蘭ノ舊約ヲ改修シ、魯英佛亦同ク假條約ヲ結フ

(三六) 安政ノ獄トハ如何

謂ク外交ノ事起リシヨリ、幕府勅裁ヲ經ズシテ外國ト條約ヲ締結セルヲ以テ、志士四方ニ群起シ、輿論大ニ之ヲ咎メ、尊攘ノ說四方ニ起リ、天下ノ人心恟々タリ、是ヨリ先キ

德川齊昭攘夷ノ行ハレサルヲ憤リ、遂ニ幕議ニ參セス、密ニ其議ヲ京師ニ奏ス、帝密勅ヲ賜ヒ、外夷ノ事ヲ處分セシム、大老井伊直弼其擅ニ京師ニ通スル以テ罪トシ、奏シテ左大臣近衛忠烈、右大臣鷹司輔烈、内大臣三條實萬等ヲ幽シ、遂ニ齊昭ヲ禁錮シ、其子慶篤、慶喜、及山内豐信等ヲ幽シ、尊攘說ヲ唱フル士安島信立、飯泉喜内、橋本左内賴飼吉左、梅田義賢、賴三樹等數人ヲ殺シ或ハ流ニ處ス、之ヲ安政ノ獄ト云フ

(三七) 公使ヲ外國ニ派遣スルノ始メヲ問フ

謂ク萬延元年、幕府外國奉行村垣範正新見正興ヲ修信使トシテ始メテ米國ニ派遣ス、又英、佛、蘭、魯ノ各國ニ修信使ヲ遣ハシテ各條約ヲ交換ス、尋テ葡萄牙、孛漏生、瑞西、白耳義、伊太利、丁抹ノ諸國貿易ヲ請フ、幕府悉ク之ヲ允許ス

(三八) 德川時代ノ刑法如何

謂ク元和元年公家法度、武家法度ヲ撰定スレモ是ハ法令迄ニテ刑法ニアラス、寛永中始メテ評定所ヲ設ケ奉行ヲ置キ、訟獄ノ事ヲ掌ラシム、將軍吉宗ノ時儒臣ヲ延テ古律ヲ詳明シ、明律ヲ參酌シテ時宜ニ適セシム、元文中ニ至リテ大成セリ、其刑名左ノ如シ

正刑ノ名

敲 二等アリ

追放 六等アリ

遠島 伊豆七島、薩摩五島、肥前天草、隱岐、壹岐

死罪 斬、火、獄門、磔、鋸挽、

屬刑ノ名

晒

入墨

闕所

非人手下

閏刑ノ名

逼塞

士族

閉門

蟄居

改易

切腹

呵責

庶人

過料

戸

手錠

晒

僧徒

追院

搦

婦女

剃髮

奴

其他無籍人ノ犯徒決放ノ後再犯ノ嫌疑アルモノハ、佐渡佃島ノ兩處ニ配シテ徒役ニ服セシム

(三元) 赤間關ノ償銀トハ何ソヤ

謂ク長藩ノ主毛利慶親部兵ヲ發シテ下關海峽ヲ戍ル、會々英米蘭佛四國ノ兵、海峽ヲ過ク、成兵砲撃シテ之ヲ傷ク、元治元年八月四國連合シテ赤間關ニ來リ戰ヒ、上陸シテ火ヲ縱ツ、長藩ノ成兵苦戰三日ニシテ之ヲ退ク、既ニシテ征長ノ幕軍國境ニ逼ルヲ以テ長藩乃チ四國ト和ス四國幕府ニ逼リテ償銀三百萬元ヲ出サシム、之ヲ赤間關ノ償銀ト云フ、

(四〇) 櫻田ノ變トハ如何

謂ク萬延元年三月、水戸藩士佐野光明、黒澤忠三、齋藤周徳、薩藩ノ有村兼清等十七人、大老井伊直弼ヲ櫻田門外ニ要撃シテ之ヲ殺ス、光明等老中脇阪氏ノ邸ニ自首シ罪ヲ請フテ上書ス、其略ニ曰ク、井伊中將幼主ヲ狹ミ、私意ヲ抱テ有司ヲ黜陟ス其罪一ナリ、苞苴私謁至ラザル所ナシ其罪二ナリ、柳營羽翼ノ良將ヲ斥ク其罪三ナリ、間部閣老ヲ噉シ九條殿下ヲ誣誤シ、廟堂輔弼ノ名卿ヲ幽ス、其罪四ナリ、洋夷ノ虚喝ヲ懼レ、勅允ヲ得スシテ檀ニ條約ヲ結ブ其罪五ナリ、凡ソ斯ノ五罪ハ神人共ニ容レサル所、故ニ臣等天ニ代テ之ヲ誅ス、固ヨリ大府ヲ犯スニ非サルナリト、後皆ナ刑ニ死ス

(四一) 和宮釐降ノ所以如何

謂ク文久元年、幕府奏請シテ皇妹親子内親王(和宮ト云フ)ヲ將軍家茂ニ配ス、是レ公武ノ調和ヲ表シテ攘夷ノ功ヲ遂ント欲スルノ意ニ出ツルナリ

(四二) 坂下門ノ變トハ何ソヤ

謂ク文久二年、下野ノ人甲田通植等老中安藤對馬ヲ坂下門外ニ要撃シ、輿ヲ刺シ脊部ヲ傷ク、時ニ從者山田彦八等拒キ戰ヒ、對馬間ヲ得テ脱ル、通植等六人はニ殪ル、將軍家茂大ニ餘黨ヲ索メ、兒島強介、大橋順藏等獄裏ニ死ス、對馬又々老中ヲ罷メラル、是ヨ

リ幕府ノ威權大ニ衰フ、

(四三) 勅使東下ノ始末ヲ問フ

謂ク文久二年、勅使大原重徳詔ヲ齎シテ東下ス、島津久光士卒六百人ヲ率井テ陪從ス、勅ニ曰ク、宜ク諸侯ヲ率井テ入朝シ、内外ノ事宜ヲ議決スベク、宜ク豊臣大閣ノ故典ニ依リ、五大藩ヲ選ビ、五大老ト爲シ、以テ國政ヲ諮詢スヘク、宜ク一橋慶喜ヲ以テ將軍ノ補佐ト爲シ、松平慶永ヲ執政ト爲シ、各々戮力協心以テ中外ヲ指揮スベク、朕ガ慮ル所ハ斯ノ三事ニ在リ、審議シテ之ヲ決セヨト、家茂謹テ旨ヲ奉ズ、乃チ諸侯會同ノ期ヲ延シテ三年ニ一觀ト更ヌ、在府百日ヲ限リ諸侯妻子國ニ就クヲ允ス、是ヨリ江戸ノ繁華忽チ衰フ、

(四四) 生麥ノ變トハ何ソヤ

謂ク島津久光勅使大原重徳ニ從テ京師ニ歸ルヤ、途武藏ノ生麥村ヲ過グ、會、英人馬ヲ馳テ久光ノ前驅ヲ衝ク、從者怒テ之ヲ斬ル、是ニ至リ英國幕府ニ向テ其價金四十五萬弗ヲ、薩藩ニ向テ十萬弗ヲ要求ス、幕府倉皇遂ニ其要求ニ應ス、既ニシテ英國公使餘ノ價金ヲ要求セン爲メニ軍艦七隻ヲ以テ鹿兒島灣ニ來ル、時ニ薩兵大風雨ニ乘シ急ニ之ヲ砲撃ス、戰頗ル激烈ナリ、己ニシテ英艦悉ク去リ、又再舉ヲ圖ル、後薩藩價金三萬弗ヲ拂ヒ事竟

ニ止ム、

(四五) 征長ノ役ヲ問フ

謂ク長藩屢々攘夷ノ親征ヲ促カス、浪士亦大和ニ幸センコトヲ請フ、朝議之ヲ納ル、偶々
 廷臣之ヲ拒ムモノアリ、因テ命シテ長藩ノ親兵ヲ停メ罪ヲ三條、東久世、壬生、四辻、
 錦小路、澤等ノ七卿ニ歸シ、其職ヲ免ス、長人乃チ兵ヲ收メテ國ニ歸リ、七卿亦長門ニ
 下ル、既ニシテ長人等君側ヲ清ムルヲ名トシ、元治元年福原越後ヲ將トシテ、京師ニ入
 ル、會津桑名等ノ兵拒キ戰テ之ヲ敗ル、之ヲ蛤御門ノ戰ト云是ニ於テ朝廷長藩主毛利敬
 親父子ノ官爵ヲ削リ、將軍家茂ヲシテ之ヲ討タシム、徳川慶勝總督トナリ、西南諸藩
 兵ヲ發シテ長門ノ境ニ莅ム、敬親其老臣福原越後等ノ首謀ヲ斬リ、以テ罪ヲ謝ス、諸軍
 解テ還ル、長卿士高杉晉作之ヲ憤リ、其黨ヲ集メテ萩城ヲ襲ヒ、其主ヲ奉シテ山口ニ據
 ル、始メ長人薩藩ト隙アリ、是ニ至リ西郷隆盛使ヲ桂小五郎ニ遣ハシ、兩藩合從シテ以
 テ幕府ヲ滅センコトヲ議ス、薩長ノ約遂ニ成ル、幕府之ヲ覺ラス、征長ノ師ヲ發シテ其境
 土ヲ襲フ、連戦利アラヌ、七月將軍家茂薨ス、乃チ詔シテ西伐ノ兵ヲ輟メ、慶喜ヲシテ
 將軍ノ職ヲ襲カシム、征長ノ師竟ニ其功ナキヨリ幕府ノ威勢益々衰へ、天下ノ諸侯離反ス
 ルモノ多ク、尋テ天皇崩御シ玉フ

(四六) 水戸藩ノ兩黨相爭フ始末如何

謂ク元治元年、水戸ノ藤田、結城ノ二黨相爭フ、初メ徳川齊昭、藤田彪等ヲ拔テ藩政ヲ
 釐革ス、老臣結城寅次等之ヲ忌ム、齊昭乃チ寅次ヲ黜ク、故ヲ以テ怨ヲ結ヒ、齊昭不良
 フ圖ルト誣告ス、幕府乃チ齊昭及ヒ彪等ヲ幽ス、是ヨリ藩論ニ派ニ分レ、遂ニ黨ヲ結フ、
 結城派ヲ奸黨ト曰ヒ、藤田派ヲ正義黨ト曰フ、齊昭卒スルニ及デ、奸黨頗ル正義黨ヲ排
 ス、是ニ至リ藤田信義、齊昭ノ遺旨ヲ承クト稱シ、太平、筑波ノ兩山ニ據ル、結城黨幕
 命ヲ奉ジテ之ヲ討ツ、武田耕雲齋正義黨ヲ援ケテ那珂瀨ヲ保ツ、戦利アラヌ、遂ニ圍ヲ
 破リテ西走シ、京師ニ入テ事ヲ訴ント欲ス、道凍テ通セス乃チ轉シテ越前ニ抵ル、時ニ
 加賀ノ兵越前ニ扼ス、因テ降ヲ乞ヒ、且ツ賊名ヲ除カンコトヲ請フ、加賀藩狀ヲ幕府ニ告
 ク、幕府命シテ之ヲ敦賀ニ幽シ、明年二月耕雲齋以下ハ百餘人ヲ敦賀ニ斬ル

(四七) 天誅組トハ如何

謂ク三河ノ人松本衡、備前ノ人藤本眞金、土佐ノ人吉村義卿等、中山忠光ヲ奉シ兵ヲ吉
 野ニ擧ケ天誅組ト稱ス、初メ大和行幸ノ議定マルヤ、衡等大和ニ入り、五條ノ代官鈴木
 源内ヲ殺シ、其民ヲ諭スニ親征討幕ノ意ヲ以テシ、進テ高取城ヲ攻ム、城將植村某拒テ
 之ヲ却ク、乃チ天河ニ據ル、幕府近畿諸藩ニ命シ之ヲ討タシム、九月衡等敗死シ、忠光

長門ニ奔ル

(四八) 徳川慶喜大政ヲ奉還スルノ始末如何

謂ク慶應三年十月徳川慶喜上表シテ政權ヲ奉還センコトヲ請フ、朝廷之ヲ許ス、之ヨリ先キ諸國ノ志士皆ナ鎖國攘夷ノ論ヲ唱フルモノ、皆ナ尊王討幕ノ説ニ變シ、皇室ヲ戴キ以テ全國ノ政令ヲ一新セントス、土佐ノ藩主山内容堂書ヲ以テ慶喜ニ政權ヲ奉還セシム慶喜列藩ヲ會シ之ヲ諮詢ス、薩藩小松帶刀、土藩後藤象次郎等之ヲ賛シ、遂ニ意ヲ決シテ將軍職ヲ辭ス、家康幕府ヲ開キシヨリ是ニ至ルマデ、十五代二百六十五年ナリ

(四九) 貨幣ノ沿革ヲ問フ

謂ク貨幣ハ既ニ中古ヨリ發行セリ、足利氏ノ時ハ多ク海外ノ錢貨ヲ通用セシガ、天正年間ニ至リテ既ニ大判小判ノ鑄造アリ、而シテ大判ノ多ク行ハレシハ豊臣及ビ徳川氏ノ時ナリ、又文録中ニ文録通寶ノ錢ヲ行ハレ、慶長年中ニハ一分判慶長小判、慶長通寶アリシガ、元和ニ至リテ之ヲ改鑄セリ、寛永中ニ寛永通寶ヲ鑄行シ、是ヨリ久シク改鑄ノ擧ナク、元録ニ元録ニ朱金ヲ造リ、又安永ニ南鐐ニ朱金ヲ造リ、文政ニ文政二分判一分判一朱金等ノ金貨及ヒ一朱銀ヲ造リ、天保年中ニ天保通寶ヲ造リ、文久ニ文久永寶ヲ造ル、而シテ錢造ノ額ト使用ノ年限ニ定メアルヲ以テ年限滿レハ更ラニ改鑄セシモノナリ、維

新前ハ各藩其領内限リ使用スル所ノ紙幣アリテ通貨ノ不足ヲ補フ之ヲ切手ト稱ス、維新後政府新紙幣ヲ發行シテ悉ク之ヲ交換セリ

(五〇) 徳川氏時代衣食住ノ有様如何

謂ク家屋ハ始メ慶長年中天下諸侯ノ邸宅ヲ江戸ニ築クトキ、門ノ左右ニ伏舎ヲ設ケ或ハ長屋ヲ造リ、黑白丹堊ニテ之ヲ塗レリ、或ハ塗ラザルモノモアリ、始メ公家ノ家ハ檜皮ヲ以テシ、庶民ノ家ハ木若クハ藁ヲ用ヒシモ、後チ瓦ヲ用ユルモノ多ク又柿葺、杉皮葺等モアリ

衣服ハ禮服ニハ素襖、直衣、狩衣、中袴、長袴、又鬘斗目、上下等アリ、羽織ハ原ト風雨ヲ防クニ用タレモ、後禮服トナルニ至レリ、着服ノ制ハ四月ヨリ五月マデ袴ヲ着シ、五月ヨリ八月マデ單衣ヲ用ヒ、九月ヨリ綿人ノ服及ヒ襪ヲ用ヒテ三月ニ至ルヲ式トス、又女服ハ袖及ヒ裾長ク、中以上ノ婦人ハ禮服トシテ襦袢着ス、被衣ハ中以上ノ婦人外出ノ所用ヒシカ、後チ日傘ナルモノ一般ニ行ハレテ廢レタリ

飲食ハ此時代ヨリ三食トナレリ、戰國時代ハ極メテ質素ニシテ粗食ナリシカ、後漸ク美食ヲ好ムニ至リ、魚肉最モ盛ニ行ハレ、調理法モ進歩シ、清酒ヲ造ルコトモ此時ニ始マリ、醬油菓子皆此時代ニ精工ヲ進メリ

(五) 女帝十二代トハ如何

謂ク本朝神武創業以來女帝ノ數凡ソ十二代アリ或ハ角刺女帝ハ歷代ノ内ニ加ヘサルヲ以テ之ヲ省クモアリ、其十二代トハ左ノ如シ

神功、角刺、推古、

皇極、齋明、持統、

元明、元正、孝謙、

稱徳、明正、後櫻町、

(五二) 重祚帝王ノ數ヲ問フ

皇極、齋明、孝謙、

稱徳、

(五三) 贈諡セラレシ十大臣ノ名ヲ問フ

藤原不比等 贈諡文忠公 淡海

藤原良房 贈諡忠仁公 美濃

藤原基經 贈諡昭宣公 越前

藤原忠平 贈諡貞信公 信濃

藤原實賴 贈諡清慎公 尾張

藤原伊尹 贈諡謙徳公 參河

藤原兼通 贈諡忠義公 遠江

藤原賴忠 贈諡兼義公 駿河

藤原爲光 贈諡恒徳公 相模

藤原公季 贈諡仁義公 甲斐

下ニ掲クル國名ハ各自封セラレシ國ナリ

第五編 今世史

(一) 王政復古トハ何ソヤ

謂ク慶應三年十二月徳川慶喜大政ヲ返上セシヲ以テ、朝廷乃チ攝政關白議奏及ヒ征夷大將軍所司代等ノ職ヲ廢シ、新ニ總裁議定參與ノ三職ヲ置キ、乃チ有栖川熾仁親王ヲ以テ總裁トシ、中山忠能、正親町實徳、三條實愛、中御門經之、嶋津忠義、山内豐信ヲ議定トシ、岩倉具視、橋本實梁、岩下方平、西郷隆盛、大久保利通、田中不二麿、後藤象次郎等ヲ參與トナシ、慶喜ニ土地官職ヲ納ムルヲ命ス、蓋中世以降千餘年、攝政關白ハ

人臣ノ極職ニシテ、清和天皇以後ハ藤原氏世々之ヲ襲キ、五攝家世襲ノ職ト爲リ、施政ノ實權殆ント攝關ノ掌裏ニ在リ、文治二年源賴朝全國ノ總追捕使ト爲リ、幕府ヲ鎌倉ニ開キシ以來政權又武門ニ歸シ、攝政關白ノ名アリテ實ナカリキ、然ルニ此時王政ノ時代立歸リ、主權ノ名實供ニ天皇ニ復セリ、世之ヲ稱シテ王政復古ト云フ

(二) 三職八科ヲ分置スル年月如何

謂ク慶應三年十二月九日朝廷大改革ヲ行ヒ、從來ノ官職ヲ廢シテ新タニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置キ、次デ明治元年正月太政官代ヲ置キ、三職ヲ總裁、神祇事務、內國事務、外國事務、海陸軍事務、會計事務、刑保事務、制度事務ノ八科ニ分ツ、又八科ヲ八局ト爲シ、次デ各藩ノ貢士ヲ太政官ニ徵ス

(三) 徳川慶喜京師ヲ犯ス始末ヲ問フ

謂ク明治元年正月會津桑名ノ諸藩士大坂城ニ聚リ、慶喜ニ説クニ薩長ノ士天子ヲ擁シテ已ヲ謀ル、宜シク兵ヲ以テ京師ニ入り、君側ヲ清メラルヘント、慶喜遂ニ意ヲ決シテ之ニ從ヒ、會桑二藩ノ兵ヲ前驅トシ、高松、濱田等ノ諸藩ノ兵ヲ應援トシテ北上ス、兵三萬ト號シ、伏見鳥羽兩道ヨリ進ム、事京師ニ聞ユ、京師震恐ス、乃チ薩長二藩ノ兵ヲ遣リ、兩道ヲ戍ラシム、遂ニ戰ヲ開ク之ヲ伏見鳥羽ノ戰トス、朝廷乃チ嘉彰親王ヲ以テ征討

大將軍トシ、錦旗節刀ヲ賜テ往テ征セシム、連戰四日ニシ幕軍遂ニ崩潰シ大坂ニ走ル、

(四) 幕軍敗北後ハ如何

謂ク徳川慶喜錦旗ノ出ツルヲ聞キ、自ラ大事ヲ誤ルヲ知り、倉皇奏狀ヲ遣シ、松平容保等ト回陽艦ニ搭シ、海路江戸ニ歸ル、官軍既ニ大勝ヲ得、隨テ諸藩皆ナ歸順ス、是ヨリ先キ長崎奉行日田代官等ノ幕府ノ吏胥、幕軍ノ敗亡ヲ聞キ、皆守ヲ棄テ江戸ニ奔ル、故ニ大坂以西ニ一ノ幕軍ナシ、是ニ於テ慶喜以下二十七人ノ官爵ヲ削リ、遂ニ有栖川熾仁親王ヲ征東總督ニ任ス

(五) 五事ノ御誓文ハ如何

謂ク明治元年三月天皇大ニ公卿ノ諸侯ヲ率ヒ、天地神祇ヲ祭リ、五事ヲ誓約シ玉フ、謂ク廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決セム、謂ク上下心ヲ一ニシテ盛リニ經綸ヲ行ハン、謂ク官武一途庶民ニ至ルマデ各々其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マザラシメ、謂ク舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基カム、謂ク知識ヲ世界ニ求め、大ニ皇基ヲ振起スヘシト、因テ詔ス、我國未會有ノ變革ヲ爲サントス、衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨト、

(六) 奥羽連合ノ始末ヲ問フ

謂ク慶喜既ニ大政ヲ奉還セシヨリ幕府諸藩ノ諸藩之ニ不平ヲ唱ヒ、遂ニ慶喜ニ勸メテ兵

ヲ率井テ京師ニ入ラントセシモ、伏見鳥羽ノ敗亡ニ依リ意愈々憤懣ニ堪ヘス、於是奥羽ノ諸藩乃連合結托シテ、王師ニ抗センコトヲ謀ル、而シテ會津其首魁タリ、越後白川是官軍齊シク敵ヲ斃メテ若松城下ニ集ル、九月ニ至リ會津城主松平容保城ヲ致シテ降ヲ乞フ、仙臺南部莊内ノ諸藩モ亦降リ、東北初メテ平定セルヲ以テ十月天皇陛下東京ニ臨幸トシ、群臣ニ命シテ諸藩ノ處置ヲ議シ、會津、仙臺、米澤以下二十三藩主皆ナ死一等ヲ減ジ、各藩ニ幽ス、

(七) 遷都ハ誰人ノ建議ナリヤ

謂ク明治元年三月、參議大久保利通遷都ノ議ヲ建テ、且ツ古來ノ風習ヲ一洗シ、政事簡易ヲ貴ブコトヲイフ、是レ當時ノ卓說ニシテ政畧ノ順當ノ得タルモノナリ、

(八) 徳川慶喜ヲ水戸ニ幽スル始末ヲ問フ

謂ク朝廷徳川慶喜ノ罪ヲ鳴シ、有栖川宮ヲ征東大總督トシ、東山東海及北陸ノ三道ニ先鋒總督兼巡撫使ヲ先發セシム、大總督既ニ駿府ニ至ル、東山東海ノ先鋒總督亦函根碓井ニ及ブ、慶喜江戸ニ在リテ深ク其非ヲ悟リ、屏テ東叡山ニ居ル、其臣山岡鐵太郎單身駿府ニ至リ、西鄉隆盛ニ就キ哀ヲ乞フ、西鄉諾シテ之ヲ遣ル、官軍進テ品川ニ至ル、勝義邦及大久保忠寛再ヒ罪ヲ謝ス、乃チ命シテ攻撃ヲ止ム、尋テ勅使柳原義光等江戸ニ入り、詔ヲ宣

正

シ、慶喜ノ死一等ヲ減シ、命スルニ五事ヲ以テス、謂ク慶喜ヲ水戸ニ幽スヘシ、謂ク江戸城ヲ収ムヘシ、謂ク軍艦銃砲ヲ収ムヘシ、謂ク家臣ヲ退クヘシ、謂ク家臣入犯ノ謀ニ與ルモノヲ處分セヨト、慶喜乃チ詔ヲ奉ス

(九) 箱館ノ役ヲ問フ

謂ク奥羽ノ戰爭起ルヤ榎本武揚等之ニ應セント欲シ、安房ヨリ寒風澤ニ入ル、既ニシテ奥羽平ク、因テ軍艦八隻ヲ率井テ箱館ニ據リ、江差、福山ヲ陥ル、詔シテ海陸二軍ヲ發シテ賊ヲ討チ、江差、福山ヲ復シ、進ンデ矢不來ニ戰ヒ、大ニ之ヲ破ル、官軍復々賊ト箱館灣中ニ戰ヒ、其船艦ヲ殲ス、賊五稜郭及ヒ千代岡辨天ノ二砦ヲ保チ、死ヲ以テ之ヲ守ル、官軍進ンテ之ニ逼リ、二砦相繼テ陥ツ、參謀黒田清隆賊寨ニ到リ、諭スニ順逆ヲ以テセリ、武揚等乃チ軍門ニ降り、遂ニ平定ス

(一〇) 幕兵彰義隊ハ如何ナルコトヲナセシヤ

謂ク慶喜ノ臣屬ニシテ、慶喜謝罪ノ議ニ服セサルモノ兵ヲ募テ彰義隊ト號シ、輪王寺公現法親王ヲ擁シテ、東叡山ニ據ル、氣勢頗ル盛ナリ、是ニ於テ官軍々務長大村益次郎諸軍ヲ勒シ、撃テ之ヲ敗ル、敗兵親王ヲ狹ミ會津ニ逃走ス

(一一) 外國公使謁見ノ事ヲ問フ

謂ク明治元年外國事務局ヲ置キ、各國公使ニ大政復古ノ旨ヲ告ク、因テ英、佛、蘭、米ノ諸公使入朝ス、天皇之ヲ引見シ、賜フニ優禮ヲ以テス、公使悅服シ皆萬歳ト呼ブ、公使ノ謁見ハ是ヲ始メトス

(三) 廢藩置縣ノ事ヲ問フ

謂ク明治二年薩藩土肥ノ四藩主土地ノ私有スベカラス、政權ノ分ツベカラサルヲ以テ上奏シ、版籍奉還ヲ請フ、諸藩モ亦之ニ倣フ、廷議廣ク衆ニ詢ヒ、詔シテ之ヲ許シ、更ニ府藩縣三治一致ノ制ヲ立テ、舊藩主二百七十六人ヲ以テ知藩事ト爲シ、其歲入十分之一ヲ賜ヒ家祿ト爲ス、諸公卿諸侯ノ稱ヲ廢シ、總テ華族ト爲ス、其臣隸ヲ士族ト稱シ、秩祿ヲ受クル各差アリ、明治四年ニ及ンデ、全國ノ屬知事ヲ東京ニ召集シ、親諭シテ其職ヲ解キ藩ヲ廢シテ更ニ縣ヲ置キ、郡縣ノ制始メテ此ニ定マル

(三) 公議所ノ起リヲ問フ

謂ク明治二年三月公議所ヲ東京ニ設ク、當時封建ノ勢ヲ承ケ、列藩互ニ主張シテ藩論相決セス、朝廷之ヲ折衷シ、以テ制度律令ヲ定メント欲ス、仍テ先ツ徵士貢士ノ制ヲ立テ、對策所ニ於テ集議セシム、其策問ハ

一 耶蘇教徒ノ處分

一 德川慶喜謝罪後ノ處置

一 陸海軍制及財政ノ方法

一 列藩ノ訟訴

一 奥羽鎮定後降附人ノ處置

此等ノ議事ニテ定期又ハ臨時ニ開ケリ、後議事取調掛ヲ置キ、山内豐信ヲ以テ總裁トシ、議事ノ體裁ヲ正サシム、明年ノ春車駕東京ニ駐蹕ス、是ニ於テ大ニ會議ヲ興サントス、仍テ詔シテ曰ク

朕將ニ公卿群牧ヲ會シ、博ク衆議ヲ諮詢シ、國家治安ノ大基ヲ建テントス、抑々制度律令ハ政治ノ本、億兆ノ賴ル所、以テ輕ク定ムヘカラス、今ヤ公議所法則畧々既ニ定マルト奏ス、宜ク速ニ開局スヘシ、局中禮法ヲ貴ヒ、協和ヲ旨トシ、心ヲ公平ニ存シ、議事明確ヲ期シ、專ラ皇祖ノ遺典ニ基キ、人情時勢ノ宜ニ適シ、前後緩急ノ分ヲ審ニシ、順次ニ細議シ以聞セヨ、朕親シク之ヲ裁決セン、

(四) 萬民安撫ノ御宸翰如何

謂ク明治元年三月、天皇陛下百官諸侯ト誓ヒ、四方ヲ經營シ、億兆ヲ安撫スルノ宸翰ヲ衆庶ニ示シ玉フ、曰ク

朕幼弱ヲ以テ粹ニ大統ヲ紹キ、爾來何ヲ以テ萬國ニ對立シ、列祖ニ事ヘ奉ランヤト、朝夕
 恐懼ニ堪ヘサル也、竊ニ考ルニ中葉朝政衰テヨリ、武家權ヲ專ラニシ、表ハ朝廷ヲ推尊
 シテ實ハ敬シテ之ヲ遠ケ、億兆ノ父母トシテ、絶テ赤子ノ情ヲ知ルヲ能ハサルヤウ計リナ
 シ、遂ニ億兆ノ君タルモ、唯名ノミニ成リ果、其カ爲ニ今日朝廷ノ尊重ハ古ヘニ倍セシ
 カ如クニテ、朝威ハ倍衰ヘ、上下相離ル、一霄壤ノ如シ、カ、ル形勢ニテ何ヲ以テ天下
 ニ君臨センヤ、今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆一人モ其所ヲ得ザル時ハ、皆朕ガ罪
 ナレバ今日ノ事、朕自ラ身骨ヲ勞シ、心志ヲ苦メ、艱難ノ先ニ立、古ヘ列祖ノ盡サセ給ヒ
 シ蹤ヲ履ミ、治蹟ヲ勤メテコソ、始メテ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タル所ニ背カザルヘシ、
 往昔列祖萬機ヲ親ラシ、不臣ノ者アレバ、自ラ將トシテ之ヲ征シ給ヒ、朝廷ノ政總テ簡
 易ニシテ、如此尊重ナラザルユヘ、君臣親ミテ上下相愛シ、德澤天下ニ浴ク、國威ヲ海
 外ニ輝キシナリ、然ルニ近來宇内大ニ開ケ、各國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ、獨リ我
 國ノミ世界ノ形勢ニ疎ク、舊習ヲ固守シ、一新ノ效ヲ計ラス、朕徒ラニ九重中ニ安居一
 日ノ安キヲ偷ミ、百年ノ憂ヲ忘ル、其ハ、遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱シメ奉
 リ、下ハ億兆ヲ苦シメンコトヲ恐ル、故ニ朕コ、ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業
 ヲ經述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス、親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニハ萬里

ノ波濤ヲ開拓シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カンコトヲ欲ス、汝億兆舊
 來ノ陋習ニ慣レ、尊重ノミヲ朝廷ノ事トナシ、神州ノ危急ヲ知ラス、朕一タビ足ヲ舉レ
 ハ非常ニ驚キ、種々ノ疑惑ヲ生シ、萬口紛紜トシテ朕カ志ヲナサ、ラシムル時ハ是朕ヲ
 シテ君タルノ道ヲ失ハシムルノミナラズ、從テ列祖ノ天下ヲ失ハシムル也、汝億兆能々
 朕カ志ヲ體認シ、相率井テ私見ヲ去リ、公義ヲ採リ、朕カ業ヲ助ケ、神州ヲ保全シ、列
 聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメバ、生前ノ幸甚ナラム、

(二五) 地租改正ノ大要ヲ問フ

謂ク明治六年七月詔シテ租稅ヲ定メ、舊來ノ納米ヲ廢シ、金稅トナシ、新ニ地券ヲ制シ、
 地價ノ高下ヲ立テ、準トシ、地價百分ノ~~三~~ヲ以テ地租トス、其他ノ賦課皆地價ヲ以テ之
 ヲ定メテ、地租三分ノ一ニ過クルコトヲ得サラシム、尋テ地租改正局ヲ置キ、内務卿大久
 保利通ヲ總裁トシ、内務大藏二省ヲシテ、事務ヲ管セシム、十年又地租ヲ減シテ百分ノ
 二分五厘トシ、公費ヲ課スルニ正租五分ノ一ニ過サラシム、此後數年ニシテ改正ノ舉成
 リ、租法一定スルニ至レリ

(二六) 土地ノ種屬ニ幾種アリヤ

謂ク八種トス即チ皇宮、神宮、官廳、官用、公有、私有、除稅地ナリ、後改メテ官有地、

民有地ノ二種トシ、官有地又分テ四種トシ、民有地ヲ分テ二種トス、

(二七) 一世一元ノ制トハ何ソヤ

謂ク明治元年八月天皇御即位九月八日ヲ以テ改元シ、一世一元ノ制ヲ定メ玉フ、舊制ニ依レハ一世ノ間ニ吉凶事變アレハ幾度ニテモ改元ノセラル、制ナルモ、爰ニ至テ一世一改元トナシ、以テ永式トセリ、其詔ニ曰ク、詔體ニ大乙ニ而登位、膺景命以改元、洵聖代之典型、而萬世之標準也、朕雖否德、幸賴祖宗之靈祇承鴻緒、躬親萬機之政、乃改元、欲與海內億兆更始一新、其改慶應四年、爲明治元年、自今以後、革易舊制、二世一元、以爲永式、主者施行、

(二八) 大陽曆頒行ノ年月ヲ問フ

謂ク明治五年十一月九日、詔シテ大陰曆ヲ止テ、大陽曆ヲ用フ、是年十二月三日ヲ以テ六年一月一日ト爲シ、一晝夜ヲ二十四時ト爲シ、神武天皇即位ノ年ヲ以テ紀元ト爲シ、其日ヲ紀元節ト爲シ、天長節ト共ニ祝日トス、其詔書ニ曰ク、朕惟フニ我邦通行ノ曆名大陰ノ朔望ヲ以テ、月ヲ立テ大陽ノ纏度ニ合ス、故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス、置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル、殊ニ中下段ニ掲クル所ノ如キハ、率子妄誕無稽ニ屬シ、人智ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス、蓋シ大陽曆ハ

太陽ノ纏度ニ從テ日ヲ立ツ、日子多少ノ異アリト雖モ、季候早晚ノ變ナク、四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七十年ノ後、僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス、之ヲ太陰曆ニ比スレハ、最モ精密ニシテ、其便不便モ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ、依テ自今舊曆ヲ廢シ、太陽曆ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司其斯旨ヲ體セヨ、

(二九) 服制新更ノ年月ヲ問フ

謂ク明治四年九月、天皇三條太政大臣ヲ召サレ、服制ヲ更メ、風俗ヲ一新シ、尙武ノ國体ヲ立玉フ、其上諭ニ曰ク
朕惟フニ風俗ナル者ハ移換以テ時ノ宜キニ隨ヒ、國体ナル者不拔以テ其勢ヲ制ス、今衣冠ノ制中古唐制ニ摸倣セシヨリ、流レテ軟弱ノ風ヲナス、朕太々慨レ之、夫レ神州武ヲ以テ治ルヤ固ヨリ久シ、天子親ラ之ガ元帥ト爲リ、衆庶以テ其成ヲ仰ク、神武創業、神功征韓ノ如キ決シテ今日ノ風姿ニアラズ、豈一日モ軟弱以テ天下ニ示スベケンヤ、朕今ヤ斷然其服制ヲ更メ、其風俗ヲ一新シ、祖宗以來、尙武ノ國體ヲ立ント欲ス、汝其レ朕カ意ヲ體セヨ

(三〇) 開拓使設置ノ始末如何

謂ク蝦夷ノ地ハ幕府ノ時、函館奉行ヲ置キテ之ヲ治メシメ、奥羽諸侯交代シテ之ヲ守ル、

函館ノ亂平グニ及ビ、朝廷全嶋ヲ收メテ開拓使ヲ札幌ニ置キ、支廳ヲ函館、根室ニ置キ、開拓撫綏ノ事ヲ掌ラシム、後明治十五年ニ開拓使ヲ廢シテ北海道廳ヲ置ク、

(三) 樺太交換ノ事ヲ問フ

謂ク北海道ノ北ニ一大島アリ、樺太ト云フ、其土人南方ニ居ルモノハ日本ニ屬シ、北方ニ居ルモノハ露西亞ニ屬ス、其疆界定マラス、幕府ノ時露國ト約シテ雜居ノ地トス、爾來紛爭絶ユルコナキヲ以テ、明治八年公使榎本武揚ヲ露國ニ派遣シ、千島諸島ヲ露國ヨリ得テ、樺太ト交換セリ、

(三) 明治政府政略中著名ナル事項ヲ列舉セヨ

謂ク第一ハ各藩士ノ常職ヲ解キテ兵權ヲ中央政府ノ一手ニ收メ、華族士族ノ二級ニ分チテ其石祿ヲ金高ニ換算シ、祿ヲ發シテ一時ニ秩祿金ヲ與ヘシ事、第二ハ農工商ヲ平民トシテ、四民同等ノ權利ヲ得セシメタル事、第三ハ徵兵令ヲ定メ、全國正丁ノ中ヨリ兵ヲ徵シ、鎮臺ヲ置キテ全國ヲ管シ、兵ヲ以テ專職トシ、且ツ西式ノ軍器操練ヲ用ヒシ事、第四ハ大中學校ヲ建設シテ泰西ノ實學ヲ獎勵シ、又教育令ヲ布キテ、全國各町村ニ小學校ヲ起シ、普通教育ノ廣布ヲ謀リシ事、第五ハ服制ヲ新更セシコ前題ニ述ブルガ如シ第六ハ全國ノ地價ヲ定メ、毎年地價百分ノ二分五厘ヲ課シテ地租トセシコ第七ハ刑律ヲ制

定シ條章井然タル法律ヲ大定セシ事、此等ノ事項ハ我國人情風俗上ニ、大ナル變化ヲ生シタル者ナリ、

(三) 新律綱領頒布ノ原因ヲ問フ

謂ク維新ノ初年ニ刑法官ヲ置キシモ、百事創草ノ際ナルヲ以テ、暫ク舊法舊慣ヲ用ヘ、假ニ條例ヲ定メタリ、之ヲ假律ト云フ、次テ明治二年七月ニ至リ、刑法官ヲ刑部省ト改メ新舊ノ律令ヲ折衷シテ條例百九十餘條ヲ制セシム、之ヲ新律綱領トス、當時頒布ノ際左ノ上諭ヲ下シ玉フ

朕刑部ニ勅シテ律書ヲ改撰セシム、乃チ綱領六卷ヲ奏進ス、朕在廷諸臣ト議シ、以テ頒布ヲ允ス、内外有司其之ヲ遵守セヨ、

是ニ於テ始メテ封建ノ諸律ヲ一定シ、國民同一ノ法ニ服スルヲ得タリ、

(四) 征韓論ノ始末如何

謂ク維新ノ業緒ニ就クニ及ンデ、朝廷數々使ヲ韓國ニ遣シ、カヲ外交ニ致ス、韓國我使命ヲ容レズ、却テ其答辭甚タ不遜ナリ、且臺灣島蕃管ヲ琉球國人ノ其島ニ抵ルモノヲ虐殺シ、又小田縣ノ漂民ヲ剽劫ス、於是征韓ノ論天下ニ囂スシ、當時在朝ノ重臣此論ヲ主張スル者、西郷隆盛ヲ最トス、其他江藤新平、後藤象次郎、板垣退助、副島種臣、桐野

利秋、篠原國幹等之ニ賛成ス、太政大臣三條實美ニ就テ策ヲ進ム、議略決シ、偶々岩倉具視、木戸孝允、大久保利通後歐洲ヨリ歸朝シ、痛ク之ヲ駁ス、於是隆盛利秋等事ノ成ル可ラサルヲ知り、職ヲ辭シテ慶嶋ニ歸ル、後藤、副島、板垣、江藤四參議亦病ヲ告ケテ辭職ス、

(三五) 佐賀ノ亂ノ顛末如何

謂ク江藤新平島義勇等征韓論ノ行ハレサルヲ憤リ、明治七年二月亂ヲ佐賀ニ起シ、縣廳ヲ襲フテ之ヲ取ル、勢甚タ猖獗ナリ、朝廷新平カ官爵ヲ褫ヒ、大久保利通ヲ遣ハシ之ヲ鎮撫セシメ、尋テ嘉彰親王ヲ征討總督トシ、山縣有朋ヲ參軍トシ、往テ賊ヲ討タジム、賊兵窘窮シ、鹿兒島ニ奔テ西卿ニ投ス、隆盛納レス、土佐ニ奔ル、亦納レス、遂ニ捕縛セラル、而シテ佐賀ノ殘黨亦降ル、仍テ新平義勇等ノ巨魁十一人ヲ斬ニ處シ、其黨百三十六人ヲ懲役ニ服セシメ事平ク

(三六) 臺灣征討ノ顛末如何

謂ク明治七年臺灣ノ土蕃、我琉球藩及ヒ小田縣ノ民、其地ニ漂着セシ者ヲ劫殺セリ、臺灣ハ島地ニシテ支那ノ南端ニアリ、琉球ト相對ス、其西半ハ清國ニ歸シ、東半ハ土蕃ノ巢窟ニシテ清國モ服從セス、於是同年四月陸軍中將西鄉從道ヲ都督トシ、舟師三千ヲ率井テ

臺灣ニ入ル、諸蕃風テ望テ降ル、獨リ牡丹蕃下ラス、乃其巢窟ヲ燒キ、酋長ヲ斬リ、島地全部悉ク平ク、初メ臺灣ノ役、朝廷先ツ使ヲ遣ハシ、清廷ニ謀ル、清廷異議ナキヲ以テ答フ、我軍臺灣ヲ征スルニ及ヒ、清廷我軍ノ擅伐ヲ詰ル、内務卿大久保利通ヲ特命全權辦理大臣トシ、清國ニ遣ハシ蕃地ハ清ノ所屬ニアラザルヲ論ズ、議將ニ破レントス、英國公使ノ調停ニ依リ、遂ニ償金五十萬兩ヲ出サシメ、和議ヲ成シテ歸ル

(三七) 神風連ノ變トハ何ソヤ

謂ク明治八年十月、熊本縣人加屋齋堅、太田黒伴雄、宮永萬喜等舊制ヲ喜ヒ新政ヲ喜ハス、遂ニ敬神ヲ名トシメ其黨ヲ聚メ、熊本鎮臺及ヒ縣廳ヲ侵シ、司令官種田政明、縣令安岡良助ヲ殺シ、士官兵卒縣官二百餘人ヲ殺傷シ、兵營數棟ヲ火ス、鎮臺ノ兵擊テ之ヲ平ラク、亂徒或ハ自殺シ、或ニ捕ニ就ク、世之ヲ神風連又ハ敬神黨ノ亂ト云フ

(三八) 萩ノ變トハ如何

謂ク前原一誠、奥平謙輔等新政ニ不平ヲ抱キ、官ヲ罷メテ郷里山口ニ歸リ、密ニ機會ヲ窺フ、熊本秋月ノ賊起ルニ及ヒ、其黨ト謀リ兵ヲ率ヒテ將ニ縣廳ヲ襲ハントス、果サス、一誠兵ヲ反シテ萩ヲ襲フ、官軍擊之ヲ平ク、一誠等尋テ捕ニ就キ斬ニ處セララル、

(三九) 朝鮮事變ノ年月如何

謂ク三回ノ事變アリ第一回ノ變ハ明治八年江華島ノ事變ナリ、第二回ノ變ハ明治十五年ノ事變、第三回ノ變ハ明治十七年ノ變是ナリ

(三〇) 江華島ノ事變トハ何ソヤ

謂ク明治八年、江華島ノ暴徒我カ雲揚艦ヲ砲撃ス、是ヨリ先キ雲揚艦朝鮮ノ東南海ヲ測量シ將ニ其西岸ニ沿ヒ、清國ニ航セントス、因テ其島沖ヲ過ク、暴徒遽カニ砲撃ス、士官將ニ上陸シテ其意ヲ問ハントス、砲撃益烈シ、於是我軍艦亦タ應撃シテ其砲臺ヲ毀テ、臺ニ上陸シテ兵器ヲ奪フテ歸ル、越テ九年陸軍中將黒田清隆特命全權辦理大臣ト爲リテ韓廷ニ遣ハス、韓廷前事ヲ謝シ、修好條規及ビ貿易規則ヲ互換ス、

(三一) 明治十五年ノ朝鮮事變トハ如何

謂ク明治十五年、朝鮮ノ暴徒等我公使館ヲ襲フ、是ヨリ先キ在韓辦理公使花房義質國王ニ勸ムルニ富國強兵ノ策ヲ以テス、國王大ニ喜ビ我士官ヲ招聘シテ衛士ヲ訓練セシム、然ルニ鎖國主義ノ者之ヲ悦ビス、物議囂々タリ、姦徒之ニ乘シ頑民ヲ煽動シ、王宮ヲ犯シ、又急ニ我公使館ヲ襲フ、然ルニ韓廷敢テ來リ救ハス、因テ義質圍ヲ衝テ王宮ニ至ル、宮門已ニ鎖シテ入ルヲ得ス、門ヲ叩テ呼フモ應セス、乃チ路ヲ轉シテ仁川ニ至ル、暴徒復タ起リ、我兵多ク之ニ死ス、義質又濟物浦ニ至リ、書ヲ國王ニ呈シ、遂ニ英王ノ測量

船飛魚號ニ搭シ、赤馬關ニ歸リ、狀ヲ奏ス、乃チ義質ヲシテ海軍ヲ率井京城ニ入リテ其罪ヲ問ハシム、韓廷大ニ惶駭シ其罪ヲ謝シ、被害者ノ撫恤金五萬圓及ビ陸海軍費五十萬圓ヲ償ヒ暴徒ヲ逮捕シ、事遂ニ平ク、

(三二) 明治十七年ノ朝鮮事變トハ何ソヤ

謂ク十七年、朝鮮ニ亂アリ、大臣閔泳翊害セラル、國王乃チ援ヲ我公使館ニ乞フ、代理公使竹添進一郎兵ヲ率ヒテ王宮ヲ警衛ス、清國ノ兵暴徒ヲ助ケテ王宮ヲ攻メ、又我公使館ヲ襲フ、陸軍大尉磯林眞三等三十九人之ニ死ス、公使館モ亦タ燒カル、公使館乃チ難ヲ仁川ニ避ケ狀ヲ奏スト朝廷乃チ外務卿井上馨ヲ特派全權大使ト爲シ、往テ其罪ヲ問ハシム、朝鮮大ニ其罪ヲ謝シ、償金ヲ出シ、凶徒ヲ罰シ、等ヲ遣シテ謝書ヲ呈ス、尋テ伊藤博文ヲ特派全權大使トシテ清國ニ遣ハシ、朝鮮事件ヲ談判セシム、博文天津ニ於テ季鴻章ニ會ヒ示後朝鮮ヲ獨立國ト定メ、兩國共ニ守兵ヲ置カス、若シ朝鮮ニ兵ヲ出ス時ハ、豫シメ相通センコトヲ約ス、世之ヲ天津條約ト云フ

(三三) 西南ノ役ノ概略如何

謂ク明治十年二月、西鄉隆盛鹿兒島ニ叛ス、初メ隆盛力ヲ王事ニ盡シ、功勞ヲ以テ朝遇優渥、官陸軍大將兼參議ニ至リ、位正三位ヲ辱フス、桐野利秋、後原國幹亦顯職ニアリ、

然ルニヲ韓ノ議容レザルヲ以テ參議ヲ辭シ、利秋等ト鹿兒島ニ還リ、田野ニ退居シ、遂ニ君測ノ惡ヲ清ムルヲ名トシテ兵ヲ擧ク、應スル者無慮數萬人、進テ熊本城ヲ圍ム、城將谷干城寡兵ヲ以テ能ク防ク、事聞ス、時ニ天皇京都ニス幸、乃チ隆盛等ノ官位ヲ褫ヒ、有栖川熾仁親王ヲ以テ征討太總督ト爲シ、陸軍卿山縣有朋、中將黒田清隆、海軍大輔河村純義ヲ參軍ト爲シ、少將野津鎮雄、三好重臣ヲ參謀ト爲シ、水陸並ヒ進ミ、轉鬪血戰凡ソ二百餘日兩軍殺傷頗ル多シ、遂ニ九月ニ至リ隆盛等鹿兒島ニ逃ル、官軍追撃之ヲ城山ニ圍ム、海陸諸軍皆ナ來リ會ス、兵凡ソ五萬餘、攻撃二旬ニ及ブ、賊兵糧盡キ隆盛等皆戰死ス、實ニ九月二十四日ナリ、此役ヤ死者凡ソ六千二百餘人、處刑セラル、モノ凡ソ四萬三千餘人、西南始メテ鎮靜ス

(三四) 五等爵トハ何ソヤ

謂ク明治十七年七月始メテ爵ヲ制シテ公侯伯子男ノ五等ニ分ツ、又維新ノ功臣ヲ華族ニ任シ新舊ノ華族五百五十餘人ニ爵ヲ授ク、(新舊トハ俗ニ舊大名公卿ヲ舊華族、維新ノ功臣ヲ新華族ト云フ)當時其勅語ニ曰ク、朕惟フニ華族勳冒ハ國ノ瞻望ナリ、宜シク授クルニ榮爵ヲ以テシ、用テ寵光ヲ示ス、文武諸臣中興ノ偉業ヲ翼贊シ、國ニ大勞アル者、宜シク優列ニ陞シ、用テ殊典ヲ昭スヘシ、茲ニ五爵ヲ叙テ、其有禮ヲ秩ス、卿

等益々爾ノ忠貞ヲ篤クシ、爾ノ子孫ヲシテ、世々其美ヲ濟セシメヨト

(三五) 勳章制定ノ沿革ヲ問フ

謂ク明治八年四月、始メテ國家ニ功勞アル者ノ爲メニ、勳等賞牌ノ典ヲ定メ玉フ、其詔ニ曰ク朕惟フニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者、宜ク之ヲ褒賞シ、以テ之ニ酬ユヘシ、仍テ勳等賞牌ノ典ヲ定メ、人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス、汝有司、其斯旨ヲ體セヨト次デ明治二十一年一月ニ至リ、更ニ勳章増設ノ舉アリ、其詔ニ曰ク朕曩ニ勳位ヲ定メ、佩章ノ制ヲ設ケ、茲ニ復潤飾増設シ、新舊與ニ併行シ、勳功アル者ヲ賞旌シ、以テ獎勵ノ道ヲ擴ム、汝衆庶此旨ヲ體セヨト又明治二十三年二月ニ至リ更ニ皇宗載定ノ故事ニ徴シ、金鷄勳章ヲ創設シ、功一級ヨリ功七級ニ至ル、武功拔群ナルモノニ授ケ玉フ、其詔ニ曰ク、朕惟ミルニ、神武天皇業ヲ恢弘シ、繼承シテ朕ニ及ベリ、今ヤ皇カニ登極紀元ヲ算スレハ、二千五百五十年ニ達セリ、朕此期ニ際シ、天皇載定ノ故事ニ徴シ、金鷄勳章ヲ創設シ、將來武功拔群ノ者ニ授與シ、永ク天皇ノ威烈ヲ光ニシ、以テ其忠勇ヲ獎勵セントス、汝衆庶此旨ヲ體セヨト

(三六) 明治十八年ノ官制改革ハ如何

謂ク明治十年二月、三條太政大臣ノ奏議ヲ用ヒ、三大臣參議、諸省卿ヲ廢シ、更ニ十省

ヲ置キ、一省毎ニ長官ヲ置キ大臣ト稱シ、副ヲ次官ト稱シ、大臣ヲシテ内閣員タラシメ其上ニ一ノ總理大臣ヲ置キテ以テ全局ヲ統一セシム、乃チ外務、内務、大藏、司法、陸軍、海軍、文部、農商務、逓信、宮内ノ十省ニシテ、宮内省ノミハ内閣ノ外ニ立テ皇室ニ屬ス、是レ歐洲新主義ニ則レルモノナリ、

(三七) 民選議院ノ建白ハ如何

謂ク明治元年三月十四日ノ誓詔出ツルヤ、天下益々公議輿論ヲ重ンズ、明治七年ニ至リ、後藤象次郎、江藤新平、副島種臣、由利公正、板垣退助、小室信夫、岡本健三郎、古澤滋ノ八人、民選議院建白書ヲ上ツル、其意蓋シ人民ノ代議士ヲ撰ミ、之ヲシテ法政ヲ評議セシメントスルニアリ、加藤弘之等尙ホ之ヲ早シトス、之ヨリ遲速ノ論囂々トシテ天下漸ク國會ノ必要ヲ感スルニ至レリ

(三八) 國會開設ノ聖詔如何

謂ク明治十年以後益々國會開設ヲ請願スルモノ多ク、次デ元老院ヲ開キ、又地方官會議ヲ開ク、然レモ是レ皆官吏ヲシテ其議ニ與ラシムルノミ、明治十二年ニ至リ、始メテ府縣會ヲ開キ又町村會ヲ設ク、是ニ於テ人民代議政體ヲ望ムノ念彌ヨ切ニシテ、其建白請願書ヲ奉呈スルモノ、日々太政官ノ門前ニ麤至ス、天皇竟ニ明治二十三年ヲ期シテ國會ヲ

開設スルノ聖詔ヲ下サセ玉フ、實ニ明治十四年十月十二日ナリ、其詔ニ曰ク、朕祖宗二千五百有余年ノ鴻緒ヲ嗣キ、中古紐ヲ解クノ乾綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ總攬シ、又夙ニ立憲ノ政体ヲ建テ、後世子孫繼クベキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス、嚮ニ明治八年元老院ヲ設ケ、十一年府縣會ヲ開カシム、此皆漸次基ヲ創メ、序々循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非ルハナシ、爾有衆、亦朕カ心ヲ諒セヨ、顧ミルニ、立國ノ體、國各宜キヲ殊ニス、非常ノ事、實ニ輕舉ニ便ナラス、我祖我宗照臨シテ上ニ在リ、遺烈ヲ揭ケ、洪謨ヲ弘メ、古今ヲ變通シ、斷シテ之ヲ行フ、責朕カ躬ニ在リ、將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ、國會ヲ開キ、以テ朕ガ勅志ヲ成サントス、今在廷臣僚ニ命シ、假スニ時日ヲ以テシ、經畫ノ責ニ當ラシム、其組織權限ニ至テハ、朕躬ヲ衷ヲ裁シ、時ニ及ンテ公布スル所アラントス、朕惟フニ人心進ムニ偏シテ、時會速ナルヲ競フ、浮言相動キ竟ニ大計ヲ遺ル、是宜シク今ニ及ンデ謨訓ヲ明徴シ、以テ朝野臣民ニ公示スヘシ、若シ仍ホ躁急ヲ爭ヒ、事變ヲ煽シ、國安ヲ害スルモノアラハ、處スルニ國典ヲ以テスヘシ、特ニ茲ニ明言シ、爾有衆ニ諭ス」ト

(三九) 政黨ノ濫觴如何

謂ク明治十四年十月參議兼大藏卿大隈重信職ヲ辭シ、後チ立憲改進黨ヲ組織シ、自カラ

其總理トナル、自由黨又起リテ羽翼ヲ張リ、板垣退助ヲ推シテ總理トス、又帝政黨ナル者起ル、是レ丸山作樂福地源一郎等ノ組織ニナレリ、是レ政黨ノ濫觴ナルモノナリ

(四〇) 憲法發布ノ始末如何

謂ク明治十四年、國會開設ノ聖詔降リシヨリ、諸有司此詔ニ遵ヒ、憲法草案ヲ制定ス、天皇乃チ此ノ草案ヲ樞密院ニ下シテ之ヲ議セシメ玉ヒ、明治二十二年二月十一日ヲ以テ之ヲ發布ス

始メ東京ノ皇城火アリ、即チ假リニ赤阪離宮ニ在ラセ玉フ、既ニシテ皇宮ノ建築新タニ成ル、名ケテ宮城ト稱ス、此日勅奏任官及各府縣知事各裁判所長、各府縣會議長等ヲ宮城ニ召サセラレ、内閣總理大臣ニ憲法ヲ授ケ、之ヲ發布セシメラル、其告文ニ曰ク、

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ノ神靈ニ誥グ白サク、皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循ヒ、惟神ノ寶祚ヲ承繼シ、舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スルコト無シ、願ミルニ世局ノ進運ニ膺リ、人文ノ發達ニ隨ヒ、宜シク

皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ、典憲ヲ成立シ、條章ヲ昭示シ、内ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲

シ、外ハ以テ臣民翼賛ノ道ヲ廣メ、永遠ニ遵行セシメ、益々國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ、八洲民生ノ慶福ヲ増進スヘシ、茲ニ皇室典範、及憲法ヲ制定ス、惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述セルニ外ナラス、而シテ朕カ躬ニ逮テ、時トシテ舉行スルコトヲ得ルハ、詢ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚籍スルニ由ラザルハナシ、皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ祈リ、併セテ朕カ現在及將來ニ、臣民ニ率先シ、此憲章ヲ履行シテ愆ラサラムコトヲ誓フ、庶幾クハ

神靈此レヲ鑒ミタマヘ、

又發布ノ勅語ニ曰ク、

朕國家ノ隆昌ト、臣民ノ慶福トヲ以テ、中心ノ欣榮トシ、朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依

リ現在及將來ノ臣民ニ對シ、此ノ不磨ノ大典ヲ宣示ス、
惟フニ、我カ祖我カ宗ハ、我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ、我帝國ヲ肇造シ、以テ無窮
ニ垂レタリ、此レ我カ神聖ナル、祖宗ノ威徳ト、並ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ、國ヲ愛シ
公ニ殉ヒ、以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ朕シタルナリ、朕我カ臣民ハ、即チ祖宗ノ忠
良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ、其ノ朕カ意ヲ奉體シ、朕カ事ヲ獎勵シ、相與ニ和衷協
同シ、益々我カ帝國ノ光榮中外ニ宣揚シ、祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ、希望
ヲ同シクシ、此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ、
朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ、萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ、朕カ親愛スル所ノ臣民ハ、即チ朕カ祖宗
ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ、其ノ康福ヲ増進シ、其ノ懿徳良能ヲ發達セ
シメムコトヲ願ヒ、又其ノ翼贊ニ依リ、與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ、乃
チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ、茲ニ大憲ヲ製定シ、朕カ率由スル所ヲ示シ、
朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ、永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム、
國家統治ノ大權ハ、朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ、之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ、朕及朕カ子孫ハ
將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ、之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ
朕ハ我カ臣民ノ權利、及財産ノ安全ヲ貴重シ、及之ヲ保護シ、此レ憲法及法律ノ範圍内

ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス、
帝國議會ハ、明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ、議會開會ノ時ヲ以テ、此ノ憲法ヲシテ有
効ナラシムルノ期トスヘシ、

將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ、朕及朕カ繼續ノ
子孫ハ發議ノ權ヲ執リ、之ヲ議會ニ付シ、議會ハ此ノ憲法ノ定メタル要件ニ依リ、之ヲ
議決スルノ外、朕カ子孫及臣民ハ、敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ、

朕カ在廷ノ大臣ハ、朕カ爲メニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘシ、朕カ現在及將來ノ
臣民ハ、此ノ憲法ニ對シ、永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ、

於是我立憲代議政體ノ基礎定マリ、皇室ノ安泰、臣民ノ權利義務、政府ノ職掌、帝國議
會ノ權限等確然トシテ動カス可カラス、此日併セテ皇室典範及ヒ衆議院撰舉法、會計法
貴族院令等ヲ發布セラル、

(四) 第一期帝國議會ノ概況如何

謂ク明治二十三年十一月廿五日、詔シテ帝國議會議員ヲ召集ス、貴族院ノ議員ハ皇族十
人、公爵十人、侯爵二十一人、伯爵十五人、子爵七十人、男爵二十人、勅撰六十一人、
各府縣多額納稅者四十五人、總テ二百五十二人ナリ、伊藤博文議長ニ任シ、東久世通禧

副議長ニ任ゼラル、衆議院議員ハ府縣選舉ノ議員區ヨリ選出サレシモノ大凡三百人ナリ、中島信行議長ニ撰ハレ、津田眞道副議長ニ舉ラル、次デ議員ヲ分チテ九部トシ、常任委員ヲ定メテ議會始メテ成立ス

(三) 帝國議會開院式ノ概況如何

謂ク二十三年十一月廿九日、天皇躬親ヲ賢所皇靈神殿ヲ祀リ、兩院議長以下ニ參拜ヲ許サセ玉フ、此日天皇貴族院ニ臨御、開院式ヲ行ハセ玉フ、鹵簿國儀式ヲ用ヒ、親王大臣等扈從シ、各國公使、文武ノ重官府縣知事等皆陪觀ヲ許サル、兩院議長議員ヲ率ヒテ式場ニ列ス、其詔ニ曰ク、朕即位以來二十年間ノ經始スル所、内治諸般ノ制度其綱領ヲ舉ケタリ、庶幾クハ、皇祖皇宗ノ遺德ニ倚リ、卿等ト俱ニ前ヲ繼キ後ヲ啓キ、憲法ノ美果ヲ收メ、以テ將來ニ益々我帝國ノ光烈ト、我臣民ノ忠良ニシテ勇進スル氣性トヲシテ、中外ニ表明ナラシムルヲ得ム、朕又夙ニ各國ト盟好ヲ修メ、通商ヲ廣メ、國務ヲ擴張セシメテ期ス、幸ニ締約諸國ノ交際ハ、益々親厚ヲ加ヘタリ、陸海ノ軍備ハ内外ノ平和ヲ保全スル爲ニ、歳ヲ積ミテ完實ヲ期セサル可カラス、明治二十四年度ノ豫算及各法律案ハ、朕之ヲ國務大臣ニ命シテ議會ノ議ニ附セシム、朕ハ卿等カ公平慎重以テ審議協賛スル所アルヲ期シ、併セテ將來ニ繼クヘキノ模範ヲ貽サンヲ望ム、

(三) 三條實美ノ事ヲ問フ

謂ク公ハ藤原鎌足ノ後裔從一位右大臣三條實萬ノ四男ナリ人ト爲リ溫良恭謙ニシテ勤王ノ志厚ク、先考ノ遺圖ヲ繼ク、嘉永二年、年十三ニシテ從五位ニ叙セラレ、爾來朝家ノ爲メニ粉骨壘身ス、文久三年東久世通禧等七卿ト共ニ長州ニ落魄シ、配所ノ月ヲ咏ス、慶應三年京ニ歸リ新ニ議定ノ職ヲ辭ス、次デ明治二年維新ノ勳功ニ依リ、特ニ公ニ永世祿五千石ヲ賜フ、四年七月太政大臣兼神祇伯宣教長官ニ任セラレ、九年勳一等ニ叙シ旭日大授章ヲ賜フ、十五年大勳位ニ叙セラレ、十七年七月偉勳ニ依リテ公爵ヲ授ケラル、十八年官制改革ヲ奏上シ太政大臣ヲ罷メ、更ニ内大臣ニ任セラレ、廿一年樞密院顧問官ニ列セラル、廿四年二月病ヲ以テ薨去ス、年五十五、天皇公ノ病革マルヲ聽キ、遽カニ其邸ニ臨幸シ、平生ノ勳勞ヲ思ヒ、特ニ詔シテ位一級ヲ進メ、正一位ニ叙ス、其勅ニ曰ク、朕踐祚ノ初幼冲ニシテ一ニ輔弼ニ賴ル、鄉重任ニ膺リ、獎順匡救師父ニ同シ、彈竭怠リナク、終始渝ハラス、洵ニ是レ中興ノ元勳實ニ臣庶ノ龜鑑タリ、茲ニ特ニ正一位ニ叙シ、純忠ヲ表彰ス、ト公ノ功業赫々トシテ千載ニ輝ク、實ニ國家柱石ノ大臣ト謂フヘシ

(四) 復古功臣ノ賞典人名ヲ問フ

五千石	三條實美	公卿
五千石	岩倉具視	公卿
<small>千八百石 叙從三位</small>	木戶孝允	<small>準一郡 山口藩士</small>
<small>千八百石 叙從三位</small>	大久保利道	<small>一職 鹿兒島藩士</small>
千八百石	廣澤真臣	<small>兵助 山口藩士</small>
千五百石	中山忠能	公卿
千石	正親町三條實美	公卿
千石	大原重德	公卿
千石	東久世通禰	公卿
千石	小松清廉	<small>帶刀 鹿兒島藩士</small>
千石	後藤元暉	<small>象次郎 高知藩士</small>
千石	岩下方平	<small>佐次右衛門 鹿兒島藩士</small>
八百石	澤宣嘉	公卿
八百石	由利公正	<small>八郎 福井藩士</small>
<small>五百石 叙正五位</small>	成瀬正肥	犬山藩士

四百石	田宮篤輝	<small>如雲 名古屋藩士</small>
四百石	福岡孝弟	<small>藤次 高知藩士</small>
四百石	中根師質	<small>雪江 福井藩士</small>
四百石	辻維嶽	<small>將曹 廣島藩士</small>

以上永世祿

<small>五千石 叙正三位</small>	山内豐信	<small>高知藩主 豊範父</small>
千五百石	伊達宗城	<small>宇和島藩主 宗徳父</small>
百石	江藤胤雄	<small>新平 佐賀藩士</small>
百石	島義勇	<small>團右衛門 佐賀藩士</small>
百石	北島秀朝	<small>東京府士 楠左衛門</small>
百石	土方久元	高知藩士
百石	西尾爲忠	<small>遠江介 官人</small>
五十石	新田義雄	<small>三郎 郡山藩士</small>

以上終身祿

金千兩	田中輔	<small>國之輔 名古屋藩士</small>
-----	-----	------------------------------

金五百兩 神山君風

左多衛 高知藩士

以上一時賞賜

叙従一位 徳川慶勝

名古屋藩主 徳成父

叙正二位 松平慶承

福井藩主 茂昭父

敘正二位 淺野茂勳

廣島藩士

叙正三位 西郷隆盛

吉之助 鹿兒島藩士

第六編

實地試験問題答案

●第一高等中學校入學試験問題

(一) 我國ノ政權ヲ掌握シタル諸氏各其政權ヲ執リタル年限如何

一、藤原氏 清和天皇貞觀中ヨリ、後冷泉天皇治曆中ニ至ル、前後凡ソ百九十年其間攝關

ヲ缺クコアリト雖モ、政權毎ニ藤氏ニ在リ

二、平氏 保元平治ノ亂後ヨリ壽永ノ滅亡ニ至ル、凡ソ十五年間

三、源氏 鎌倉幕府ノ創建ヨリ、實朝ノ薨去ニ至ル、凡ソ三十四年間

四、北條氏 源氏滅亡ヨリ元弘ノ滅亡ニ至ル、凡ソ百十餘年間

五、足利氏 南北朝ノ時ヨリ天正ノ滅亡ニ至ル、凡ソ二百五十年間

六、織田氏 足利氏ノ滅亡ヨリ本能寺ノ變ニ至ル、前後凡ソ十年間

七、豊臣氏 大阪ノ築城ヨリ同夏ノ役ノ敗滅ニ至ル、凡ソ廿餘年間

八、徳川氏 家康創業ヨリ、將軍慶喜ノ大政奉還ニ至ル、凡ソ二百八十年間

(二) 元龜天正ノ頃割據ノ群雄及ビ其割據ノ地方ヲ舉ケヨ

謂ク元龜天正頃ニ在テハ、群雄四方ニ割據シ、宛然幾多ノ小獨立國ヲ成セシモノ、如シ、

而シテ其内最モ強大ナルモノヲ舉ケレハ、甲斐ニ武田氏アリ、越後ニ上杉氏アリ、關東

ニ北條氏今川氏アリ、其他中國ノ毛利氏、四國ノ長曾我部氏、九州ノ島津氏、奥羽ノ伊

達氏等其重モナルモノニシテ、其小豪族ニ至テハ各一部ニ勢力ヲ張ルモノ無數ナリ

(三) 長州征伐ノ始末ヲ問フ

謂ク攘夷論ノ盛ナリシ時、毛利氏主上ヲ挾テ天下ヲ私スラント流言スル者アリ、天皇遽

カニ外夷親征ノ詔ヲ止メ、徳川幕府ニ命シテ長州ヲ討シメ玉フ、毛利氏主謀十三人ヲ斬

テ降ル、毛利氏ノ臣高杉普作大ニ之ヲ不可トシ、大村、山縣、井上、山田等ト議シテ復

タ兵ヲ舉ク、幕府再ヒ之ヲ征シテ攻戦利アラヌ、其後朝廷詔シテ師ヲ止メシム、幕府勝

安房ヲ遣リテ、竟ニ解兵ス、是ヨリ幕政大ニ衰フ

●高等商業學校豫科

(一) 貞永式目ヲ定メシハ何人ナリヤ

(明治二十三年度)

謂ク貞永元年北條泰時、頼朝以來ノ舊慣ニ據リ、式目五十一條ヲ撰ミテ之ヲ頒ツ、即チ貞永式目是也

(二) 島原一揆ノ起因並ニ其結果ヲ舉ケヨ

(全)

謂ク足利氏ノ末ヨリ外人稍ヤク西邊ニ來リ、通商ヲナスモノアリ、又基督教ヲ擴メンガ爲メ密カニ法ヲ説クモノアリ、人民亦密ニ之ヲ歸依スルモノアリシカ、織田豊臣二氏ヲ經テ徳川氏ノ初メニ至リ之ヲ禁スルヲ嚴ナリシヲ以テ基督教徒密カニ怨望シ、寛永十四年遂ニ反テ兵ヲ舉ケ、天草四郎ナル者ヲ推シテ巨魁トナシ、天草島ニ據リ、島原ノ亂民ト共ニ近地ヲ抄掠ス、之レ即チ島原一揆ノ始メナリ、而シテ叛亂容易ニ鎮定セス、暴民勢ヒ猖獗ナリシモノハ、小西行長ノ遺臣等大坂ノ殘黨ト共ニ、密カニ來ツテ之ヲ援ケシニ因ル

島原一揆ノ結果トシテ、徳川幕府ノ外教ヲ憎ム一層甚シキヲ加ヘ、嚴酷ナル禁令出ルニ至リシカバ、人民ノ基督教ヲ奉スルモノ漸々其數ヲ減セシト雖モ、一方ニ於テハ支那和蘭朝鮮ノ外、通商互市ヲ許サザルニ至リシガ故ニ、一旦東洋ノ勝島ニ移植セラレシ泰西文

明ノ美花忽チ凋レ、日本商業界ノ發達再ヒ此ニ停止スルニ至レリ

(三) 徳川氏寛政ノ治トハ如何

(全)

謂ク將軍家齊ノ職ヲ襲フヤ、首トシテ田沼父子ヲ黜ケ代フルニ松平定信ヲ以テス、定信明察勉メテ前代ノ弊政ヲ改メ、吉宗ノ遺法ヲ再興シ、節儉ヲ守リ武備ヲ嚴ニシ、人材ヲ登庸シ文教ヲ興ス、此ヲ以テ天下靡然トシテ其治ヲ仰キ、徳川氏ノ隆治茲ニ至テ極マル、後世之ヲ寛政ノ治ト稱ス

(四) 水戸ノ賢人トハ誰ナリヤ

謂ク徳川光圀ナリ光圀ハ徳川家康ノ孫ニシテ常陸水戸ノ藩主ナリ、聰明博學ニシテ尊王ノ志深ク、大義名分ヲ明カニシテ、王政ヲ興シ、民苦ヲ察シ賦稅ヲ薄ウシ、窮乏ヲ恤ミシテ以テ、賢明ノ名中外ニ聞エ

●高等商業學校補充科

(一) 天慶ノ亂ノ起因ヲ問フ

謂ク平將門初メ攝政藤原忠平ニ仕ヘ檢非違使タランヲ求ム、忠平省セズ、將門即チ怒ツテ關東ニ赴キ、兵ヲ起シテ伯父常陸大掾平國香ヲ殺シ、叔父下總介平良兼ヲ亡ボス、時ニ武藏權守興世王ナルモノアリ、其謀主トナリテ德憑スラク、一州ヲ取ルモ誅セラレ、

八州ヲ取ルモ誅セラル、誅ハ一ノミ、公宜ク關八州ノ地ニ據テ以テ天下ヲ圖ルヘシト、將門聞テ大ニ喜ヒ、偽宮ヲ下總猿島ニ建テ、文武百官ヲ置テ親ラ帝號ヲ稱ス、時ニ伊豫椽藤原純友ナルモノアリ、將門ト友トシヨシ、曾テ叡山ニ登リシ時、同シク不軌ノ謀ヲ約セリ、此ヲ以テ其海賊ヲ平ケテ南海ニ在ルヲ奇トシ、此ニ至テ兵ヲ舉ケ、遙ニ將門ニ應ス、之ヲ天慶ノ亂ノ起因トス

(二) 徳川氏ノ初メ鎖國主義ヲ採ルヤ如何ナルヲ爲シ、カ
謂ク徳川氏ノ初メ西葡佛英ノ諸國人來ツテ通商ヲナシ、又耶蘇教ヲ説クモノ稍ク多ク、其極遂ヒニ島原ノ一揆ヲ引キ起コスニ至リシカハ、將軍家光外教徒ヲ惡ムト甚シク、遂ニ嚴令ヲ出シテ耶蘇教ヲ嚴禁シ、之ニ違フモノハ處スルニ酷刑ヲ以テセリ、加フルニ一方ニ於テハ諸外國船ノ來航ヲ禁シ、唯支那朝鮮及ヒ和蘭ノ三國ノミ船數ヲ定メテ長崎ニ通商スルヲ許シ、且長崎奉行ヲシテ之ヲ監セシムルト同時ニ他ノ一方ニ於テハ亦本邦人ノ外國ニ渡航スルヲ禁シ、以テ彼此往來ノ途ヲ杜絶セルガ故ニ、一旦其使路ヲ得ントシタル外國貿易ハ、爲ニ全ク禁停セラル、ニ至レリ

(三) 洋學ノ起原ヲ問フ
謂ク洋學ハ天正年中耶蘇教ノ傳教師バレンツァルカン等京師ニ來リテ西洋ノ學術ヲ傳

フ、其後世々譯官ナルモノアルヲ見レハ當時已ニ外國ノ言語文書等ニ通ゼサリシモノアリシヤ疑ナシ、新井白石ノ采覽異言ヲ著ハスニ及ヒ、稍眼ヲ海外ノ事ニ注クモノアリ、加フルニ初メ幕府代々洋書ヲ讀ムヲ禁ゼシモ、吉宗ノ時ヨリ其禁ヲ解キシカハ、之ヨリ蘭佛英等ノ諸語漸々我國人ノ講スル所トナルニ至レリ、

(四) 關白職ヲ置キシハ何帝ノ御代ナリシヤ
謂ク宇多帝ノ朝藤原基經代ツテ萬機ヲ攝ス、關白ノ職實ニ此時ヨリ初マル、而シテ關白ハ關リ白スノ義ナリ

(五) 敏達帝ノ時神佛ノ兩派其權力ヲ争ヒシ主ナルモノハ誰ゾ
神道 物部守屋
佛教 蘇我馬子

(六) 本邦鑄錢ノ起原ヲ問フ
謂ク貨幣ノ本邦ニ行ハレシハ遠ク上代ニ創マルト雖モ、其ハ皆支那三韓等ヨリ渡レルモノヲ一部分ニ於テ流通セシニ止マル、而シテ其本邦ニ於テ之ヲ鑄造セシハ實ニ大化以後ニ在リ、而シテ歷史上ニ於テ鑄錢司ヲ創設セシハ、天武天皇五年ヲ以テ初メトスルヲ見レハ、此以前ニ在ツテハ、皆渡來ノ貨幣ヲ流用セシモノナリ、

(七) 本邦工藝ノ傳來ヲ問フ
 謂ク應神帝三十七年ニ至リ漢人阿知使主ヲ吳ニ遣ハシ、織工縫女ヲ求ム、是ニ於テ吳主
 女工四人ヲ遣ハシ來ラシム、是レ工藝傳來ノ概要ナリ

● 雜題答案

(一) 皇室天統ノ順序如何

天御中主神——高皇產靈神——神皇產靈神——可美葦牙彥舅神——天常立神——
以上天神五柱ト云フ

國常立尊——豐斟淳尊——國狹槌尊——(泥土煮尊)——(大戸道尊)——(面足尊)——(伊弉册尊)——
(沙土煮尊)——(大苦邊尊)——(吾屋惶根尊)——(伊弉册尊)——
以上天神七柱ト云フ

天照大神——正哉吾勝々速日天忍穗耳尊——天津彥火瓊々杵尊 彥火々出見尊——
以上天神七柱ト云フ

鷓鴣草葺不合尊——以上地神五代ト云フ

神武一	綏靖二	安寧三	懿德四	孝昭五
孝安六	孝靈七	孝元八	開化九	崇神一〇
垂仁二	景行三	成務三	仲哀四	應神二五
仁德三	履仲七	反正八	允恭二九	安康二〇
雄略三	清寧三	顯宗三	仁賢二四	武烈二五
繼體三	安閑二七	宣化二八	欽明三九	敏達三〇

用明三	崇峻三	推古三	舒明三	皇極三五
孝德三六	齊明三七	天智三八	弘文四九	天武四〇
持統四一	文武四二	元明四三	元正四四	聖武四五
孝謙四六	淳仁四七	稱徳四八	光仁四九	桓武五〇
平城五一	嵯峨五二	淳和五三	仁明五四	文徳五五
清和五六	陽成五七	孝光五八	宇多五九	醍醐六〇
朱雀六一	村上六二	冷泉六三	圓融六四	華山六五
一條六六	三條六七	後一條六八	後朱雀六九	後冷泉七〇
後三條七一	白河七二	堀河七三	鳥羽七四	崇徳七五
近衛七六	後白河七七	二條七八	六條七八	高倉八〇
安徳八一	後鳥羽八二	土御門八三	順徳八四	仲恭八五
後堀河八六	四條八七	後嵯峨八八	後深草八九	龜山九〇
後宇多九一	伏見九二	後伏見九三	後二條九四	花園九五
後醍醐九六	後村上九七	長慶九八	後龜山九九	後小松一〇〇
稱光一〇一	後花園一〇二	後土御門一〇三	後柏原一〇四	後奈良一〇五

正親町一〇六 後陽成一〇七 後水尾一〇八 明正一〇九 後光明二〇
 後西院二二 靈元二二 東山二二 中御門二四 櫻町二五
 桃園二六 後櫻町二七 後桃園二八 光格二九 仁光三〇
 孝明三三 今上三三 御世嗣 嘉仁親王

(二) 歷代天皇遷都ノ地名如何

日向宮崎都神武帝 大和高丘都綏靖帝
 大和浮穴都安寧帝 大和曲叡都懿德帝
 大和率川都開化帝 大和蘆戸都孝靈帝
 大和秋津島都孝安帝 大和瑞籬都崇神帝
 近江志賀都景行帝 長門豐浦都仲哀帝
 大和豐明都應仁帝 攝津難波都仁德帝
 河内柴籬都反正帝 大和飛鳥都九恭帝
 大和朝倉都雄略帝 大和養栗都清寧帝
 大和廣高都仁賢帝 大和馴城都武烈帝
 山城乙訓都同帝 大和玉穗都同帝
 大和幸玉都敏達帝
 大和豐浦都推古帝
 大和岡本都齊明帝
 大和清見原都天武帝
 山城恭仁都聖武帝
 近江保良都淳仁帝
 山城平安越都桓武帝
 武藏 東京今上皇帝

大和入野都宣化帝 大和金刺都欽明帝
 大和雙槻都用明帝 大和倉梯都崇峻帝
 大和岡本都舒明帝 攝津豐崎都孝德帝
 皇極帝 近江滋賀都天智帝
 筑前廣庭都同帝 大和藤原都(持統帝)文武帝
 大和難波都同帝 大和(ナラ)平城都元明帝
 大和(ナラ)平城都(同帝)稱德帝 大和(ナラ)平城都(同帝)孝謙帝
 大和(ナラ)平城都(及ビ)光仁帝 山城長岡都桓武帝
 攝津福原都安寧帝 山城平安城(後鳥羽帝)以後
 親王家ノ庶系ヲ問フ

伏見宮

第一 榮仁親王 崇光天皇御子 第二 治仁 王貞成親王御弟
 第三 後崇光院 貞成親王 第四 貞常親王
 第五 邦高親王 第六 貞敦親王
 第七 邦輔親王 第八 貞康親王
 第九 邦房親王 第十 貞清親王

第十一 邦道親王
 第十三 邦永親王
 第十五 邦忠親王
 第十七 邦賴親王
 第十九 邦家親王
 第二十一 貞愛親王

有栖川宮

第一 好仁親王
 第三 幸仁親王
 第五 職仁親王
 第七 韶仁親王
 第九 熾仁親王

後陽成天皇御子
後水尾天皇御弟
後西院天皇御子

第十二 貞致親王
 第十四 貞建親王
 第十六 貞行親王
 第十八 貞敬親王
 第二十 貞教親王

後陽成天皇御子

桂宮

第一 智仁親王
 第三 穩仁親王

識仁親王御子

第二 良仁親王
 第四 正仁親王
 第六 織仁親王
 第八 職仁親王
 御繼嗣威仁親王

第二 智忠親王
 第四 長仁親王

第五 尚仁親王
 第七 家仁親王
 第九 盛仁親王
 第十一 淑子內親王

第六 文仁親王
 第八 公仁親王
 第十 節仁親王

閑院宮

第一 直仁親王
 第三 美仁親王
 第五 愛仁親王

東山天皇御子

第二 典仁親王
 第四 孝仁親王
 第六 載仁親王

小松宮

第一 彰仁親王

邦家親王御子

御繼嗣依仁親王

北白川宮

第一 能久親王

邦家親王御子

山階宮

第一 日光親王

御繼嗣定 磨王

久邇宮

第一朝 彥親王 真敬親王御子 御繼嗣邦 彥王
華頂宮

第一博 經親王 邦家親王御子 第二博 厚親王

第三博 恭王

梨本宮

第一 菊 鷹王 (一)

(四) 皇室三陛下及東宮及殿下ノ聖歷如何

今上天皇 御名 睦仁 (御降誕嘉永五年九月廿三日 御即位明治元年八月廿七日 御踐祚慶應三年正月九日 大嘗會明治四年十一月十七日 孝明天皇第二皇子)

皇太后宮 御名 夙子 (御生誕天保四年十二月十四日 准后宣下嘉永六年五月七日 入内嘉永元年十二月十五日 皇太后宣下慶應四年三月十八日 故從一位九條尙忠第六女)

皇后宮 御名 美子 (御生誕嘉永三年四月十七日 皇后宣下明治元年十二月廿八日 入内明治元年十二月廿八日 故從一位一條尙香第三女)

皇太子宮 御名 嘉仁親王 (御生誕明治十二年八月卅一日 東宮宣下明治廿年八月卅一日 立太子明治廿二年十一月三日 今上天皇第三皇子)

御生母二位局慶子 故從一位中山忠能女 御生誕天保六年十一月廿八日

(五) 皇室ノ御譜ヲ畧述セヨ

謂ク我皇室ハ萬世一系ニ在マシテ、世界萬國ニ未タ其比ヲ見サル所ナリ、昔シ天地開闢ノ時始メテ現セシ神ヲ天ノ御中主ノ尊ト云ヒ、國土ノ浮漂セル時ニ現ハレシ神ヲ可美葦牙彥遲尊ト云フ、之ヲ別種ノ天神ト云ヘリ次ニ國常立尊ヨリ伊弉諾、伊弉冊尊ニ至ル迄ヲ天神七代ト云フ、此ノ諸冊二尊ヲ以テ我皇統ノ宗祖トス、二尊ノ皇女天照大神天統ヲ繼キ給フ、之ヲ天祖ト云フ、天祖其皇子、瓊々杵尊ヲ此國ノ主トシテ降ラシメ玉フ、依テ八尺瓊曲玉及ヒ八咫鏡、叢雲劔ヲ賜ヒテ天統ノ寶器トス、之ヲ三種ノ神器ト云フ、今宮城ニ祭レル賢所ノ本器ナリ、瓊々杵尊日向國ニ降臨在マシテヨリ今上天皇ニ至レリ

(六) 我邦太古ノ有様如何

謂ク我邦ノ太古ハ土人アリテ各地ニ部落セリ、天祖大神皇孫瓊々杵尊ヲ立テ、此地ノ主トス、時ニ土人ノ部落大ニ擾亂セシヲ以テ、勅使ヲ發シテ之ヲ平ラケシム、既ニシテ皇孫日向高千穗ニ降臨シ玉フ、其曾孫神武天皇、大和橿原ニテ即位シ玉フ、後世是歲ヲ以テ紀元トス、

(七) 大和帝都ノ起原ヲ問フ

謂ク神武天皇日向ヨリ舟師ヲ率ヒテ東征ス、大和ニ長髓彦ト云フ者アリ、饒速日命ヲ奉シテ主トス、其他ノ土族互ニ相争ヘリ、天皇英明ニシテ武略秀絶、行々群賊ヲ夷ク、饒速日命ハ竟ニ長髓彦ヲ殺シテ降ル、是ヨリ皇軍大ニ振起ス、天皇進ンテ盡ク大和ノ諸賊ヲ討伐シ、都ヲ橿原ニ起シテ、天皇ノ御位ニ即キ玉フ、

(八) 佛法渡來ノ始ヲ問フ

謂ク欽明天皇ノ時、百濟ノ王佛像經論ヲ献ル、天皇群臣ニ信否ヲ議セシメ玉フ、大臣蘇我稻目ハ之ヲ奉セント云ヒ、大連物部尾與、中臣鎌足等之ヲ斥ケント奏ス、稻目ノ子馬子寺ヲ建テ、佛像ヲ安置シ、竟ニ尾與ノ子守屋ヲ亡ボス、是ヨリ佛教次第ニ行ハル、

(九) 攝津ノ帝都ヲ問フ

謂ク孝德天皇ノ御時始メテ年號ヲ建テ、大化元年トシ、大ニ國政ヲ改良シ玉ヘリ、此時天皇ハ攝津長柄ニ都シ玉フ、是ヨリ先キ仁德天皇モ亦タ此國ノ高津ニ都シ玉フ

(一〇) 大化ノ改新トハ何ソヤ

謂ク大化二年始メテ改新ノ詔ヲ下シ、臣連等ヲ廢シテ其田莊私民ヲ収メ、大臣等ヲ置テ戶籍、班田等ノ制ヲ定メ玉フ、是ヨリ天下ノ大勢一變セリ之ヲ大化ノ改新ト云フ

(一一) 奈良ノ七朝トハ如何

謂ク神武天帝皇都ヲ大和橿原ニ奠メ玉ヒシヨリ、歷朝都ヲ遷スル四十回ニ餘リシカ、元明天皇ノ御宇ニ至リテ皇朝一都ノ制ヲ立テ、始メテ奈良ニ都シ玉フ、是ヨリ元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁ノ六朝七十五年間ノ帝都タリ、之ヲ奈良ノ七朝ト云フ

(一二) 奈良ノ大佛ハ何人ノ建立ナリヤ

謂ク大佛ハ大和國奈良ノ東大寺ニアリ、東大寺ハ僧行基カ聖武天皇ノ勅ヲ奉シテ建立スル所ナリ、其大佛ハ坐像ニシテ高サ五丈三尺、面ノ長サ一丈六尺アリ

(一三) 平安ヘ遷都セシハ何帝ノ時ナリヤ

謂ク桓武天皇萬世不易ノ名地ヲ相シテ、都ヲ遷サントシ玉フ、竟ニ帝都ヲ平安今ノ京都ニ遷シ玉フ、是ヨリ今上ノ先帝百二十一代孝明天皇マデ七十一朝千余年間ノ帝都トナレリ

(一四) 大化以後ノ文教ノ有様如何

謂ク大化ノ改新ヨリ文學ヲ以テ人才ヲ登用セシカハ、文教盛ニ行ハレテ後ニハ、管原大江ノ二氏各々學風ヲ競ヒ、管原清公、大江音人、小野篁、都良香、清原夏野、三善清行ノ如キ博學多ク輩出セリ

(一五) 五賢女トハ何ソヤ

謂ク一條天皇ノ御時賢婦才女一時ニ出ツ、就中紫式部、清少納言、赤染右衛門、和泉式

部、及ヒ伊勢大輔ハ才學識ノ三長ヲ兼タル名媛ニテ宮媛ノ閨秀トス、世ニ之ヲ五賢女ト稱ス

(二六) 藤原氏跋扈ノ原因如何

謂ク藤原氏ノ元祖、中臣鎌足大化ノ改新ニ元勳ヲ建テ、大織冠内大臣ニ叙任セラレ、藤原姓ヲ賜ハリシヨリ漸ク其家門ヲ張ル、其子不比等ニ四子アリテ子孫大ニ蔓ル、不比等ノ女二人アリ姉ヲ宮子ト云ヒ、妹ヲ光明子ト云フ、宮子ハ文武天皇ノ皇后トナリテ聖武天皇ヲ生ミ奉リ、光明子ハ聖武天皇ノ后ニテ、孝謙天皇ノ皇太后ナリ、是ヨリ藤原氏天子ノ外戚トナリ、次第ニ跋扈ノ域ニ進ム、

(二七) 攝政ノ始ヲ問フ

謂ク藤原冬嗣不比等ノ玄孫ヨリ次第ニ盛リテ、其子良房太政大臣ニ進ム、是ヨリ竟ニ藤原氏ノ占官ノ如クナレリ、既シニテ文德天皇崩シ玉ヒシカハ、良房清和天皇ノ外祖ナルヲ以テ政ヲ攝ス、是レ攝政ノ始メナリ

(二八) 院宣ノ時代トハ如何

謂ク後三條天皇ノ皇子白河天皇亦タ先帝ノ風采アリシヲ以テ藤原氏全ク手ヲ歛ム、然レ厩唯幼時ノミナラス、常ニ院宣ヲ以テ政ヲ執リ玉フテ四十年ニ近シ、故ニ堀河、鳥羽、

後白河ノ三上皇モ亦之ニ倣ヒテ、院政ヲ施シ玉ヒシカハ大小ノ政令皆ナ院中ヨリ出テ、天皇ノ定權ハ地ニ墜チシカ如シ、其弊竟ニ保元ノ亂ヲ惹キ起スニ至レリ

(二九) 應仁文明ノ亂トハ如何

謂ク後花園天皇ノ御時、今ヨリ四百二十四年ノ昔、京都ニテ細川清元ト山名宗全トノ戰アリ、應仁元年ヨリ文明九年マデ續キシヲ以テ之ヲ應仁文明ノ亂ト稱ス

(三〇) 大坂城及ヒ秀吉ノ性行ヲ問フ

謂ク大坂城ハ豊臣秀吉ノ築ク所ニシテ、今ハ大坂鎮臺タリ、秀吉ハ尾張國中村ノ農彌助ノ子ナリ、幼ニシテ聰明大志アリ、長シテ織田信長ニ仕ヘ、大ニ用ラレテ筑前守ニ任シ、姓ヲ羽柴ト改メテ屢々戰功アリ、後征西大將トナリテ中國ヲ畧ス偶々信長ノ訃詣ル、秀吉直ニ馳セ歸リテ光秀ヲ誅シ、信長ノ孫秀信ヲ立テ、織田氏ヲ嗣カシム、天皇其功ヲ賞シテ左近衛少將ニ任シ給フ、秀吉竟ニ大坂城ヲ築テ之ニ徙リ、九州ヲ除シ、遠ク朝鮮ヲ伐ツ、後榮進シテ太政大臣關白ニ拜セラレ、姓豊臣ヲ賜フ、

(三一) 伊勢宗廟ノ起原ヲ問フ

謂ク宗廟ハ垂仁天皇二十五年、大和ノ笠縫邑ヨリ天照太神ヲ伊勢國宇治ニ奉遷シタル者ニシテ之ヲ内宮ト稱ス、即チ度會郡宇治五十鈴川ニ鎮座ス、豊受大神宮ハ同郡山田ニア

リ、雄略天皇二十二年、丹波ノ眞名井ヨリ此處ニ遷ス、之ヲ外宮ト云フ
(三) 鎌倉尼將軍ノ事ヲ問フ

謂ク源賴朝ノ夫人ヲ政子ト云フ、北條時政ノ女ニシテ賴家實朝等ノ母ナリ、性嚴明ニシテ丈夫ノ風アリ、常ニ賴朝ノ霸業ヲ輔ク、賴朝ノ薨後尼トナル、賴家長シテ荒淫切ニ戒ムレモ悛メス、依テ實朝ヲ立ツ、既ニシテ實朝公曉賴家ノ子ニ殺サレ源氏ノ血統竟ニ亡フ、政子時政ト議シテ藤原賴經ヲ京師ヨリ迎へ、自ラ幕政ヲ決ス、爾來北條氏九代相襲テ政權ヲ執リタルハ皆政子ノ力ナリ、世人之ヲ尼將軍ト云フ、

(三三) 承久ノ亂如何

謂ク後鳥羽上皇常ニ鎌倉ノ執權北條義時ノ專權ヲ憤リ玉ヒ、承久三年密カニ兵ヲ徵シテ其罪ヲ聲ラレ玉フ、兵數萬ニ過キス、鎌倉ノ將士變ヲ聞テ集ルモノ二十一萬ニ近シ、於是官軍連戰敗走シ、本院竟ニ御志ヲ果シ玉ハス、義時即チ天皇ヲ廢シ奉リテ、後堀川天皇ヲ立テ、上皇カ讚岐ニ、中院土御門上皇ヲ土佐ニ新院順德上皇ヲ佐渡ニ遷ス、之ヲ承久ノ難ト云フ、

(三四) 鎌倉時代ノ佛教ハ如何

謂ク鎌倉時代ニ於テハ榮西、法然、親鸞、日蓮、一遍等ノ名僧前後輩出シ、各々一宗ヲ開立

セシヨリ、後竟ニ十六宗トナレリ、始メ賴朝陽ニ佛法ヲ信シテ民心ヲ收ム、且ツ文學ノ事ハ却テ僧侶ノ外之ヲ知ラザリシ故ニ、佛法ニ歸依スル者甚タ多ク兼テ文事ノ師トナセリ

(三五) 關東八州トハ如何

謂ク關東ノ八州トハ古ノ相摸國箱根山ノ關ヨリ東ノ八國ヲイフ、又足柄山ノ阪ヨリ東ノ八州ヲ阪東八國ト云フ、東國中最初ニ開ケシ國ナリ

(三六) 近江ノ帝部及壬申ノ亂如何

次ク天智天皇近江國大津ニ都シ玉ヒシカ、聖体不豫ナリシ時、皇弟ヲ召シテ後事ヲ囑シ玉フ、皇弟深ク慮ル所アリテ辭シテ吉野ニ入ル、天皇ノ皇子大友位ニ即キ玉フ、之ヲ弘文天皇ト云フ

弘文天皇ノ元年壬申、或人吉野ノ皇弟ニ告ケテ曰ク、朝廷大ニ殿下ヲ疑ヒ、兵ヲ備ヘテ圖ラントスト、皇弟甚タ愕キテ急ニ兵ヲ擧ケ玉フ、天皇始メテ變ヲ聞キ玉ヒ、群臣ヲ召シテ會議ス、機既ニ後レ軍亂レテ支フル能ハス、天皇竟ニ山前ニ崩シ玉フ、皇弟即チ大和國淨原宮ニテ即位シ玉フ、天武天皇是ナリ

(三七) 川中島ノ五戰トハ何ソヤ

謂ク信濃國川中島ノ故戰場ハ越後ノ上杉謙信ト甲斐ノ武田信玄ト拾ニケ年ノ間五度大ニ戰ヒシ所ナリ、故ニ世人之ヲ川中島ノ五戰ト云フ

(二六) 安藝ノ嚴島ノ結構如何

次ク嚴島ハ我邦三景ノ一ニシテ市杵島姫ヲ祀レル社アリ、故ニ亦タ宮島ノ稱アリ、平氏極盛ノ時平清盛ノ造營スル所ニシテ、其結構崖ニ倚リ水ニ架シ、長廊繞列シテ滿潮ノ時ハ殿廊共ニ水上ニ浮出スルカ如シ、島上ニハ彌山アリ沿海ニ七浦ノ勝アリ、風光極メテ佳ナリ

(二五) 外交使及留學生ハ何帝ノ時ニ初マリシヤ

謂ク神功皇后三韓ヲ内屬ヲ玉ヒシヨリ、外交次第ニ開ケ、推古天皇ノ朝ヨリ始メテ支那ノ隋國ニ交通シ玉フ、是ヨリ外交使留學生始マレリ、其後隋亡ビテ唐起ル、舒明天皇ノ御時、使ヲ唐ニ遣シ玉フ、此時唐使モ亦タ來ル、皆筑前ニ出入セリ、是ヨリ數百ノ留學生學問僧ヲ派シ互ニ相往來送迎セリ

(三〇) 洋學始業ノ地ヲ闡フ

謂ク徳川氏長崎港ヲ開キシヨリ、蘭人始メテ醫師ヲ携ヘ來ル、譯官西玄甫其術ト蘭書ヲ學、之ヲ蘭學ノ始トス、其後藤井三郎英文範ヲ著ハス、之ヲ英學ノ始メトス

(三一) 北海道ノ沿革如何

謂ク四國ハ上古伊豫ノ二名州ト云ヒシカ、後四ヶ國ニ分チ、國司ヲ任シテ各國ヲ治メシム、鎌倉ノ代ニ及ヒテ守護ノ管國トナル、戰國ノ時三好松永等茲ニ據リシモ、長曾我部氏ニ至リテ之ヲ略ス、豊臣氏ノ世ニ及ビ、其三國土佐ノ外奪ヒテ功臣ヲ封ス、徳川氏ニ至リ改メテ十五藩トセリ、尋テ明治ノ新政ニヨリ縣治トナレリ

(三三) 北海道ノ沿革如何

謂ク北海道ハ往昔久シク王土ニ屬セス、景行天皇廿五年武内宿禰勅ヲ奉シテ此地ヲ巡察ス、其後土人ノ叛服常ナキヲ以テ日本武尊之ヲ鎮定シ玉フ、齊明天皇ノ時阿部比羅夫ニ勅シ、討征セシム其後坂上田村麿、文屋錦麿、等前後之ヲ征シ、竟ニ其巢窟ヲ攘ヒ本土悉ク平治ス、享徳年間若狭ノ人武田某松前ニ航シテ子孫福山ニ居ル、文久二年使ヲ露國ニ遣ハシ樺太ノ境界ヲ議ス、明治元年榎本武揚等函館五稜廓ニ據リ佐幕ノ兵ヲ擧ク、後チ開拓使ヲ置キ北海道ト改メ、尋テ北海道廳ト改メテ全道ヲ統治ス、

(三三) 蝦夷千島ノ沿革如何

謂ク蝦夷ハ古ヘ王土ニ屬セサリシカ、今ヨリ一千八百年前ヨリ帝國ノ領地トナレリ、其レヨリ數百年ノ後、武田義廣トイヘル者松前ニ住シテ子孫豊臣徳川ノ二氏ニ仕フ、當時